

---

# イノセント・ジャッジ

佐々木保典

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イノセント・ジャッジ

### 【Nコード】

N2942M

### 【作者名】

佐々木保典

### 【あらすじ】

周りの皆から「卿<sup>けい</sup>」とのみ呼ばれる男は、いわれのない罪を着せられ、国を追われることになった。逃げ落ちていく道筋で、卿はゆっくりと彼を取り巻く世界の本当のかたち近づいていく。

くらい泉はどこにつながっているの。  
みんなの知るはずないところ。

\* \* \*

澱んだ暑気が夜の谷底に重くのしかかっている。

水音が耳に届かなければのぼせてしまうような季節の中で、臣下からただ「卿」とのみ呼ばれる男は顔を振り仰いで、頭上に目をこらした。夜のくらさに艶があることを愛でたのである。

斥候には不向きだが。

卿はそう思いながら、顎に滴ってきた汗を拭った。

今し方まで見えていた月は山陰に隠れ、幽かに余韻が山際を明るくさせているのみであるが、その様は、薄膜のような雲をひいて深い黒に染まる夜空に、わずかな明暗をもたらししている。卿はそれを艶と見た。夜空はまるで磨かれた黒い鏡面のようで、そうするとつまり、あの空に映っているのはこの地上であり、そこを這う私達かと思うと、不思議と滑稽に感じる卿だった。自分たちはあくせくとかかを成していると思いこみながらも、その実何ものをも生み出していないのではないか、というむなしさを思ったのだった。

やがて、その光の余波さえ遮って、卿を中心にして肅々と進む騎馬集団を、黒い森が覆い始める。光が見えないことが心許ない、ということとはさすがにないが、自分がいつまでも美しい遠景を見つめていられる身分ではないということを改めて思い知らされるようで、卿にはそれが少し寂しかった。

私は辺境が好きだ、と卿はひとりごちた。朝日が昇る前に感じる、ともすればはつきりと視覚出来るような張りつめた故郷の空気が、彼は好きだった。人がそれほど多くないということがなによりも素

敵だと思つたものだつた。

それが何の因果かはわからないが、中央に呼び寄せられ、王のもとに侍ることになった。王室の人間の前世を読むという、特別に格の高い占い師の老婆にそうすべきだと告げられたとき、卿が一も二もなく頷いたのは、単純に権威というものに怯えたからだつた。着任してみれば過去の自分を鼻で笑つてやりたいほどのつまらない怯えであつたのだが、夢から覚めたと思えば割の良い仕事にありつけたわけで、占い師には感謝をせねばならないのだろう。だが、考えれば考えるほど不穏当な激情が脳裏を何度もかすめていくばかりで、とてもそういつた気分にはなれなかつた。

占い師は卿に、お前は次代の王になる人間だといった。よもや、全てをその場ですっかりと信じた卿ではなかつたが、そういった生活への憧憬がなくなつたかといわれれば、はにかんで誤魔化すしかない部分は否めなかつた。

卿の後ろには彼の配下の人間が続く。声を潜め、夜の闇にとけ込むように意識をしながら歩く彼らを見て、卿は幻想をふりはらつて現実というものを噛み締めなければならなかつた。というのも、卿には彼らが自分の内側から自分の身上を嘆く不安そのものに見えたからだつた。時折見え隠れする配下の青白い顔が、もしや鏡に映る自分の顔なのではないか、とさえ思つた。

それでも、私は顔色を変えることを許されない。

卿は諦念を感じて嘆息した。

まあ、それもおもしろいではないか。最近ではそう思うようになった。変えられない現実を嘆くよりも、変えられるかもしれない将来を夢想する方が自分には性に合っている。自身がこの現状に置かれるに至つた状況は省察に値するが、後悔する余地があまりにないために、情感を抜きにして置かれている立場をうまく認識することが出来ないことが、卿には煩わしかつたともいえるだろう。

とにかく、現況は任された仕事に正面から向き合う努力が必要だと、卿は自分にいい聞かせた。

「偵騎の戻りが遅くはないか」

うちかかるような闇の色彩におよそ似つかわしくない女性の声が、卿の心情に寄り添うように拡がった。卿の配下で副官の役割を担う、イリシアである。

「い、いえ。まだ戻りません」

イリシアは麗しい見た目をしているが、残念ながら他を圧倒する威も持ち合わせている。卿はその荒削りの宝石のような美しさを良しと見ていたが、応対した若い騎士の声には恐怖の色が察せられた。イリシアは自分に脅える部下に不快氣にため息を吐くと、正面を向いた。後ろにわいた苦笑は、一々氣にしないようだ。

「卿」

イリシアの紫色の髪から香氣が立ちのぼって、卿の鼻をかすめた。それはイリシアの故郷に咲く花の香りだと、卿はかつて彼女に聞いたことがある。卿は出会った頃虚ろだったイリシアのか細い声を覚えていたので、あのしおらしい娘がこうも変わるとはと苦笑して、彼女を振り返った。

「偵騎の戻らぬうちに進まれる速度にしてはかなりお速いのでは」

「男達に囲まれてここで寝るつもりかい」

卿はにつこりと微笑んで、イリシアを見た。卿の声は仲間内によく通るので、後方から笑いがまたわいた。卿の顔に下卑た様子は見受けられなかったことが、かえって彼女に不快感を募らせたようで、赤い花がさつと翻るように、イリシアの頬に血の氣が昇った。夜の闇の中にそれが明らかなほど、彼女の肌膚は白く美しい。

「そういう意味ではないことぐらい、わかりそうなものです」

「わかる。実に、よくわかる」

「だったら」

いいながら、イリシアは馬を卿の横に並べた。

「そんな怖い顔をしないでくれ。君はこの隊の華なんだ。君が笑ってくれなければ、いったいわたしの部下たちは何を心の支えにすればよいのだろう」

「お戯れを。我々は卿の麾下です。卿こそが支えなのです」

「中心は君だよ、イリシア。わたしは君を失いたくない」

イリシアをのぞき込む卿の目に彼女は軽い戦慄を覚えたようだった。それほど、卿の目は優しかったのだ。

「ばか」

彼女はそういつて思わず瞳を伏せるのだった。卿は彼女のいじらしさの余韻に浸ってひとしきり笑った後、手綱を引き速度を緩やかに落とし、やがて止まった。

「どうやら戻ってきたようだ」

イリシアは顔を上げて卿の視線の先をいぶかしげに眺めた。

街道　と呼ぶにはあまりに細い道筋の脇は、鬱然たる森林の黒さに染まっている。

卿がそういったとき、イリシアを含めた配下の眼には戻ってきた偵騎の姿は何処にも捉えられなかったが、やがて木々が擦れあう音がして、一人の人間が顔を出した。隊の後列からも一騎、帰還した兵卒が馬を寄せている。

「聞こう」

卿はまず横合いから顔を出した兵士に瞳を向けた。彼は浅黒い膚の中に、瞳だけが一人歩きするかのような光をさまよわせて、隊がこれから向かうとする地の情報を口にした。彼の夜目は隊随一である。

「シエド領内に大軍の姿はなく、戦闘が起こっている様子はありません」

「そうか。いたって平穏か。それは人のいる平穏さか」

何も無い、ということは何かがあるということでもある。卿は人がいないと見せかけているのではないか、ということに気にかけたのだった。

「はい。ご懸念には及ばないものです。領内では祭事が執り行われておりました」

「まさかとは思うが　その祭りを我が国は隊伍と見誤ったのでは

ないだろうね」

卿が苦笑すると、彼も笑い、ご冗談をといて瞳を伏せた。これ以上話すことはないようである。

声にこそ出さないが、隊の中に緩やかな動揺が拡がりつつあった。卿はその感情の起伏をなだめるようにゆっくり馬首を巡らして、イリシアの不安げな顔を見てから、後ろの騎兵に向き直ると、他の兵達が二人の間に道を空けた。

「宮城からは、もう兵が出た、か」

卿は兵の顔に滲み出た憂いを、鮮やかにすくい取って、質問を確信に変えた。

「はい」

応えた兵士は隊内部でもとりわけ若く、卿が別の隊から呼び寄せ、出発する直前に、隊の人間に引きあわせた新兵で、名をモリアスといった。

「主管は誰か」

「トリー様です」

「軍容は」

「およそ五百。騎兵に歩卒が二割。歩卒の内さらに二割が魔手であると思われます」

モリアスが聡明そうな長い睫毛をしばたいてそう答えると、隊内に明らかな動揺が奔った。とりわけイリシアの心の揺れざまは大きかったらしく、上気した顔を指揮官に向けたが、卿はそれには取り合わなかった。その間が、彼女の怒気の部分に触れたらしく、イリシアは語気を荒げて卿に詰め寄った。

「話が違う。なぜ我々になんの断りもなく、兵を動かす必要があるのか。卿、本隊は『聖族』から三隊ではなかったのですか。それにトリー殿は法王騎士団の長であって、今は北方諸国の制圧に出られておられたはず。モリアス、見間違いということはいいの？」

「副官、それはありません」

イリシアの視線に気圧される新兵は多いのだが、モリアスは真正

面から向かいあつて背筋を伸ばしたまま強い口調で答えた。

「ありえない、だ。見間違える、ということがか」

「はい。ありえません」

「どういうことだ」

手綱をふるってイリシアはモリアスに近づこうとした。その軌道の上に卿が重なる。

「副官。争点が違うよ」

「しかし」

彼女は頬を紅潮させて気色ばんだが、卿はそれを右手で制した。

「さて、どうも出発前とは雰囲気が違う。鎮圧しなければならない辺境でのいざこざなど影も形もなく、話に聞いていた本隊は来ないあげく、斥候に出された我々の帰りを待たずに頼んでもいない兵が出た。まあ聡明な諸君なら、この先の展開をうすうす感じているだろう」

イリシアを除く他の隊員は一樣に声を押し殺して笑った。

「笑い事ではありません」

「イリシア、やはり君は隊の華だね」

卿の微笑に、今度は応えず、彼女は冷静な武人の顔を見せた。瞬間の怒り、それを冷静に捌く理性。卿は、まるでつぼみが翻り、咲き誇ってまたしぼんでいく様を一瞬に見せられたようだった。卿はイリシアをまったく素直に花であると感じていた。しかし今宵のイリシアは、毒を含む花として咲いた。

「卿。なぜ、宮城をモリアスに確認に行かせたのです。こうなるとわかった上で斥候に出られたのですね」

「どうなろうと、今の私にお上に逆らうことなどできないよ」

「私は構いません。しかし、もっと小編成でもよかったはずです。部下の命を軽んじておられるのでは？」

「我々の編成は斥候の最小単位だよ。これ以上は小さくはできない」「そんなことはわかっています。私はそこに卿のご意志が介在する余地はなかったのかと問うておるのです」



「なかった、といえば？」

「丹念にあなたが法国の属人であることを罵って差し上げます。その苦痛が快樂となりあなたの全身を麻痺させるまで」

「イリシア、あまりそういったことを大きな声でいわれては困る。

それに、それではまるで私に妙な性癖があるようじゃないか」

「何をいつておられるのですか。ご自分の器量がおわかりになりませぬか」

「君と比べれば、はるかに狭いよ」

「ばか。そういうことをいつていてのではないことくらい」

「わかる、わかる。実によくわかる。だからそんなに近づくな。おいみんな、笑つていないで助けてくれ」

「いやですよ隊長、と皆。

「なぜだ」

「私どもの指揮官のお手並みを拝見するにはよい機会です」

「そうですね、隊長。これぐらいの窮地は軽く立ち回っていただかなければこれからどうするんです」

部下たちは口々に勝手なことを言つた後、

「それに」

「それに？」

「私どもの口には痴話喧嘩は合いそうもありません」

と、声を揃えたのだった。

「おいおい」

「あなたが彼らの命を甘く見られているからこういう事になるのです」

「いやあ、私に全幅の信頼を置いていなければあんな事はいえないと思うのだが」

「あなたは、それを逆手にとっている」

「それじゃあまるで悪人だ、私は」

「極悪人です。私が司法を担当しておれば極刑に処しても私の心は収まらぬでしょう」

「それでは司法はつとまらぬ」

イリシアはもうほとんどからだをぶつける勢いで、卿に寄りかかっている。深く沈んだ黒い瞳を見るとそこに卿は映っていないかった。わずかな明かりさえも内側に取り込んでしまうのか、それとも私はここにはいないのか。それなら、その方がどれだけ楽だろう、卿はそれを望んでいる。私がいる、ということがどれだけの人間を動かす力になっているのか見当もつかないことが、どこか不安であり、恐ろしいことでもあった。

つと、彼女は口を結んだ。何かに弾みをつけているように卿には見えた。

「トリー様は、庸器ではない」

イリシアの瞳に宿る気炎に寂寥感を感じた卿は、彼女が自分の命を惜しんでいることに気付いた。

「標的はやはりわたしなのかな」

卿はとぼけた。イリシアには心配をかけたくないという想いが、彼にそうさせた。だが、彼女はきつとそういった心遣いにまで気を巡らしているに違いなかった。

「約束した三隊ではなく、遠方にいるはずの將軍がお出ましのです」

「では、『聖族』三隊は検分に訪れるということか」

「あるいは、何も知らされていない」

「やれやれ。つくづく運がないな、私は」

「何を仰つても無駄ですよ、卿」

「承知しているよ。ただ、まともにぶつかってどうにかなるお相手じゃない」

実状はどうあれ、卿の心は浮ついているわけではない。イリシアのきつい眼差しからゆっくり目を逸らし、そのまま他の部下に顔を巡らせた。月も星もなく、暗鬱さのあまり心すら埋没してしまいそうな森の中で、不思議と皆の顔はよく見えた。

「トリー殿は五百で、我々はわずかに十二人。三人の優秀な魔手も

さすがに分が悪かろうね」

魔手は、卿の隊の中で特に重要な位置にいる。彼らは、物事の因果を少しずつずらすことができる。彼らの存在がなければ、過去に幾度も朽ち、土にまみれ、骨を拾うものすら現れなかっただろう。隊の中でも最古参の魔手たちは、一様に卿の言葉に頷いた。

「となれば」

「逃げるほかない」

卿の言葉はイリシアが繋いだ。

「ということに、なる。しかし、理由もなく追いつ立てられるのは、少々癪だ」

「向こうにはあるのです」

卿はやれやれ、ともう一度呟いて皆を見回した。

「国に帰りたい者は帰ってよい。トーリ殿がご執心なのはどうかやわたしの首であることだし、君らにまで危害は及ばないだろう」

「卿」

と、声を上げて一歩馬を進めたのはモリアスだった。

「なんだい」

「わたしは卿が凡将だとは思いたくありません」

「それは、わたしが一番願っているよ。誰にも負けなくらいね」

卿が笑うと、モリアスもあわせて微笑んだ。彼は、若さの下地に聡明さがあり、人付き合いの機微をよく理解しようとしている。

卿にはその苦心がよくわかった。

「恐れながら申し上げます。ここから国までは一本道です。トーリ様はわずかに歩卒のみが歩ける間道にも兵を通してくるでしょうから、いま帰路をとれば必ず顔を合わせるようになります。今日、城門をくぐったのは我々とトーリ様の部隊だけです。名簿に照らし合わされれば、おのずと我々の所在は明らかになり、そうなる和我々の帰還と卿の生存は両立しない類のようになります。卿に本当に我々の安寧な生活を祈っていただけでしたら、今この隊以外に生きる場所はありません」

卿はモリアスの顔をじつと驚いたままの瞳で見つめ続けた。そして、声を上げて笑った。

「なるほど。わたしは凡将だ。わたしが死ななければ、皆を自由にできない。モリアス、感謝を。それに、私をまだ恐れている人間がいるとは思わなかったよ」

モリアスは苦笑して一仕事終えた顔つきで頭を垂れると、さらに一歩退いた。

「さて、では当初の予定通り隊を四つに分ける。ただし、斥候ではない。皆指示したとおり、間道を走りシエド領内には入らず、第十四演習場で待て」

皆が馬の腹を蹴るのを見てから、イリシアは卿にささやいた。

「どこまで、お逃げになるおつもりです」

「どこまでも」

「卿」

「冗談だよ、イリシア。いつまでも逃げるつもりはない。トリー殿は名将で、わたしは庸器なんだ。逃げ続けるなんてことはできない」「何か策が？」

「今は ない。しかし、その代わり彼らにも大義名分がない」

「宰相閣下が亡くなられております」

「それは、私がやったのではないよ」

「さあ、どうでしょう」

「驚いた。まさかイリシア、私を疑っているのか。そうか、すまなかった。今まで辛い思いをしてきただろう。いつその場で叩き斬つてくれ。君の潔白は証明できそうだ」

「ばか。私たちの言葉などなんの意味もなさない、ということですよ」「その通りだ。では、我々の言葉ではない、誰かの言葉を借りるのがよい」

「誰のお言葉です」

「法王猊下がよろしいが。難しいだろうね」

「シエドは行き詰まりの地です。この街道を行く限り、逃げ場はあ

りません。どうやって王宮に戻られるおつもりです」

「それもまだ考えてはいない。しかしそうか、息詰まりの地か。それはいい。ならば、溜め込んだ息は吐き出さなければ健全とはいえない」

イリシアには卿の言葉の意味は明らかではなかったようだが、卿はその先には触れなかった。

「ああ、イリシア。見てごらん」

突如、卿は空を見上げて高い声を上げた。思いがけず木々がひらけた地で、狭間に星が見えた。むらくもが去ったのである。

「私はね、イリシア。いつか空を飛んでみたいんだ」

「はは。いつかとは、いつですか。いつか鳥になるとでも」

イリシアの笑声に少々の嘲りがあったので卿はむつとしたが、それはなるべく表にはださず、イリシアの問いに答えた。

「そうさ。いや、きっと昔はあの大空を自由に飛べたのではないかな」

「まさか。我々は鳥ではありませんよ」

「まったく、イリシアには夢がない。鳥であつたかもしれないじゃないか。それに、鳥でなくても何かあつたかもしれない。イリシア

。それでは、嫁ぐときにどうする。子に何も教えてやれない」

「いつの時代も、そういつたことを教えるのは夫の役目では。それに、私は卿のお側からは離れるつもりはありません」

「君の父君の苦勞を慮ってみると、胸が張り裂けそうになるよ」

「卿。妻を、というお話なら私をもらえばよろしいのです」

「ああ。なるほど」

卿は、まったく気付かなかったという風に視線を星空からイリシアにうつした。

「皆が痴話喧嘩というわけだ」

「ばか」

いい夜だ。卿はそう思う。

湿気が多く、甲冑も重く感じるが、心は暗くない。卿は心底で、

イリシアに深い謝辞を示した。彼女の気遣いの見事さは、賞賛に値する。

私は。

追いつめられていくだろうか。

状況を打開できないままに。

しかしその時は、最善の策をとり、部下を野人にして散らせた後、私が死ねばよい。イリシアは殉じるだろうか。それだけは避けたいが、次の世界への道連れがイリシアであればよい、と思わないかといえ、嘘になる。

目を閉じると、芳醇な森の匂いがあつた。数多の生物の堆積物である土から発せられる破壊と創造の混合物の匂い。私が壊れて消えたとき、何が生み出されるのか、卿は甘い幻想を心に抱いた。それが空を雄大に飛ぶ物であれば、故郷を捨てた価値がある。

## 1 - 1 (後書き)

また性懲りもなく、書き始めました。今度はファンタシイです。だけれどゆっくりSFになっていくと思います。た、たぶん。もはやいつ終わるかわかりませんが、お付き合いいただければ幸いです。

「どうした」

と、同僚に問われてモリアスは我に返った。

「あ、いえ。なにも」

「なんだ新入り。いいたいことがあるんだろう」

ツアイという名の同僚はモリアスの二つ年上だと卿に教えられた。年よりもずっと若く見える。少年といっても差し支えない。屈託のない笑顔を見るたびに、モリアスは不思議な錯覚にとらわれる。

「俺の悪口か」

たちの悪い冗談だとモリアスは苦笑いした。

少年の白い歯と浅黒い肌の対照は見事で、兜の端からもれた髪は獣のたてがみのような艶めかしい黄色だった。出自は皆と同じシルウィア法国、つまりこの国だといっていたが、雪の降らない南部の人間であろう。それもとりわけ南の日差しの強い地域だ。

「ツアイ殿。前を見て走らなければ」

「そんなのは馬にまかせておきやいいんだ」

ツアイはいいながら綱を引き絞って、モリアスと並んだ。

「それに」

ツアイの視線に吸い寄せられるように前を見ると、背筋をしつかりと伸ばしたまま馬に跨る男の姿が見えた。

「あの人がいる」

「キル殿」

「あの人は何たって真面目なんだ。俺のお守りにはちょうど良いって卿が」

「いいのですか。そんなことって」

「勘違いするなよ、新入り。そりゃ、確かに息苦しいときもあるけどさ、俺はあの人嫌いじゃないんだ。もちろん卿のことだって」「なぜ、卿の話を」



モリアスの質問に、ツアイは口ごもった。少しばつの悪い顔をしているところを見ると、隊内におせっかいな噂でも流れているのだろう。

「まあいいじゃないか。それより、何のことを考えていたんだ。お前こそ、前を見て走るべきじゃないか」

「そんな顔をしていましたか」

「ああ、していたね。さっきのお前とは別人。声も別人」

「さっき？」

「ほら、卿に進言したときさ。あれでもあの人の怒らせるところええんだ。よくやるなって思った」

「だから私が卿の連れ子だと思った？」

「な、ばかか、お前」

ツアイの顔色がはつきりと狼狽した。やっぱり、よこしまな噂があった。あるいは元凶はツアイか、とも思ったがモリアスはうるたえている彼を見てそれ以上はいわなかった。

こほん、と咳払いを一つ、ツアイは言葉をその先につなげた。

「そ、そうなのか」

モリアスは笑った。声を上げて。先頭に行くキルが少し後ろを振り返ったので自重したが、ここまで心から笑ったのは久しぶりだった。ツアイの顔のおかしさといったら、まるで好奇心の塊で、やっぱり子どもだ。

「なんだよ」

「あはは。違いますよ、ツアイ殿。私の年と卿のご年齢を考えてみてください。シルウィアの法では子が産めません」

シルウィアの国内法では、成人に満たない者の性行為を厳格に禁じている。シルウィアはシルウィア正教の宗教観の基に社会が構成されており、二十に手の届かない人間は完成されていないという価値観が一般的で、それまでに性行為を行うことは、魂を本当に自分のものにすることを妨げるという『教え』があった。モリアスは十八歳になったばかりで、卿は二七歳とすればどう見積もっても話が

合わない。仮に卿が法国にくる前に成人未満でありながら性交渉をし、子をもうけたとしても、九歳という年齢はいささか現実離れしている。

「そうか、はは、そりゃそうだわな」

ツアイの顔からは狼狽の色は消えたが、安堵と悔悟がないまぜになったような表情が続いて浮かんだのを、夜に慣れたモリアスの目は捉えた。自分の出自が賭の対象にでもなっているのかもしれない。「それに、郷里には母もいます」

モリアスはツアイの希望を打ち砕くためにそういったのだが、ツアイはむしろ目のかがやきを強めてモリアスを見た。

「母？母さんだけか？」

「ツアイ殿。まさかとは思いますが」

「あ、いやいやいや、あの今は忘れてくれ」

まったく、下世話なことが好きな子どもだ。モリアスは自分が年下だということすら忘れて、そんなことを思った。

しかしまあ、とモリアスは考える。

卿が父であれば、それは素晴らしいことだ。

「てことは、モリアス。お前は父親の顔は知らないわけだ」

「モリアスと呼ばれるのは、初めてですね」

嫌いになれない人だ。モリアスは微笑みを返す。

ツアイは心情を覆い隠さない。もしかすると、そういった行動は苦手であるだけなのかもしれない。しかし、いいたいことがあると顔に書いておきながら、何もいわない人間よりは遙かに居心地がよいのだった。

ふと、モリアスは気付いた。そうか、それは自分のことでもある。ツアイはそれを見咎めているのだ。私であれば、たぶん不快気に、目を逸らすようなことであるのに。そう思うと途端に、胸の底からこみ上げてくる微かな罪悪感を敏感に感じるようになった。

「そうだったかな。お前もさ、ツアイどのなんてのはやめてくれよ。なんか、こっぴどくかしいや」

「はい。ツアイ」

「へへ。なんかいいね。弟できたみたい」

私の方が兄貴なのでは、とモリアスは密かに思ったが、口に出すのはやめておいた。

「ツアイ。父の顔は知っています」

「へえ。じゃあ、親父さんはお前が小さい頃に死んじまったわけか」  
「いえ。今も生きているんです」

「なんだか、色々とありそうだな」

「私がうかない顔をしていたのなら、それは父のことを考えていたからかもしれません」

「父親はきらいか」

「きらいとか、好きとかとは少し違う気がします」

「敬語もやめちまえ、モリアス。俺とお前は、そんなに違わない。敬われるほど俺はえらくもないんだ」

「ツアイ。あなたは、正直だ」

「よくもわるくも、さ」

モリアスとツアイは暗闇で微笑みあった。見知らぬ兄弟の顔を初めて見たように。あるいは、過去、どこかの世界で二人は本当に兄弟であったのかもしれない。シルウィアの人間は、前世を信じる。互いを知ること、過去の自分を見つめているのかもしれないと二人はまったくそれぞれに思った。

「それでモリアス、親父のことはどう思っているのさ」

「わからない」

「わからない？」

「簡単な感情じゃないんだ、ツアイ。それにたぶん、僕の父親は、僕を知らない」

森がひらけてきた。三人がゆっくりと馬を走らせているのは、旧街道と呼ばれるものの内の一本である。といっても、獣道ほどの細さしかなく、かろうじて道と判別できるのは木々の生育が悪いといった程度であった。道はシェドの周囲を覆う外輪の山の一つへと昇

る道程であり、ここから山道となる。

星の揺らめきが天蓋にさえずるのを見るツアイの瞳には、妖しい  
燦めきがあり、モリアスはふとそれに惹かれている自分に気付いた。  
弟が兄の中の、自分がまだ見知らぬ領域に魅了されるように、いず  
れは兄に反発する体のいい口実になるような憧れだった。

弟は、不条理だ。

両親からの独立とともに、兄からも自立しなければならない。

「モリアス。星が子を産むという話は知っているか」

兄がだだをこねる弟を諭すように、ツアイは優しい瞳をこちらに  
向けた。

「星が？」

「ああ。俺の婆さんに聞いた話だ。星は最後には大きな爆発をして  
飛び散る。その飛び散った破片が新しい星になるんだ」

「本当かい。本当なら、素敵だね」

視線を天空へと戻すツアイにつられてモリアスも空を見上げた。

「子を産むというのはそういうことなのかもしれないぜ」

「どうということさ？」

「親は爆発するんだ」

「何いってんだ、ツアイ、僕の親父はいるよ」

「そうさ、親父はいる。でも元になった男はもういない。男は爆発  
して、親父と子どもを生むのさ」

「爆発しなきゃいけないの？」

ツアイは、口をつぐんで押し黙った。

「ねえ」

「まあ、あれだ。だから親父さんはその過程で自分の息子のことを  
忘れてしまったというわけだ」

「ツアイ。僕の話、真面目に聞くつもりあるかい？」

「あ、あるよ」

「君のご両親は？」

「生きてる生きてる。そりゃあもうわけわかんないくらいに生きて

るさ」

「そうか。元気なんだ」

「俺に僧侶になれなんていうから逃げてきてやったよ」

「そう」

「どうしたんだ？」

「母は、目が見えないんだ」

「病か」

「いや。自分で潰したんだ」

「なに」

ツアイはさつと自分の目を抑えた。モリアスにもその感覚はわかる。暗闇に目が慣れるのを安心できるのは、また日が昇るのを知るからであって、もう二度と何も見えないのだとしたら、私も発狂してしまうかもしれない、とモリアスは感じた。もう何物をも形として目で捉えることはできないなどとは考えたくもない。しかし、モリアスは物心ついたとき母からその経緯を聞かされたとき、そんな母の姿を見たくないとか確かに感じたのだった。

「なぜだ」

「僕の郷里は、元々シルウィアの版図じゃなかった。僕が生まれる少し前にシルウィアの侵攻を、といってもほとんど抵抗もしなかったが、受けた。父はその隊の指揮官だったんだ」

「お前、望まれない子だったのか」

「ツアイ、君は本当に正直だな」

モリアスの微笑に寒気を感じてはじめて、ツアイは自分がいかに不味いことを口走ったのか理解したようだった。

「すまん」

「いいよ。事実はどうじゃない。二人は愛しあう仲になった。だけど、そう、望まれない子どもだといわれればそうかもしれない」

「望まれていない人間などいない」

「それは、自分なら確かにそうだ。だけど、誰かにとってみれば望まれない子もいる。母は、僕らの郷里の数少ないシルウィア抵抗派

の人間だった。それが、シルウィアの将校の子をもうけたなんて知れたら、いったいどんな扱いを受けるか」

「それで目を」

「片目は親父が潰した。後で叔母に聞いた話だよ。父は泣きながら母の目を抉った」

「なんてこった」

天に向かってツアイはそう呟いた。ツアイの声には心底の悲哀が滲み出ており、モリアスにはそれは新鮮な感覚だった。彼は心情を覆い隠さないばかりでなく、他人の感情に素直に寄り添っている。モリアスに愛しさを抱かせる力を持っている。ツアイとは、入隊してからほとんど口語を交わさなかった。つまり、見た目や雰囲気で見接していたわけで、もちろんその放蕩気味の樂觀主義者ではないかといった印象は、むしろ確信めいて揺るぎないものになりつつあったが、言葉を交わしたことで見えてくる心の風景にモリアスは少しの間心地よく酔うことができた。

酒の感覚は嗜まないのでもないが、モリアスの感覚ではまさしく酔うという印象であり、もし酒場で見る皆の酩酊具合の底にこのように胸裡の狭間をたゆたう快さがあるのなら、口にしてみてもいいと、モリアスは感じたのだった。

しかし、ツアイと話していると、自分が思考していることがいったいどこまでに及んでいるのかわからなくなるときがある。悲痛に染まっているはずの自分は、すでに起こった事象として自分の過去をすこぶる冷静に見ている。ツアイは、むしろ自分になりきっている。モリアスはこの状況に反発せず、主体と客体のない交ぜになった空間をむしろ楽しもうとして、わざとツアイの感情を逆なでするように言葉を選んだ。

「二人の関係のためには、僕は望まれてはいけなかったんだ」

「モリアス、生まれたことに感謝しろ。お前はこうして生きているじゃないか」

「感謝しているよ、もちろん」

「俺に出会えたからか」

「気安い男だ、ツアイ。そういうセリフは女性にいった方が良い」  
「女は嫌いだ」

今度は、二人とも声を押し殺して笑った。先頭を一定の距離離れて進むキルは、それでも後ろを振り返って二人に自重をすすめたが、すっかり物見遊山な気持ちになった二人がそれを受け入れることはなかった。

しかし、とモリアスは考える。悲痛な話題がいつのまにか転じて明るい空気を作っている、ということには不思議な感覚がある。自分分は、父が憎いわけではない、とはつきりと誰かにいわれた気がする。ツアイにそう告げると彼は馬の背を撫でながらこういった。

「実際そうなのかもしれない。お前は父親が憎いんじゃない、ただ会いたいだけなんだ。優しく振る舞ってもらえるのを待ってるんだ」

「そうかな。僕は、父が、母が後々どうするか考えないままに母を愛したことに納得がいかない。もしかしたら、それを憎むということと勘違いしているのかもしれない」

「モリアス。お前人を愛したことがあるのか」  
「実はない」

「じゃあ今のお前にはわからんさ。どうしようもないこともある」

「ツアイはあるのか」

「いっただろ、女は嫌いだ」

「じゃあ君にもわからないんじゃないか」

「どうしようもないことはわかる。お前の親父はどうしようもなくお前のお袋を好きになった。それでおしまい」

「僕の気持ちはどうなるのさ」

「生まれてないヤツの気持ちなんてわかるもんか」

「そりゃ、そうだけでも」

確かにそうだ、とモリアスは吐き出した言葉とは裏腹に納得していた。人にとっては現在というものが何よりであって、過去や未来

はそこから生じる波紋のようなものに違いない。過去の父と母にとってモリアスはまさしく跳ね返ってきた波紋なのであり、しかしだからといって、動かないまま制止している過去の両親は、ある時を過ぎた自分たちを未来の視点からどこか別の場所に移動させることはできない。

だが、とモリアスはいぶかしんだ。

あの、そうあの父が先のことなど考えずに生きてたろうか。母の目のことを置いておいても、だ。自分は父を憎んでいるわけではなく、不明な謎の部分を父の口から聞きたいと思っている。モリアスはふと、おかしいことだとはわかっていながらも、自分の思考の流れに終着点を感じた。

「だけど、あの人がそうだとは思えないんだ」

「そういえば、お前は親父を知っているんだったな。シルウィアの将校だろう、俺も知っているかもしれないんだな」

「知っているよ、たぶん。有名な人だから」

「誰だよ。教えるよ。まずいか」

「いや、かまわない」

モリアスの言葉は続かなかった。

馬のいななきが闇と二人の会話を破った。モリアスの馬が前足を振り上げている。

前方から、キルが大声で二人を呼んだ。ツアイは咄嗟に体をこわばらせて周囲に気を配る。モリアスは必死に馬をなだめようとするが、しかし、うまくいかず振り落とされた。落とされた足もとには、地面がなかった。

「モリアス！」

山道のすぐ脇が崖であることに、弛緩しきった思慮が気付くまでにいったいどれほどの時間があっただろう。もう少し早くに現状を把握していれば、という後悔がモリアスの脳裏に湧き上がった。かろうじて、道ばたに手をかける。下を見ると黒い森が横たわっている。高さは目視ではよくわからない。じつとりと冷たい汗が背を流



れていった。

「待ってる。今　ちっ」

ツアイは後ろに接近していた人影に剣を向けていた。

「てめえら。トーリの身内かよ。くそ、早すぎだろ」

「ツアイ」

「おい。しっかりしろ。なんとかはい上がれるか。ここは持たせてやる」

「やってみる」

そのモリアスの手の甲に、矢がつきたった。激痛が通身に及んでモリアスの意志が崩れ去ったとき、彼の体は大地の上になかった。

「モリアス！」

過ぎ去っていく山並みや、ツアイの声がもはや遠い。どこまでもどこまでも自分のからだは落ちていくようで、モリアスの意識もやがて奈落へと呑み込まれて、途切れた。

我々はシルウィアという文化の奴隷なのだ、といった父の言葉が耳から離れない。いったい父はどういうつもりでその言葉を呟いたのだろう。私に聞かせたいということだけはなんとなくわかったけれど。

そんな思いで家路を急ぐ少女がいる。

随分と帰りが遅くなってしまった。父の容態が心配だ。

少女の父は病に冒されており、ここ数週間具合が悪かった。生死の狭間をさまよっている、といっても過言ではない。いや、そもそも父は寿命なのかもしれない、と少女は思っ、て、しかしかぶりを振った。そんなことを考えたくはない。が、一度考え始めたよからぬ想像を、いつしか気付かぬうちに何度も反芻している自分に怯えて、少女は足を速めた。

まるで、遺言のようではないか。

恨み言は口にしたことのない父だった。シルウィアへの反抗は父の代で始まったことではなく、少女の一族に代々根付いている感情だった。父はいわば民族の誇りとでもいうような感情の螺旋に組み込まれながらも、感情をかたちにすること、つまり行動が表現としての手法の全てであり、それ以外に考えようがないというような人だったが、少女にはそれが叶わなくなってきたから、ついに口をついて恨み言が現れるようになってしまったのだと感じられた。

私に後を継げといっているのだ、と思い当たってルーシェという名の少女は背筋に冷たい気でもあてられたような錯覚を得た。シルウィアへの怨みは当然にある。それは少女にとってみれば血の中に沸き立つ鉄の匂いの様なものであって、否定する材料はどこにも見当たらない。しかし、実際にシルウィアの兵士を見て、刃を交えるとなれば話は別だ。私は女だ。戦って誰かを傷つけるのはいやなのだ、と少女は通りすぎる木々に向かって口にするのだった。さわさ

わと鳴る木々がルーシエの呟きにいちいち応えてくれるとは思えなかったが、自分以外に誰かいると考えなければ、ルーシエは自分と木々の間に相違がないのではないかという危惧を覚えた。

この道はいつもの道。木につけた目印がある。ルーシエはそれを慎重に確認しながら歩いた。人を襲うような大型の獣はここにはいない。だけれどもそうだからといって、安心できるほど夜の森を甘く見てはいけないことくらい十分に承知してもいる。だからルーシエのすぐ背後に自然現象とは思えない木々のざわめきが起ころとも声を上げて飛び上がったりはしなかった。ただ、どうしてかわからないが、ルーシエはくりと反転して音のした地点に体の正面を向けていた。ルーシエは懷に刃物の柄を握った。人を襲う獣はいないが、人を襲う人間はいる。

シルウィアの首都に隣接するルーシエの集落は生粋のシルウィア人のものではない。シェドと呼ばれる地域に住むルーシエの一族は、八十年前にシルウィアに併呑された過去をもつ。以来、シルウィアの支配下に置かれることになった地区だった。

シルウィアは特に何かをシェドに望みはしなかった。特有の宗教観に基づく祭事は許され、武装についても何もいわなかった。というよりも、ほとんど自治は住民に任されるほどであった。一点だけ、シルウィアがどうしても譲らなかつたのは、シルウィア法の施行である。住民による統治はシルウィアの法を根底として推し進めることが条件だった。シルウィアの法律は悪法ではなかつた。一部の主要な人間に権力が偏ることはないように工夫されていたし、雑多な民族が一つの国として機能するように、長い歳月をかけて熟成されてきたものだった。シェドの代表は要求をのんだ。だが、後になってこの選択が民族の存続を危ぶむようになってから、シルウィアに対する悪感情が急激に募つたのである。

問題はわずか数ヶ月で起こつた。

シェド領内に派遣されてきたシルウィアの事務官が、彼の常識では明らかに子どもだと思われる少年や少女が自分の子をもうけてい

たことに気付いたのが発端だった。事務官はこの事実を本国に届けて、シルウィアはシェドの長を国家への反逆と見なして拘束した。シルウィアの法は二十歳未満の人間の性行為を禁じている。シルウィアの法を破ること、それはシルウィア正教への叛逆だった。しかし、そうでもしなければ、彼らは民族の形態を保っていられたかったのである。

ルーシエの一族は一樣に短命だった。ルーシエの祖父は三十八歳で死んだ。ルーシエの民族の中では標準的な死期だった。ルーシエはしかし祖父の顔を知っていた。彼らは短命ゆえに性の交わりが著しく早い民族で、彼女の父は祖父が十三歳の時の子だった。父は十四歳の時にルーシエをもうけているので、物心ついたときに祖父はまだ存命だったのである。

悪いのははつきりと法を理解しなかった祖先だ、とは彼女の一族は考えなかった。シルウィアという大国に、わずかな民の体勢しか携えていない小民族が対抗できる術などなかったし、護るべきものを護ることが出来るとわかれれば、誰でも首を縦に振る。問題は、シルウィアがシェドという土地に住む人間を理解しなかったことだ、と考えた。シルウィアは、そんな住民の願いを聞き届ける気はなかった。大国はシェドのような若い肉体を酷使するような民族の保持体系に悪習という名を付けた。以降、悪習に則る性行為を発見するにつけ、彼らは本国の再教育施設に投獄するようになった。シェドは民族の誇りをおおっぴらに護ることが出来なくなったのだった。父は、そうつまり、我が民族はシルウィアという文化のまさしく奴隷なのだといったのだった。一部の急進派の人間がシルウィア統治に疑問を強く持つようになり、シェドは近々自治権を失うという話も聞こえてきている。シェドの民族はさらに減少するだろう。

ルーシエは民族のためにシルウィアの動向を集落に報告する仕事をしている。今年で十四歳になる。もう民族の風習では子を作ってもいい年である。ルーシエはしきたりを破るつもりなどなかったが、自分の体に別の命が宿ることをまだ奇異だと感じている。

だからこの仕事に精を出した。シエドとシルウィアをつなぐ街道を監視するために、森の中を日に何度も往復する。少なくともこうしている間は誰かに求愛されることもなかった。日がある内の森の中は自分自身と対話するにはいい時間だった。

後をつけられたのか。

ルーシエはゆっくりと周囲に視線を送った。

つい先程、シルウィアの宮城から深夜に兵がたった。ルーシエがその報告をもって、シエドに戻ろうとした矢先、約五百ほどの兵が後を追ったのである。先に出た兵は十二名で、哨戒かあるいは斥候だろうが、彼らが戻った気配はないので、シエド方面で何かがあったということかもしれない。ルーシエは心に焦燥感を覚えて、帰路を走った。いつもはいくらでもここにゆとりを残しておくのに、今日に限ってそれを怠っていた。その隙を狙われたのか。

初めて命の取り合いをするのかもしれない、と思いルーシエは体を硬直させた。しかも絶対に破れるわけにはいかない闘いになる。シエドとシルウィアを往還する人間が法国に知らされれば、シエドの立場は難しくなる。

音はそれ以来聞こえなかった。

群れで飛ぶ小動物の類だったのだろうか。ルーシエは注意しながら帰途に戻ろうとしたとき、人の呻き声が彼女の耳に届いた。

「誰なの？」

応えはなかった。だが確かに継続的に低い呻き声が聞こえる。ルーシエは八歳の時から森に入ってシルウィアとシエドの間を行き来してきたが、人の苦しみもがくような声を特徴とした獣には遭遇したことがなかった。それが人である可能性は高いと判じた。この道を知る別の仲間が、帰りの遅いルーシエを案じて探しに来てくれたのかもしれない。

が、ならばなぜ返事がないのだろう。

「誰かいるの？」

生唾を呑み込んでルーシエはもう一度声をかけて、足を進めた。

やはり返事はなかった。

通り道から少し茂みを分け入っていく。まるで、森の中身を覗くようだと彼女は思った。大気は湿潤してあまり気色のいいものではなかったが、触れる葉の冷たさが彼女をいやした。

次の瞬間、彼女は小さく悲鳴を上げた。

人だった。しかも、甲冑を着ている。その甲冑に見覚えがあった。シルウィア人だった。

「どうして」

ルーシエの疑問に木々が、風に鳴って答えた。折れて引っ掛かっていた枝が風に揺らされて彼女の頭に降ってきた。

「落ちてきたのか」

目を凝らすと樹木の向こうに断崖が見えた。ルーシエは自分が歩いてきた道から考えて、その断崖がシエドへと向かう山道の一つであることに気付いた。何かの弾みで道を踏み外したのだろう。

「運のない人」

ルーシエは男を見捨てようとした。どのみち助からないだろう。

覆い重なるように茂る木々や、降り積もった落ち葉が衝撃を吸収したとしても、全身を固めた甲冑がある限り、相当な負荷が男の体にはかかっている。

そんな思考で振り返ったルーシエの足首を、瀕死の男の手が掴んだ。ルーシエは自分の顔から血の気が引いていくのがわかった。

あらん限りの勢いでルーシエは悲鳴を上げた。

彼女は自分の悲鳴にも驚いて頭の中が混乱し、懷にしまった刃物を夢中でふるってかがみ込み、足もとに突き立てた。男の手の力が抜けた。

静かな森が戻ってくる。おそろおそろ手応えのあった場所を見遣ると、短剣を突き立てたのは、男の体ではなく大地で、男は力尽きたようだった。ルーシエの足もとに力なく横たわった手の甲には折れた鍔が刺さっていた。

「死んだのかしら」

男の息はあつた。暗闇に浮かび上がった色の白い顔をみて、ルーシエはその兵士が自分とごく年の近い若者であることを知った。シルウィアにも若くして戦う人間がいるのか、と思うと彼女の心の中に憐憫が少しだけ漏れた。

この男をこのまま放置しておけば確実に死ぬ。身動きのとれない人間を優しく介抱してくれるほど、森の生態は優しくはない。ルーシエは初めて自分の意志を躊躇ったのだった。父の様子は心配だが、父がもし死ぬようなことがあれば、彼女の未来はおそらくルーシエの思惑通りに廻らなくなるだろう。彼女の民族は概ね短命に加えて老成が早かったが、自己の未来を自身の手で作り上げられないということを、直視し受け入れることが出来るほど、今のルーシエは大人ではなかった。一つの偶然が未来を変えることを夢想する年頃だった。

決意をしたルーシエの行動は早かった。

男の甲冑に手を伸ばす。慎重に外傷を探す。兜に手をやって努めて優しくそれを脱がすと、美しい銀髪が流れ出た。ルーシエの鼓動が速くなる。閉じられている瞳を彼女はどうしても見てみたくなつた。男の顔に傷はなく、持ち上げた後頭部に添える自分の手が男の血に染まる想像をルーシエは抱いたが、予想は良い方に裏切られた。続いてルーシエは止血のための薬草を探した。幸い、薬草は森の中でもよく見かけられ、彼女はそれを暗闇の中でも判別できるように教育されていた。軽く掌中で葉を揉みしだく。甲に突きたった鏃を抜くと、新鮮な血があふれ出たが、大した量ではなく、彼女は自分の頭に巻いた布きれを引きちぎって薬草をすり込み、傷にあてがった。

豊かな栗色の長髪が男の顔に降りかかった。

男の瞳が開いた。

「だれか」

ようやく、言葉になったのだらう。男の音は大変にか細かったの  
で、ルーシエは耳を寄せた。

「ルーシエ。私はルーシエ」

「ああ、ルーシエ。感謝を」

ルーシエは、男の謝辞に純粹に嬉しさを感じながら、それがシエドという民族を裏切るということにもなるという複雑な気持ちが動機となり、

「いいえ。あなたを救ったのは森です。森があなたを支え、私にあなたの存在を知らしめ、そして傷を癒そうとしている」

と、いった。嘘ではない、と自分にいい聞かせているうちに、ルーシエは惨めさを覚えた。

「そうか」

「そう」

「でも」

ルーシエは小首をかしげた。男がそれきりしばらく沈黙してしまっただけだった。彼女は、男が冷たくならないことを願った。まだ、名も聞いていない。

男は、ゆっくりと呼吸を繰り返して、今度は先程よりもずっと明瞭に声を出した。

「ルーシエ。君がいてよかった」

青年はそういうと、すっと体から力を抜いた。ルーシエは焦ったが、彼は寝息を立て始めただけだった。

ルーシエは腰を屈めて地に座り込み、ふと気付いて、まだ突きたったままの短剣に手を伸ばした。が、目の前の男と自分を結ぶごく細かい絆のようなものを、その短剣は懸命に繋ぎ止めているように感じて、伸ばした手を戻し、我が子に送るような慈愛を込めて、視線を男に投げかけた。



星が見え隠れする夜の下を一つの部隊が逍遙として進んでいる。

といつても、けして私語があつたり馬首が乱れるといったことはなく、傍目から柔らかさが伺えるといった程度のものだが、これを見れば自ずと指揮者の将器のかさ高さは判別できるだろうと、この隊の佐将であるベルトレは考えた。

先程間道を歩いてきた兵卒も合流した。

これで五百の兵が再びまとまりを得たことになる。しかし、向かう先の道は街道といえど一列に縦隊して進むほかない谷間で、しかも両脇を黒い森が覆うので、軍様を変えねばならない。

「広い森だな」

ベルトレが、この辺りの地域に不慣れな指揮官の背中にこれからの道程を詳述しようとして口を開きかけたまさにそのとき、老人のしわがれた声が聞こえた。まるで、背中に口があるようにはっきりとベルトレを指向しており、掠れているが、なんと尊大な威儀を持ち合わせた声だろう、とベルトレは身のすくむ思いで先を行く老将を見た。

「この先にシエドがあるのか」

老人は振り返りながらいった。よもや魔物の顔でもついてはいまいか、とベルトレは本気で心配して、質問に答えようにもうまく声を出すことができなかった

「こたえよ、佐将殿」

「はい、將軍閣下殿」

ベルトレの応答が、周囲に驚きを伝播させるほどの大声であつたのは、目前の小柄な老人がもつ威に圧倒されぬようにという強い意志があつたからだつた。強烈な自己主張といつてもいい。というのも、ベルトレはこの老人、名将与噂されるトーリのもとに、つい先日配属されたばかりで、実は言葉を交わすのはこの日がはじめてだ

った。

「でかい声が誉れだと考えておるのなら、改めた方がよい」

顔色一つ変えた様子も見せず、トーリは白く揃えた髭を撫でてそう答えた。

「失礼いたしました」

「それに敬称はいらぬ。わしのことはトーリと呼んでくれればよい」  
「いったいなぜです」

ベルトレの戸惑いをよそに、老人はしらけた声で言葉を繋いだ。

「わしは貴公の上司ではない」

「先程私を佐将とお呼びいただいたではないですか」

「部下ならそのような呼び方はせんよ。佐将殿はわしと同格なのだ。呼び捨てで一向に構わぬ」

「しかし」

「何ぞ軍規に触れる問題でもあるかな」

「將軍、これは心の問題です」

「ほう」

トーリの眉がはじめて興味深そうに動いたのをベルトレは見逃さなかった。今の今まで、自分はこの老人の気持ちの端くれにすらいなかったのだと気付いた瞬間である。同格だなどといいながらその実、老将はベルトレを配下程度にも思っていない。つまり、それは今ここにいる自分はいないということでもあって、何としても、私の存在を認めてもらわねば、上官に指示された任務に支障が出る、ベルトレの心境を一言でくくるとすれば、そういうことであって、彼は必死に抗弁した。

「將軍は多くの功績をお持ちです。それらのほとんどが我々の国への貢献に役立っており、私は純粹に將軍への尊敬と畏怖を持っているのです。それが將軍を呼び捨てでなど呼べない理由です」

「功績というものは」

トーリは、なんだそんなことか、とさもつまらなさそうな顔をしないで、ベルトレに言葉をかけた。

「たとえばわしであれば、過去の自分がやってきたことに対する誰彼の感慨や感想というものであって、けて今わしのことを指しているのではない。いってみれば、昔の貴方は素晴らしかったというようなものだ。つまり、佐将殿はわしを尊敬しているのではなく、過去の業績に支えられたわしの偶像を素晴らしいといっているのだ。佐将殿、人とは今を生きるものだ。目の前にいるわしでは不満かね」

そんなことをいっているのではない、とベルトレはふと思ったのだが、自分が礼を失してしまっているのだと思い、慌てて続きの言葉を探す。このままでは、自分の思惑とは異なった方向に将軍に記憶されてしまう。

「おっしゃるとおりです、将軍。他の者や、あるいは国民にとってみれば、私の目前にいる将軍はまさしく過去に偉大な功績を残された将軍と同一なのです。我々を取り巻く環境にいる者、つまり客観的な視点にいる者は今を見ながら同時に過去を見えています。時間というものが一つの線であれば、彼らはその線を同一の平面上に見るのです。その時に、名もほとんど知られていない私が将軍と同格だなどということになりますと、彼らはわたしをどう思うでしょうか。わたしがどう思われたいと考えているかなどに関係なく、彼らは非難を口にするでしょう」

「佐将殿の保身をわしに手伝えというわけか」

「将軍、それほどに貴方は偉大なのだと思います。心の問題と申し上げましたが、心とはわたしのものだけではない、もっと国民的な道義上の問題で、わたしもシルウィアの民でありますから、将軍と同格だなどは申し訳なく思うほかないのです」

「光栄だ、と思っておけばよろしい」

「将軍」

「見栄をはるな、佐将殿。わたしはシルウィア人ではないのだ。君たちにいわせれば、わしは蛮族と呼ばれても仕方のない国の人間だ。そのような人間に同格だなどといわれると佐将殿には立つ瀬がないのである」

こいつは何をいつているのだ、とベルトレは湧き上がってくる怒りをこらえきれなくなる自分を猛烈に制した。トーリという人間が多くの人臣に畏怖の念をもって敬われていることなど関係のないことのように感じられた。老人を覆っている威厳も所詮取り繕ったものに過ぎないのではないかとさえ思われた。しかし、よく考えてみると確かに自分は保身に走っていたはずなのであり、將軍との会話を成立させるためには、自分の気持ちに妥協点を探す必要があることに気付いた。

「おっしゃるとおり、であるのかもしれませんが」

「認めるか、佐將殿」

トーリはさして怒れる風もなく、いった。

「私の内側にそういった部分がないといえば、それは嘘になるでしょう。しかしだからといって、將軍を呼び捨てにできる人間が私かといえば、それも違う。要はこういうことなのです、將軍。私には確かに保身の気持ちがある。しかし、私の保身はそのまま民を守ることでもあるのです」

老将はベルトレの言葉をただ黙って聞いている。

ベルトレは勢いの赴くままに続けた。

「誰かを非難すること、ましてやその対象がある程度の立場の人間であるなら、一つの覚悟が必要になります。自身の立場が危うくなっても構わない、という覚悟です。しかし、そういう心の結束が為しえず、具体的な論拠もないまま他者を罵りたくなるのが人というものです。覚悟のない人間に、無駄な言いがかりを口走らせないように行動するということも、我々シルウィア軍人の大切な使命であると私は考えるのです。蛮人と刃を交え、力をもって祖国を守るという行為だけが、民を守護するわけではないのです」

「そういうことを」

老将は笑った。

柔らかい笑みであったと、後になってベルトレはそう述懐するのだが、この時彼はまっすぐとトーリの顔を見据えていた、まるで、

剣先を押しつけるように。

「わしは佐将殿の保身だと思っただが、しかし、貴公の怒りは本物であった」

「私の怒り？」

「その怒りをわしに向ける限り、貴公はわしを補佐することができ、ということだ」

あ、とベルトレは小さく声を上げた。老将はなおも笑っているようだった。しかし、すでに視線の方向はベルトレにはない。森を見据えて腰を落ち着かせている。

ベルトレは試されたのだった。トリーの腹心たりえるかということとを、いままさにここで、試験されたようなものだった。ベルトレは頭の回転の早い人間であったので、トリーの思惑に程なくして辿り着いた。トリーは自身に対する諫言を許す将なのだった。

それが理解できたことでかえって思うところが募ったので、そうですかと易々と口に出来るほど、ベルトレは老練ではなかったわけである。

「わたしを試されたのですか」

ベルトレの内側にはまだ怒気をまとった火種がくすぶっている。

「どう捉えるかは、佐将殿次第だが、わしは貴公が使えない能なしだなどとは毛ほども思っていない。それだけは口にしておこう」

「そういつていただけなら、助かります」

嫌みをいうつもりはなかったベルトレだったが、自分が口にした言葉が図らずもトリーに対する悪感情を含んでいたことに軽い焦りを覚えた。ただ、口にしたことで彼の心に余裕が浮かんだのは間違いない。せき止められていた流れが、走り始めたような心の軽さにもベルトレは驚いたのだった。

老将はなおを微笑を携えたまま森の入り口に立つと、陣形をゆつくりと変化させ、ベルトレを振り返った。

「グリムフ殿はいい部下を持っておられる」

「わたしの上司をご存知なのですか」

「彼がいなければ、わしは今ここにはおるまいよ。特別の計らいを頂いた。貴公が今回寄こされたのにはいささか意図的なものを感じるが、まあよい、それも恩返しの一つの形だろう」

いい部下という表現には皮肉が込められていることにベルトレは気付いていたが、それよりも、いつも指揮を仰ぐ自身の上官とトリーが知り合いであつたことに、彼は戸惑つた。少なくとも、彼にとつてグリムフという上官は尊敬と信頼に足る上司であり、トリーのような、ベルトレの今の不快感をもつていつてしまえば、「小汚い」と感じさせる老人が知己のようにいうのはいささかおかしくはないか、と思うからであつた。

醜い思考をしているな、とベルトレは自嘲し、そうすることによって、うやく、落ち着きを取り戻した。

何とまあ、怒りというものは強い力を持つものだろう。こうして客観的に自分を見つめる時間さえも失つてしまつと何度も首を振りながらベルトレは考えた。

しかし、こうも思う。

己の怒りを知覚して状態を把握してしまえば、怒りの規模が存外に小さいことも少なくない。時にはばからしいとさえも思えるほどで、今の彼はまさしくそうだった。それがもとも小さい怒りであつたかといえそうではなく、感じ取れない時間の流れのどこかで矮小になっていると思えない。自身の怒りであるのにそこにはまるで私の意志がないようだと考えて、ベルトレは空恐ろしくなつた。

「佐将殿は思慮に耽る癖があるのか」

我に返るとトリーがにやりと笑つた。

「仇になりますか」

ベルトレは思わず笑みを返す。

「ひたすらに周りを固めるなら、まあよいかもしれんな」

「ご冗談を」

「さあ佐将殿、わしはこの辺りの地形に疎い。ご教授を賜りたいの

だが」

皮肉か、それとも今度は軍略で私を試そうというのか。

なにせよ、くえない上司だとベルトレは思った。

ベルトレは一步前に出た。せめて威厳だけは保つために。

「子供の頃、こんなことを考えた事があるのです」

イリシアが唐突にそう口にしたので、少し先を進む卿は手綱を引いた。同じ組の魔手であるカンファイも振り返った。彼は盲目であるので瞳が夜の中に灰色に浮かぶ。

「どうということ？」

卿が問う。

「もう見えなくなりましたが、先程まで月が出ていました」

「そうだね」

二人は馬上でおのおのに夜空を見上げた。黒色の顔料を吸い込んだ綿のような雲が流れていくのがわかった。

「我々はなぜあれを月と呼ぶのでしょうか。何の疑念もなく」

「疑念などと」

言いかけて口をつぐんだのは、全盲であるカンファイ・ラ・ファシだった。

「しかしそういえば、確かに」

「あなたは月の形を知っているの」

「生まれた頃から私は目が見えず、そのはずはないのですが、不思議なことにこれが月だと確信をもっていえる心象が胸の内にあります」

「疑問が増えた」

イリシアは自嘲気味にそう口にした。

「どうしていまそんなことをいったのかな。私にはその方が疑問だね、なぜでしょう。私にもわかりません」

「疑問ではあるが、わからないということでもない。予想は出来る」

「という」

「他に根本的な疑念がある」

「根本的な」



「なぜ自分がここにいいのか、ということ」

「それは、確かにそうです」

「馬を進めよう」

三人はまた一定の速度で馬を歩かせる。シエドの領域に入る頃には、すっかりと夜が ажけるだろう、と卿は予測した。

イリシアの内側には追っ手として迫ってくる偉大な將軍の影がある。卿は、その影を消す光を差し込むつもりで彼女に声をかけた。

「それは私にも疑問だ。斥候といわれ出てみればこの有様で、敵か味方かもわからない將軍に間を詰められている」

しかし、この言葉にむしろイリシアの顔は曇った。

「はつきりと敵だとお認めになれているものだと思っていました」

「皆の認識がどうであるかは私には関係ないよ。もし敵でなければどうする。何かの手違いで出た將軍と我々の間に何の因果もなく、それでいて矛先を交えたとなれば、実に合法的な裁きが行先に待っている」

「よろしいのですか。認識のあやふやな部下を先に行かせて」

「基本的に私の戦術は待ち戦だ。先に攻撃をすれば余分な情報を敵に与えてしまうからね。みなもそれは理解している。それに、それほど無謀な人間は隊の中にはいないよ。あれ、もしかして皮肉だったのかな」

ついと、イリシアは卿から視線を外してそっぽを向いてしまう。

卿は後ろ頭を掻こうとして、甲冑に指をぶつけた。ぶつけた指を上げしげと眺める。そこまでが卿のいつもの癖だった。

「遊興のわからぬ御方は嫌いです」

卿は困惑してカンファイを見た。彼は視線こそあやふやだが、人の意識は捉えられるので微かに頬をゆるませた。

「君の、理不尽に思う気持ちはまあ、わかるよ」

「卿、あなたはそうは思わないのですか」

「何度も自問したさ。だけど、問題点を確認してそこから答えを導き出す度に、しかし大半は現実から大きくかけ離れた成果をどこか

に私は求めているのだ、と思うと考え続けることが虚しくなってくる」

「虚構ではないという前提が無いのではないのですか」

「大変痛い指摘だと思う。つまるところ根源的な問題点が私に向くんだ。私がいけない、ということだけで改善される事象が無数にある」

「貴方がいたお陰で改善されたことも、これからされることもあります。そうすると、それは問題点にはならない」

「痛い、痛い。白刃で斬りつけられた気分だ。だがねイリシア。それが人間の自然な思考というものだ。一番楽な方向に流れというのは行き着く」

「流れを抑えたらよろしい」

「いい部下をもつて幸せだ、私は」

卿は肩をすくめて空を仰いだ。

問われなくてもわかっていたことのはずなのに、今の今まで思考の端に除けてきた案件が、彼にはあるのだった。

郷国の宰相を務める貴人が昨年変死した。宮城内の宰相執務室で近衛の兵に発見されたとき、宰相は自分の首を自分の手で強く握り込み、絶命していた。後になってその腕を切り離さなければならぬほど深く食い込んでいたことを考えると、まさか自殺ではあるまいと誰しもが思考するのだが、そうかといって何者かの所業であると断じるには、あまりに奇怪な状況にあった。

法国の幹部たる各方面の大臣による検分の結果、まず魔手が疑われた。物事の因果を見定め、その動きを制御できるといわれる魔手にこそ、今回の悪魔のような犯罪がなされると考えられたのだった。しかし、魔手は法国内では非常に地位の低い存在であり、宮城内には立ち入りが許されていない。宮城どころか、その近辺一切に立ち入りが許されていない上に、厳格に区画され、管理された魔手だけの町に住まねばならなかった。魔手は修行の過程で身体的な欠落を、必ずしもいっていいほど、どこかに抱えていた。それがシルウィアの人間には許せなかったのである。純粹な法国の民は完全を好

み、単一であるということをよしとする。過去、どれほどの功績をあげても、けして魔手の参内だけは許されなかった。

すると、必ず内通の人事がある。

「卿、貴方は人が好すぎるのです」

反論はカンファイから上がった。

「イリシア殿、しかしそれは美德です。我々にとっては、少なくとも」

「いいんだ、カンファイ。イリシアは正しい」

卿は、前世読みの老婆の手によって宮城に入った王位の継承者だった。元々法国には世襲制はないのだが、継承権の位階は高く、すでにして法王の実子よりも上であり、そのために暗鬱な人間の歯牙に触れることがよくあった。だから卿は、非番であるときは宮城を出て、貧民街や魔手街に赴き、やはり謂われのない差別を受ける彼らと時を過ごしていた。

卿の突然の入内を看過できない一派には、それが十分な口実になった。宰相が法王の実子の教育者であったことも、卿にとっては災いになった。一切、宰相に対して恨み辛みなどない卿である。むしろ、宰相には好くしてもらった。殺意も無ければ、巡り巡って魔手たちに嫌疑がかかることに頭が回らない性質でもない。

結局、はつきりとした事は何一つわからず、卿は冤罪を被ることは無かったが、猜疑をもって見られる行為を行ったことに対して、異例の厳罰が下った。

彼の領地、故郷を召し上げられたのである。

配下の者がなぜ、卿を「卿」とのみ呼ぶか。その理由がここにある。

継承権の席次も下がり、さぞや王子側は溜飲を下げたことだろう。卿はそうだった王室の一切の雑務に関心をすっかり失っていたため、むしろ喜んだ。

「常識人とは少しかけ離れた感もあります」

「いい過ぎだよ」

卿は苦笑した。

「いいえ、卿。普通ご自身の意向とは裏腹に継承権をお譲りにならなければならぬ場合は、折しも現在の殿下がそうでございましたように、肝を冷やすことはありません。清々しい気になどならぬものです」

「私の意向とはまさにそれだった。ただ、それだけだ」

「常識と離れていれば、人は人を疑います」

「それがこの仕打ちか。なるほど、馬鹿げている」

卿には頂点に立とうとする意志はない。しかし、卿の意志とは無関係に、ただ卿という存在があるというだけで、安心できない人間がいる。

人の、存在価値というものはいったい何であろう。

イリシアが月の名称になぞらえて問うた疑念とは、きっとこのようなものであったに違いない、と卿は思った。

イリシアの憂いや怒りが卿の内側に無いわけでは、もちろんない。ただ、内面で燻り続けた体制への批判は、一度体外に放出されてしまえば、自分の与り知らぬところにまで延焼してしまいそうな気がして、卿は恐ろしかった。存在の価値はわからないが、存在そのものが持つ力は破壊を内包している。卿の思索はここにいつも端を発し、再び旅立てたとしても、異なる経路を手繰ってやはりここに帰着する。

自身の消滅。

これほど明確で単純な解決法はあるまいと思ってしまう。

きっと相手側もそう思っ、今日の兵を進めている。

自身が消え入ることに対する恐怖はない。人は遅かれ早かれ死を賜る。必然の事態を深く考え込むほど愚かなことはない、と卿は思う。前世などという信仰が法国にはあるが、卿は信仰にすがって生きていく弱さを入内する自身の内に認めてから、信じるものを外に見出すことに緩やかな疑いを持っていた。

しかし、それこそが存在の消滅ということなのではないか、と卿

はふと思うことがあった。誰もが共有する考え方に自分も流されてしまえば、期せずとも自分という形は無くなり、自己は埋没するのではないか。

卿はかぶりを振った。

そんな事をして何になる、と卿の中にわだかまる気持ちがいった。今の自分に、出来るはずもないことだった。

「あなたは死ぬことを許されぬ人です」

「そうだね」

抗えないことばだった。

カンファイは、虚ろな眼球の奥に確かに意志を秘めながら卿を見つめている。

私の死を恐れる人間がいる。

存在とは、単独ではけしてない。

諦念が胸に疼く。

そんなことは、わかっている。

ただ、存在と存在を紡がねばならない人間が、どうして私でなければならぬのだ。

「わかつている」

卿は確かにそういった。そのことばは、カンファイにいったのでなければ、イリシアに向けたものでもない。卿の内側に広がる、からだとは異なった内々に秘めた見えない自分に向けて発したものだ。

人の役目は存在と存在の間に浮沈する蔓草のようなものだ。今の私にはそんな言葉が似合う、卿は思った。それぞれに向けて根をはり、濃く深く葉を拡げる。卿は、垣根を作らずに数多くの事象に接したことが、己の役目をつくり、その為に自己の存在は極めて受動的に支えられていることに気づいたのだった。

「素直でありたい、よく私はそう願うのだが」

卿は相変わらず苦笑を続けたままそういった。今度は二人に。  
「きわめて難しい」

「お察します」

「認めてくれるのかい」

「とりあえず、そう申し上げておこうかと」

「カンファイ、何とかいつてやてくれないか」

卿は顔を手で覆うと若い魔手に助けを求めた。

「卿は、お幸せです」

「君もそんなことをいうのか。なかなか、味方というのは見つからないものだね」

やれやれと卿が首を振ったのを見て、イリシアとカンファイは顔を見合わせた。卿はその様子を肩越しに透かし見て、彼らを含む皆の拠り所としての責任を考えた。

生きることの意味である。

しかし卿にはそれが、自分で得たものとはどうしても思えなかった。

誰のものでもない、自分が生きる意味とは何だろう。

意味は見出されてはじめて応用が利くものであるから、卿の感覚としては、意味がはつきりするまでは生きているとはいえない。だが、人は何も考えずとも確かに生きているのであって、そうするとまだ気づかない意味があるのだろうか。あるいはそんなものは何もなく、ただ生きるという現象が起こっているだけなのか。

そんなことを思う卿の耳に声が届いた。卿を呼ぶ声である。

「ツアイ」

卿は小さく呟いた。

「何か？」

イリシアが聞きとがめる。

「いま、ツアイの声でした。間違いない」

「ツアイはキル隊とともに間道の封鎖に向かったはずです。方向がまったく違っていいほど違いますが」

しかし、いいかけてイリシアは声を潜めた。彼女もまた、何者かが近づいているのをはつきりと感じ取ったようだった。

夜風が思い出したようにはしるだけの蒸し暑い夜である。三人は汗を滴らせながら、一通り気配を探り耳を澄ませた後、街道の路肩の一点を見つめた。

雑草がそよぐ音とは明らかに違う異音が近づくと、イリシアは迷わず剣を抜いた。

確かに、卿を呼ぶ声がある。しかし、気配が一つでなく、加えて血の臭いが風に混じるとなれば、穏やかではない。

沈黙。

草木が擦れあう音。

そして、明暗がいったいとなって判然としない景色。

その一切を破ってツアイの白い顔が夜空に昇る月のように、路傍から突如、顔を出した。目が青白く輝き、充血した血管が浮かび上がる瞳を一瞥すると、イリシアはおもむろにツアイに近づき馬を割り込ませて、剣を振りかざした。

火花が散る。

二度、風を刃物がなぎ払う音がして、三度と。

視界が白転し、闇に意識が彷徨って、その後、目が慣れるとイリシアと対峙している男の姿が浮かび上がった。深い眼窩が暗い影を顔に落とした偉丈夫が、馬に乗った高みからイリシアを見下ろしていた。

「貴公は女か」

呆れるほど落ち着いた太い声だった。

「そうだが何か」

「大した臂力だ」

「お前のただの腕力とは違う。私には芯がある」

「そうか」

男は無造作に剣を横薙ぎすると、イリシアは少しだけ後ろに下がってツアイをかばった。

ツアイの右前腕は肘の辺りから力なくぶら下がり、血が滴っており、ツアイは上腕を縛る布と同じほど、きつく真一文字に結んだ口

をわずかにゆるめると、申し訳なさそうに卿の名を呼んだ。

卿は無言で頷く。

月が穏やかに光を降らせ始めた。

男の相貌が明らかにになる。

「アルゲラ」

イリシアの呟き。

「知己か」

卿は馬上から彼女に問う。イリシアが首を横に振ると、乱れた髪がひとふさ、はらりと彼女の横顔にかかった。卿は時を顧みず、それを美しいと思う。

「シェドの反シルウィアの先鋒です」

「なるほど」

間断なくアルゲラは、イリシアを攻め立てる。

イリシアは引かない。鋼同士がぶつかり合い、残響の間を縫って男が馬を詰めると、イリシアは巧みに体をかわして、いなす。

アルゲラは苛立たしげに剣を振って仁王立ちになった。腰が落ちて着く姿勢は歴戦の強者の証である。月光を背に負って、荒ぶる御魂が言霊を発するように、男は大声を張り上げるのだ。

「貴公等はわしを知っているのだな。わしは貴公等を知らぬ。なにゆえ兵を進める」

「我らとて知らぬ」

イリシアの低い声。アルゲラはたちまちに顔をくしゃくしゃに歪めて、駄々をこねる子のように、声を絞った。

「面妖な」

アルゲラはイリシアへの意識を忘れないまま、卿とカンファイの顔を盗み見た。

「主管はどちらか」

「こちらだ」

間髪を入れずに卿がカンファイを指さした。眼前の男はイリシアが首魁でないことを即座に見抜いた。その洞察力が、どれほどのも



のかを卿は試したかった。

「え？」

「貴公が？」

が、カンファイは芝居に耐えうるような精神力は持ち合わせていない。元来、人前に立つのが苦手だったと卿が思い返すまでもなく、月の光に照らされた彼の顔に狼狽は激しかった。

「そうではあるまい」

アルゲラはいい切った。そして卿を向き直る。

「卿と呼ばれていたようだが」

「聞こえていたのか。無駄な芝居をしたものだ」

卿は、アルゲラに微笑を返す。アルゲラにとってみれば、卿は月明かりを見上げる方向になり、逆光であるので、自分の顔がはっきりと見えているだろうかと、卿は変な疑問を持った。

「いずこの卿か」

シルウィアでは、領地を持つことを許された人間だけが、卿と呼ばれる。当然、卿と呼ばれば封ぜられた土地がある。が、卿はその領地を失っているのです、

「いずこでもない」

と答えた。

アルゲラにとってみれば、納得がいくはずもない。

「わしは、回りくどいのは好かぬ。シルウィアの卿であるのだろう」

「そうだ。いずこであるか、ということがそれほど重要か」

「我らがシエドを蹂躪した卿の一族であれば、許さぬ」

「シエドに蹂躪された歴史などない。あなたは何かを勘違いしているようだ」

「国土を灼かれ、民が死ぬことだけが蹂躪ではない。我々の心が、歴史が寸断されようとしている」

「あなたが、ツアイを襲ったのはそういう理由か。私の隊の人間を傷つけたのはそういう理由か」

卿はカンファイに、ツアイを頼むと小さく呟くと、呆然と成り行

きを眺めていた若い魔手は、卿の側に踞るツアイの側に手で道を探りながら寄った。

卿は馬を下りる。

イリシアがアルゲラに注意を払ったまま、卿に寄り添った。

「蹂躪には蹂躪で返すしかない。そうお考えか」

「そうではない。なぜ馬を下りた？」

「私はあなたとは違うからだ」

「そうではない、といったはずだ」

「なぜ、傷つけたんだい。私の隊の人間が、なにかしたのか」

「夜も更けたというのに、シェドにしか到達しない街道をシルウィアの甲冑を身に纏う兵士が行軍していた。何か変事があったか思われない」

「もう二人いただろう」

「一人は捕縛し、一人は森へと落ちた」

「本当なのか、ツアイ」

卿は視線は送らずに、声だけで問うと、ツアイは小さく頷いた。事実のようです、とイリシア。

「モリアスか」

卿の直感だった。まず、間違いないだろうと、卿は思っていた。ツアイの暗い顔から答えが滲み出てくるようで、今度は卿はツアイを一瞥し、アルゲラに視線を戻した。

「アルゲラ殿。あなたがたが捕まえたというシルウィアの兵士は何か、口にしたか」

「何も。いったとしてもわたしにはわからぬ。その小僧を追ってここまできた」

「そうか」

卿の一言で寄り添うイリシアの瞳が冷たく沈み、やがて色を失った。

卿の情感がイリシアに伝わったのである。

イリシアの瞳の変化に、またしても月光が隠されたのか、とアル

ゲラがそう思つて視線の先をわずかに空に向けると、濡れそぼれたような柔らかいぬめりがイリシアの剣に宿つて、天空をついていた。「ならば我らについて教えよう。だが、その前に」

剣を支えるイリシアの手首がゆるみ、からだが大きく傾くと、腕が地に向かつて急速に落ちて、切っ先がわずかに地面を裂き、小石を弾いた。

つぶてがアルゲラの馬の顔面を激しく叩き、いかなきが夜気を裂いたとき、卿の馬はすでに宙をはしっていた。

声を上げて馬を押さえようとしたアルゲラの片腕は、卿がまたたく間にふるった刃によつて、ツアイと同じように肘から先が失われ、彼の体は大きくのけぞった。

刹那の内に、火花が頭の中で走つたように感じたアルゲラには、痛覚などなかっただろう。何が起きた、その疑問だけが先行し冷静さを失つたに違いない。

が、激しい痛みが彼の体を熱く灼いたためか、心にたつた波風が穏やかになり、右手で必死に覆う顔の下にけつして野蛮ではない覇気が肃々とうずまき始めたのが、卿には理解できた。

恐ろしい男だ、率直にそう感じた卿の顔には、月明かりを照らし返す赤黒い血液がある。

「ツアイの腕は返していただく」

アルゲラは右腕だけで剣を振るつた。

風が悲鳴を上げる。

卿は剣の腹でアルゲラの膂力を受け流すと、一つ息を吐いた。

激しくアルゲラの腕から血が落ちた。

「見事なもの」

イリシアの声が体温を保つたまま卿の耳に寄つた。

「シルウィアの剣士ごときが」

「侮りがいまの君の姿を生んだ」

アルゲラは、下卑た言葉をいくつか飛ばして、自分の衣服を裂き、きつく上腕に口を使って器用に結びつけた。

「カンファイ。ツアイはどうか」

卿の突然の声に、瞳を閉じたままのカンファイは身をすくませて答えた。

「大丈夫です。繋がります」

「まかせる」

カンファイはツアイの患部に手をかざしている。アルゲラは、剣を持った手をだらりと下げて、その光景を見つめはじめた。目に不思議な色がある。慈しみの感情が表層に浮かび上がって、アルゲラの口を震わせた。

「魔手か」

「非常に優秀な、な」

「ふむ」

「どうした？先程の威勢は」

「魔手には同情がある」

「彼らが虐げられてるからか」

「そうだ」

「私もそうだ、と申し上げたらアルゲラ殿はどうする」

「なに」

アルゲラは剣を持ち直した。

人の意識の圧力にさらされて、卿は思わず一步下がった。ふざけた発言をすれば、すぐにでもまた膂力をふるう、その意思表示にちがいない。

「私は法王の継承権を持っている」

「席次は」

「今は六位だ。しかし、ほんの数ヶ月前までは一位だった」

「では貴公が」

アルゲラは目を丸くした。

「私を知っているのか」

卿の驚きの声に、アルゲラは丸めた目を細めて笑った。あまりに力強く笑うので、腕から血が滴った。

「あなたを探していた」

「どういうことだ」

イリシアの固い靴が砂利を踏みにじってこわばる音が聞こえる。今度は、イリシアが固唾を飲む番で、やはり返答次第では許さないと美しい顔がわなないている。

「貴公は必ずシエドに向かうと思っていた」

「なぜだ」

「貴公が善意の人だからだ。わしの知人がシルウィアの捕虜となり、都市部の貧民窟にいる。貴公の施しを受けて生き延びた。知人はシエドの惨状を貴公に訴えた」

「だから、シエドに向かうと？」

「そうだ。宮城内のごたごたも耳にしていた」

「私に何かを期待するなら大間違いだ。そんな力は私にはない」

「貴公の力が必要なのではなく、貴公が持つ人気が必要なのだ」

「私を利用するのか」

卿は微笑む。

また、誰かの関係に引きずり込まれようとしている。私の意志の無いままに。

卿にとってみれば自分を自嘲する悲しい微笑みだったが、アルゲラには協力的な姿勢にうつったようで、剣を鞘に収めると急に人なつこく笑い卿に近づいた。

イリシアが卿の前に馬を進めて、剣を横に構えたが、アルゲラはもういいだろうと敵意のないことを肩をすくめて知らせた。

「卿」

イリシアの非難の目が肩越しに卿を貫く。謀れてはならない、そう告げている。

「いいよイリシア。活路だ」

「卿」

もう一度イリシアが呟く。卿はイリシアの剣の腹を上から押さえると、アルゲラと真正面から、手を伸ばせば肘を曲げても届く距離

で、対峙した。

頭が二つ分、アルゲラが大きい。

「わしは貴公を利用したい」

「戦でもするつもりか、シルウィアと」

「そうだ」

「無茶だ」

「シェド一国であれば、そうに違いない」

「私を盟主に担ぎ出すのだね」

「そうだ。貴公は大変に都合がよい人物だ。もともとシルウィア人ではない、というのが我々にははずせなかった」

「条件を出そう」

「断る」

「話は最後まで聞いた方がいい。でなければ私はわがままな盟主になつてやる」

「なつてやるとは、それはまいったな。いくらでもわしらに手段があるはずだがなあ」

アルゲラは卿の知己であるかのように笑った。

そして顎をしゃくる。しゃべってみな、というかのように。

「私は追われている」

「だろうな」

「知っていてキル達を襲ったのか」

将来のわがままな盟主ぶりを示唆するように、卿は意地悪く笑うと、自分の剣の切っ先をわずかに上げた。

「貴公が隊長だとは知らなかったんだ。許してくれ。それで、誰に追われている」

「将、トーリ」

「法王騎士団か」

アルゲラは大声を上げ、すぐにあわてて自分を嗜めた。  
「そうだ」

切っ先を下げながら、卿が答える。

「そりゃあ、大物だ。しかしなに、貴公等を守るだけなら大したことでではない。条件とはそれでおしまい」

「いや、トリー殿を味方につけて欲しい」

「なんだと」

「トリー殿もともとシルウィアの人ではない。何も問題はないだろ」

「いやしかし」

「なにがしかし、なのかな。シルウィアに反抗するなら法王騎士団を敵に回したくないだろう。なにせ法国最強の騎馬集団だ。おまけに手だれた魔手がついている。私は、こころの平静を保ったままではとも戦う気持ちにはなれない。ならば、懐柔してこちらの指揮下におきたい。いやあそんなに難しいことじゃない。トリー殿を説得すれば自ずと騎士団はこちらの内側に入り、シルウィアへ馬首を向ける。彼らが忠誠を誓うのは法国ではなくあの老将なのだから」

「あんた正気か」

アルゲラの語気が砕け始めた。

「私を手中に入れると追っ手を真正面から受けるぞ」

「くそ。まさかそれほどの大物とはおもわなんだ」

「どうする」

「わし一人では決められぬ。条件については後で考慮するにしても、貴公をこのまま放るのは癪だ。ついてきていただきたい」

卿はイリシアを見た。話の流れに置いていかれた副官の眉間には深いしわが寄っている。剣から手を離して優しくイリシアの肩に手を置いた卿は、今は何も考えるな、と小さな声でイリシアを諭した。

「卿、繋がりました」

「おお」

卿はアルゲラとの駆け引きの場から身を転じると、ツアイの元へ走る。

アルゲラがその背に、おい、と声をかけるが、イリシアがめざと

く制した。

「大丈夫か」

「卿」

ツアイの顔には血の気が戻っていた。無惨な右手の様相はない。卿は納得した顔でカンファイに微笑みかけた。

ツアイは繋がったばかりの右手を卿の顔に向かって伸ばした。

卿は掌をしっかりと握る。

「気丈に振る舞え、ツアイ。いつものように。隊の中で飛び抜けて  
明るいのが誰なのか思い出せ。お前にはそれしかない」

「ひどいな」

「そうかな」

「卿、モリアスが森におっこちちまった。助けてやってください」

「ああ、そうだったな。忘れていたよ」

「わ、忘れてたつて。あんた、それじゃあ、隊長失格だよ」

「それはいい。じゃあ、次の隊長は誰がいいだろう」

「誰つて」

「イリシアがいいつていつてごらん。ほら、イリシアだよ。さん、  
はい」

「もう疲れました」

「そうか、実に残念だ」

「モリアスを、卿」

「わかつている」

卿の頷きにツアイはようやく落ち着いたのか、すつと瞼を閉じた。卿はツアイを抱きかかえ、自分の馬に乗せた。反対側から駆け寄つてツアイを支えてくれたイリシアの目に批難が浮かんでいるのをいち早く悟った卿だったが、あえて気にしなかった。

が、イリシアの攻撃。

「何をいわせているのです。この非常時に」

「非常時だからこそ将来の話をしっかりとね」

「卿」



「冗談だよ」

アルゲラは無言で卿を見ていた。卿は肩越しに彼を見ると、その先に落ちている彼の腕が目に入った。

アルゲラは視線の先に気づき、

「わしの腕もつなげてくれるのか」

といった。目が笑っている。痛覚は絶対に消えていないはずで、それに、自分の腕を切り飛ばした男が目の前にいる。

卿は不思議な錯覚に陥った。彼はいったい何を思って卿に笑いかけているのだろう。激昂を通り越した先にアルゲラは何を見ているのか、よくわからなくなった。とにかく凄まじい胆力に、卿は苦笑するしかない。

「さきほどの条件次第だが、一度ここを離れたい」

「追手か」

「そうだ。もうすぐ、この森は燃える。全て灰にかわる」

「なに。どういうことだ」

「私がトリー殿なら必ずそうする。トリー殿は魔手の力を存分にまで引き出せる御方だからね。造作もないことだろうよ」

卿はことばをいきらぬうちに、馬を歩かせ始めた。イリシアはカンファイを支えて馬に乗せて、自分の馬の手綱をとる。

「腕を持つてくるといい。いくら汗ばむ夜といえど、まだ腐らないさ」

アルゲラはいわれるがままに無造作に自分の腕を掴んで、肩に担いだ。

黒々とした断面をしげしげと眺めて、糸も針もなくこれが繋がるのか、とアルゲラは呟いた。

隘路か、と老将はいったきり静かに沈思してしまった。ベルトレはぐるりと周りを見渡して、自分の立場のあやふやさを改めて思い知った。周りに自分の味方が一人もいない。ベルトレを佐将だと認める騎士はおそらく一人もない。そのことが実感をともなうほど冷たい視線を彼は感じた。法王騎士団という法国最強の隊が、トリーという将の私兵であるという噂はあながち間違っていないのだ。自分が法王騎士団の兵ではないということを嫌でも感じ取ることができる。早くなにかいってくれ、とベルトレはトリーの背を睨んだ。風がほとんど流れない夜だった。甲冑を脱ぐのも一苦労だろうとベルトレは仕方なく首を頭上に巡らすと、ちょうど雲間に隠れた月が顔を出すところだった。

「彼らは斥候です」

ベルトレは少し前にトリーにこう進言した。

「斥候であるはずの彼らがいつまで経っても宮城に戻る気配がありません。これは彼らが我々の動きに気づいている証左と思われます」「シエド領内に何も疑わしい事象がなければ、猜疑の目がこちらに向いてもおかしくはあるまい」

「それを踏まえて、ここから隊を一行にして進まねばならぬ隘路が続きます」

「伏兵か」

「はい」

「しかし、相手は十二人であるのだろう」

「少人数であればこそ、我々とともにぶつかり合うとは思えませんが。偶然すらも味方につけたいと考えるなら、紛れを起こしやすいここからの道程は策を仕掛けやすい」

そして、トリーは黙った。

老将を思考の隘路に落ち込ませたという些細な優越感に、ベルト

レはわずかな時間だけ心地よく浸ったが、よくよく考えてみれば即決してもいい論旨であり、ベルトレはだんだんとトーリの思考の速度に煩わしさを覚えてきた。考える、ということは行動に先立って行われるものではない、と彼は信じている。

ようやくトーリが口を開いた。

「佐将殿なら、どうする」

「わたし、ですか」

ぽかんと、ベルトレは思わずただ問い返した。

「そう。佐将殿なら」

「私なら」

といおうとしたベルトレの声が激しく裏返った。あまりに通りのよい高い声だったので後続の法王騎士団の隊員から失笑が沸いた。トーリもおかしそうに顔を歪めて、どうぞ、と掌を向ける。ベルトレは顔をほてらせながら、言葉を探した。

「私ならまず兵を二手に分けます。相手は少人数ですので、一力所に固まっていることはあまり現実的ではありません。彼らの戦意をくじくには、我々は一人でも見つければよく、そのためには兵を広く分布させたいところです」

「川が併走している。佐将殿はそちらをゆく道もあると申しているのだな」

「そうです」

「川を渡るとなると騎馬ではどうかね。川の深さは。馬が足を取られるようでは困る」

「可もなく不可もなく」

「可もなく、不可もなく、か」

「はい」

「兵を分けたくはないのだ。佐将殿のいうとおり紛れが起きやすくなるだろう。敵につけいらせる場所は少ない方がよい。ところで、この街道はシエドまで森に覆われたままなのか」

「ほぼその通りです。いくつか迂路がありますが、どの経路を通っ

ても隘路には変わりません」

「我々の軍容が利点にならないわけだ」

「残念ながら」

「ふむ。では、森を焼く」

「は？」

「魔手は前へ」

ベルトレは我が耳を疑ったまま、しばらく動かなかった。ベルトレの脇を魔手がすり抜ける。

一人の魔手が彼の馬にぶつかった。ベルトレは我に返って、その魔手を見遣る。魔手は謝るところか、ベルトレを睨みつけたまま前線に向かった。不快な感情を抑圧して、ベルトレはトリーを探した。老将は魔手の配置を見届けるために、ベルトレから離れた場所に移動していた。ベルトレは馬の腹を軽く蹴った。

「森を焼く？」

「いかにも」

「この、広大な森を？」

ベルトレの眼前には夜の中にさらに黒い影を擁する深い森の姿があった。街道を覆い尽くし、シルウィアとシエドをわかつ広大無辺の大森林。いまもなお、多くの旅行者を惑わせ、過去にはシエドへの侵攻を妨げた木々の大群を、トリーはわけもなく燃やせると思っている。

生粋のシルウィア人であるベルトレには、法国の歴史の一部を担うシエド攻略史をまるで徒労のようにいわれたように感じて、不快を隠さなかった。

「何日かけるおつもりです。その間に敵には逃げられる」

「シエドの先に逃げ場があるのか」

「三方を海に囲まれた半島です」

「船か」

「無いとはいい切れません」

「なんだ。その程度か。ならば時間がかかってもしよいではないか」

「シエドに入られると厄介なのです」

「なぜ」

「シエドの反法国感情が最近高まりつつあります。共謀される可能性がある」

「ならばなおさらこの森は燃やすべきである」

「なぜ」

今度はベルトレがつめよる。

「街道に横たわる森を燃やされたと知れば、シエドの領民はシルウイアに強い反感を抱く。敵は領内に入れまい。あわよくば我々の手を汚さずにすむかもしれん」

「後は、その後はどうするのです」

「それは佐将殿の仕事であろつ」

「な、なにを」

「案ずるな。森は数時間で燃える」

「私が案じておるのは、そういうことではありません」

「ではなにか。北方侵攻を命じられたわしに無理をいったのは、シエドの政治的制圧が目的か。それは文官がやればよい」

「しかし」

「いいか佐将殿。わしに何かを頼むというのは、つまりそういうことだ。軍令を司る長官が頼もうが法王が頼もうが、知ったことではない。ただ敵を滅ぼすだけならば、手段はいくらでもあるのだ。その中で、こちらが被る実害がもつとも少なくなるように配慮するのは、一介の部隊の長であるならば当然であろつ。見通しが悪いから伏兵の心配をせねばなるまい。ならば見えるようにしむける。なんの不自然があろつか」

「しかし、しかし」

「佐将殿にはそんなことはできまい、という前提がありなのだろう。わしにはない。まあ見ておれ。おぬしらが思つ以上に、魔手という存在はすばらしい」

トリーにそういわれて、ベルトレは己の感情に魔手という引つか

かりがあることを認識した。つまり彼は、魔手などという体の一部が欠損したような不完全な人間が、自分の考えも及ばない仕事を軽々となそうとしていることが許せなかったのだ。ベルトレの体にぶつかって去っていった魔手の感覚が思い起こされる。彼の目の怨みの色を、ベルトレは考えねばならなかった。

「因果の書き換えなど」

「信じられぬか。しかし魔手は現実には成果を上げているではないか」

「私は見たことはありません」

「やれやれ。まあ、戦陣を作る司令官が盲信されても困るが。お主の反応を見てわかったよ。魔手の地位がなぜあれ程低いか。答えは単純で、法国はただその力を恐れているのだ」

「馬鹿な」

「敵にも魔手がいるそうだな」

「はい。三人ほど」

「シルウィアの兵士にしては珍しい」

「物好きが何人かおります。しかし私は魔手になど頼らない」

「わしも物好きのうちよ。なるほど、『聖族』ではなく我らが呼ばれた理由がなんとなくわかった。魔手の扱いが手練れておれば、人数の差など容易くひっくり返る」

「考えすぎでしょう」

「おぬしらはなぜそれほどまでに魔手を忌み嫌いながら、街の一部を彼らにあてがっているのだ」

「法王のお考えです」

「不遇な環境に文句をたれず、慎ましかに生活する魔手たちにも不思議さはある。わしがシルウィアを壊滅させるなら、まず魔手を味方につけるだろう」

「そのようなお考えをお持ちなのですか」

ベルトレの瞳にさつと炎が立ち上った。

「だとすればどうする」

「私が一刀のもとにここで切り伏せてご覧にいます」

「できもしないことを申すでない。笑われるぞ、佐将殿」  
「なんですと」

トーリは微かに鼻で笑った。

「心配するな、今の法王猊下には忠誠を誓う。信頼できうる御方だ。あの御方のためならば死んでもかまわぬ。だが、次代の王にはわからぬ」

「太子殿下は英邁な君主になられるでしょう」

「さて、どうだろう。まだ一度もお目にかかつてはおらんが」

「お目にかかれればわかります」

「佐将殿、ならば魔手の業績も目をこらせば疑いが晴れる」

トーリの顔にくつきりと陰影ができ、そしてベルトレの横顔に熱風があたった。

夜がゆつくりと、橙色の光の中に埋没して変容する。

ベルトレは慌てて森を見た。

見える範囲の森の木々が松明となって揺らぐ姿が見えた。

「何を、何をしたのです」

「因果が動いた」

「何を？」

「木々は夜毎水を吐き出している。それをその方向にだけ少し促進させた」

「その方向にだけ？」

「一方的に水を吐き出す。蓄えようとせずに。木々は瞬く間に萎れ、枯れる」

ベルトレは目を疑った。

火の海が、遠くに波を打って拡がるうとしている。

魔手は少しずつ前に前に進み、木々は燃えたそばから灰になり炎の風に舞った。

ふと、ベルトレは轟々たる火炎の先に不思議な構造物を見た気がした。

「なんです。あの板は」

「おぬし、基板が見えるのか」

トリーは初めてベルトレに驚愕の視線を向けた。

「基板？」

「あの炎の先に何が見える？板が見える？わしには見えない」

「ですが確かに。ええ、今でも確かに見えます」

「それはおそらく基板だ。魔手たちだけが見る、もう一つの世界のかたちだ。これは愉快、魔手を忌み嫌う貴官が、基板を見るとは」

「どういうことです」

「魔手たちは二つの世界を認識している。もっとも我々と同じ視力を持った人間は少ないかもしれぬから、魔手たちにとってみれば佐将殿が垣間見たものが主体の世界で生きているといえるのかもしれない。魔手たちは、修行の過程で視力を失うことが多いからな」

「何をいっておいでなのです？もう一つの世界？」

「この世界のあらゆる存在はもう一つの顔を持っている、とでもいおうか」

「もう一つの」

ベルトレの思考はそのまましばらく停止した。整理のための時間が周囲の時間と隔離して彼の頭の中に流れなければ、ベルトレは次の言葉を出せなくなっていた。

森は燃える。魔手は進む。

思考が停止するのは地獄だった。

少なくとも戦術を常に追う立場にいる士官にとっては。

自分以外の全てが自分とは無関係であるように振る舞うのも許せない。

ベルトレは、我に返った。

「魔手たちの具体的な役目とはなんなのです。二つの世界を繋ぐことですか」

「立ち直りが早いな。さすが、シルウィア国最高の教育をくぐり抜けただけはある」

「質問にお応えいただきたい」



「我が強いということは将の資質である。柔らかい部分などほんの一握りあればよい」

「お褒めにあずかり光栄であります、將軍閣下殿」  
「なかなか、よい」

老将は声を出して笑った。刻まれた皺の間に剣を突きつけてやりたかったベルトレだったが、なに機会はいくらでもあるといいきかせて、こころを鎮めた。

「わたしにはそんなものが存在するなどと」

火の粉が二人の間にはしつて、ベルトレは言葉をきった。

老将の目が不思議な沈隠をみせる。

くらく沈んでいくのだった。

生気が失われていくようでもあった。あかるく爆ぜる木々が見せる幻かもしれない。

しかし、歓喜をあげる騎士団の兵士達とトリー、そしてベルトレが離れていくような錯覚があつて、彼は何かに振り落とされないようにしっかりと手綱を握った。

「信じ、られません」

「では聞くが」

どさりと大木が倒れる音がした。

「心が存在しないとは佐将殿はお考えにならないわけであろう」

「それは」

「心とはもう一つの世界ではないか」

また、どさりと木が倒れる。

手綱を握りしめたベルトレの手が汗でぐっしりと湿っている。

人間ではない何か。

トリーのからだから発せられる気迫、いや、違う、存在感の姿がすでにして人のものとは異なるのだとベルトレは思った。

「それはつまり、この世以外の世界とは心の世界だということですか」

ベルトレは声を絞る。

「わしはそう思う」

「すると魔手は心を操る。しかし、木に心があるはずはないでしょう」

「心は存在をあたえられたものにはすべてある。魔手が教えてくれたよ」

トーリの口の動きは見えなかった。

「そんなはずは」

口が動いていないのに、ベルトレの言葉は耳に届いた。

驚く。口をぱくぱく動かしてみる。動く。

「そんなはずはない」

が、言葉を出そうとすると口が動かない。しかし、トーリには伝わった。

「体が正直ではないか」

彫像のように、老将は屹立している。トーリの口を目で追う。気づくと、トーリは馬に乗っていない。背後は暗部で、ベルトレのからだはトーリと正対しており、しかし口だけでなく、とうとう体感が冷えて消えてしまった。

「なんだこれは」

思ったことが言葉になる。

「何がだね、佐将殿」

「あんたは、何者だ」

「わしは法王騎士団の長、トーリ」

「そんなことを聞いているわけじゃない」

「何を聞くつもりなのかね」

「こんな、こんな」

どさり。

ベルトレの視野に馬の足がいきなり現れた。

「どうした、佐将殿」

トーリの声が上がから降ってくる。

じんじんと肩が痛む。

ベルトレは手綱を強く握ったかたちのまま、地面に突っ伏していた。

馬から落下したのだ、とわかる。  
たったそれだけの経路を思いめぐらすのに、頭がいいように働かない。

「おうおう。随分とまた見通しがよくなったな」  
老将の笑声。

ベルトレは跳ね起きる。

炎の海原の下に黒い大地が横たわる。魔手たちの影が遠くに霞んでいるように微かに見えた。

咄嗟にトーリを見遣る。笑顔がなんと恐ろしい。

「魔手の力」

「そうまさしく」

滑舌よく、老将の口が蠢いた。

「なによ、なによ。なんなのよ」

高台から見渡す炎の海が、生暖かい風に煽られて蠢いている。潮が引くように炎は位置を変えているが、炎が過ぎ去ったあとは黒い焼け野原だけが残った。もっとも焼け野原だと認識するまでの時間がルーシェには必要で、はじめ彼女にはただ黒い断面にだけ見えた断面の表層には何もなく、深い闇の底に通ずる穴のようだった。

異常な湿気を感じて違和感だと思っまもなく、何かが燃える音が聞こえた。男を抱えて夢中で走った。森の中にいるのは危険だとルーシェの中の誰かがそういった。迷わずにシエドに向かう隘路の内、森を迂回する高所の道へと駆け上がった。たまたま、彼女がいる場所がそこに近かったのが幸いした。甲冑を着て意識を失った男を背に負ったまま、長距離を走れる体力は、今のルーシェには無く、男が途中でおぼろげながらも意識を取り戻したことも彼女を救ったといえる。気づかなかったが、目を凝らしてよく見れば森の木々は力なくしなびていた。

「魔手」

「ましゅ」

ルーシェが若い男の呟きに顔を向ける。

「そう」

「魔手ってなに」

といいそうになって、ルーシェは男の名前を聞きそびれていたのを思い出した。

「あなた」

綺麗な髪。綺麗な瞳。ルーシェの視線が彼女の気持ちと絡まり合い、男の顔に落ちる。

「だれ」

ルーシェの言葉は自分の胸を打った。もう少しましな聞き方がある

るはずなのに、と心が悔やみの声を出す。だが、かえって男は微笑んでくれた。

「僕は、モリアス」

「シルウィア人ね」

モリアスは激しく咳き込みながら頷いた。そのまま地にくずおれる。ルーシエは期待通りの答えが返ってきたことに少なからず苛立ちながら、モリアスに手を差し伸べた。

「まだ無理よ」

「ありがとう。君がいなければ」

「それ以上いわないで。あたしは偶然あなたの見つけただけ。あなたの運が強かったの、あたしは何もしていない」

「何もしていないだなんて」

「していない」

「この手の治療も？」

「知らないわ」

「どうして」

「どうして？どうしてですって？あなたはあたしの敵、あたし達の敵。そんな人間にあたしが手を貸すと思わないで。いま森が燃え上がっているのも、どうせあなたの仲間の仕業なんでしょう」

「君は」

「あたしの故郷はシエド」

「ああそういうことか」

モリアスの言葉が、悲しみを帯びたまま夜の暑気の中に霧散していく。ルーシエはモリアスの胸中にある悲哀が、まるで彼の口を伝って這いだし、額に脇に体中にじっとりと湧きでた汗に染み込んでいくようで、急に羞恥がいきりたって、モリアスに伸ばした手をゆつくりと引き戻した。

「シエドの人に会ったのは初めてだった」

「殺されていたわ」

「殺されかけた」

「あなたが悪い。こんな時間にシルウィアの甲冑を着てウロウロしているんだもの」

谷底から乾いた熱気が吹き上げてルーシェの顔を揺らし、時折火の粉が二人の間に走った。モリアスの顔には不安の色が無かった。血の気がないのは変わらないが、心の揺らぎもないようだった。ルーシェは視線をモリアスから逸らす。

「森が燃えるわ。信じられない」

「ああ」

「シルウィアは嘘つきよ。あたしたちの生活を守るといわれたから、祖先は彼らの法を受け入れたのに」

こんなこといいたいわけじゃないのに。ルーシェの小さな胸は今にも張り裂けそうで、彼女にはそれが悲しいことだった。どうしてだろう。心があやふやで恐い。こんなこと今まで一度もなかった。

「どうしてあたし達はこんなに目にあわなきゃならないの？ねえ、何とかいってよ」

「僕は何もいえない」

「どうして」

「君がシエドの人間で、僕はシルウィアの人間だ。何をいつても嘘にしかない」

「言葉はみんな嘘みたいなものよ。あたし達の心は伝えられない」

「君の言葉は僕に届いている」

「罪悪感が沸いた？あたしに悪いと思った？だったらあなたはあたしをどうしてくれるの？あたしたちの故郷を守ってくれるの？」

「僕は追われているんだ」

「誰に」

「森を燃やした人間に」

「あなたはシルウィアの人間でしょ。どうしてシルウィアの人間に襲われるわけ。あれは」

森は炎に侵されている。ゆっくりではあるが確実に森は陵辱され、おそらくルーシェの生きている内に元に戻りはしないだろう。彼女

は幼少の頃から親しく歩き込んだ森の柔らかい土の感触を、否応なく吸い込んだ噎せ返るような生き物の息吹を、心の中に鮮やかに甦らせて描き、締めつけられる胸に手をあてた。

「シルウィアの人間じゃないの」

「いや」

「仲間割れ」

「そんな単純なものじゃない。シルウィアの国は強大だよ。もう仲間という感覚は薄れてしまったのかもしれない」

「どうして追われているの」

「僕の隊長が疑いをかけられる事件があった」

「あなたの上司のせい」

「僕はそんなこと思っていない」

「馬鹿げた人間の下で死んでいくわけね」

「シルウィア人の全てが君の思う悪人じゃない」

「悪人の方がまだわ。何も考えずに殺してしまえる。シルウィアはあたし達の感情を、自分たちの都合のいい法で縛ってないがしろにしてる」

「僕を帰して欲しい」

「馬鹿げた上司の下に？」

「僕にとっては父のような人だ」

父のような、といったモリアスの強い呟きにルーシェは思い出したように焦りを憶えた。

父様。

森が焼失する。この事実を手中にした時、父はどんな行動に出るだろう。何もかもかなぐり捨てて、装備を調べ、シルウィア兵を一人でも多く殺傷しようとして旅立つのではないか。自分の命さえ、捨てて。

父様。そんなこと、やめて欲しい。

周りの皆が制止することを願っているが、状況は限りなく切迫していて、若いルーシェにもシルウィアとシェドの関係がどうしよう

もないところまで来ていることがわかった。

燃え続ける森が、二つの地域をおさめてきた感情の容れ物を、無限に膨張させる導火線になる。器の外縁が壊れたとき、シエドはただ民族の誇りだけを残して、夢のように砕け散るだろう。シルウィアの法に背き続けなければ、シエドは子孫を残せない民族であり、シルウィアは今度こそシエドの習慣を是正しなければならないと考えるはずで、それでもシルウィアにシエドは抵抗する。そんな人間の集まりなのだ。大国に押しつぶされて終わる。

ただ、民族の誇りが怒号となって空間に漂っていればそれでいいのではないか、ルーシエは自分の考えの行き着く先を知って怯えた。思考の行く末が決まっている気がした。未来が思い描くとおりに進行していくような、陶酔感に似た幻影が心象にある。

「父様」

「心配そうな顔をしているね」

「心配よ。こんなことになったんだもの。あなたさえいなければ」

「すぐにでもシエドに戻ることもできたね」

「いいえ」

本当に申し訳なさそうに顔を歪めるモリアスに心を痛めたのも一つあるが、あの時ルーシエは変わらない未来を嘆いて踵を返した。責は自分にしか無く、モリアスに辛辣な言葉をかける自分こそが、はたして変わろうとした夢想の先の自分自身だろうか。目の前の現実こそが、ほんの数刻前に願った意識の具現したものとはどうしても思いたくなかった。

「どうして今夜なの」

シエドにとんで帰りたい、ルーシエは思った。

「僕のことは気にしないでいいよ」

「そんなことできるわけない。あなた達とは違うわ」

「すまない」

足に力が入らなくなつて、少女は地に座り込む。乾いた熱い風が、ルーシエの栗色の髪を夜に舞あげた。



誰も止められない。

誰も止まらない。

時が動くから、人は前に進まねばならない。ルーシエは時間が進み続けることを恨んだ。自分が自分としてしか存在できないことを呪った。

泣くつもりなど無かったのに、頬をさらりと流れる物がある。鼻の奥がかと熱くなって、喉が絞られて声が漏れた。彼女の頭の中は次第に白濁していった。

「あんたを何と呼べばよい」

アルゲラの声は明るい。もつとも、彼らの置かれた現状は未来の明るさからは外れている。彼はそれもわかってわざと明るく振る舞っているのだろう。卿にはそれがわかる。

「何をなれなれしく」

というイリシアの声を遮って、

「皆は私を卿と呼んでくれている」

卿も微笑で答える。イリシアは口を結んでそつぱを向いた。カンファイはその気色の変化を見逃さないらしく、たじろぎながら二人に視線を送っている。

「卿、といえばシルウィアでは領地を持つ者に対する敬称だ。しかし貴公は領地を持たないという。おかしなはなしだ」

卿の不遇を耳にしているアルゲラも、その内容までは知らない。

「名前など、どうでもいいだろう」

「では卿」

アルゲラはカンファイに、馬上のまま腕の治療を受けている。併走しているカンファイの負担にならぬようアルゲラは馬の足並みを揃えようとして、魔手に同情があるとうたった言葉に違わない、気遣いをみせた。

「トーリに勝てるか」

「あの人は天才だ」

「勝てぬか」

「勝てない」

「いやにあっさりいうな」

「勝てるか勝てないかは、なんとなくわかるさ。逆にいえば、戦闘を行う前に勝敗の行く末を薄々と感じなければ、首座には立たない方が良く私は思っている」

「気弱なことだ」

アルゲラは肩をすくめた。

「そのような弱気ではシルウィアには抵抗できないかな」

「抵抗する気があるのか」

「それは君たち次第だ」

「妙なことをいう。卿、貴公はとらわれの身に等しいのだ」

「アルゲラ殿、それはあなたも一緒だよ」

卿は振り返りながら笑った。

その視線の先に、卿は暗闇をひらく赤らかな夜気の流れを見た。

卿の顔が光の中で際立ったのを眺めた従者は、卿の目線を追い、馬を止めて後ろを振り返る。月光のもと、卿達のいる高地からは、森が遙か下の谷の中に大河のように黒々とうねりを上げるのを見下げられる。森林の中にわずかに溝があり、それが街道だろう。日中であれば、はるかシルウィアの首都までよく見えるに違いない。

その、街道を含む森が炎に包まれ始めている。にわかに揺らぐ炎が横一筋に広がり、煌々と燃えさかりながら白煙を上げはじめた。

無風であったが、炎が風を生み出すようで、煙は大気に混ざりつつ、シェドの方向に伸び始めていた。

「お、おお」

アルゲラの声の響きに努炎が混じるのを感じた卿は、シルウィアとシェドの関係をどこかで修復できるのではないかという、甘い観測を断ち切った。我々の身の振り方も考えねばならず、このままシルウィアの甲冑でシェドに入ろうとすれば、卿の配下であろうとなかろうと、領民の殺意に晒される。

「卿のおっしゃった通りに」

「ああ。これで活路が一つ消える」

「それは」

イリシアの声は、カンファイやツアイの代弁でもあった。

「トーリ殿はおそらく、シルウィアのシェドに対する統治には興味がない。あくまでも私と私に繋がる人間の排除だけが目的で、それ

ならば彼は、我々をシェドの領民の手で殺させようとしている」

「全ては後手に」

「そうだ」

「森を焼くような男を」

アルゲラの口から怒りの炎がゆっくりと吐き出される。

「貴公は仲間にするという」

「森を焼くような人間であるから、私は仲間に入れておきたいと思う」

「法王騎士団は強兵だと聞く。貴公は我々に降る真似をしながら、騎士団を招き入れ、シェドを内々から打ち壊す気ではないのか」

「そうかもしれない。だが、どうやってそれを確認する。例えそうだとしても、進んで害毒を受け入れる器がなければ、シェドは滅びる」

卿の気迫が、アルゲラの怨嗟の声を上回ったようで、アルゲラは声を潜めた。

「まだ、シェドが倒れてはならない」

「担がれるおつもりなのですね」

「そうする。だが、その前に皆が心配だ」

「魔手とは何だ」

アルゲラの声が卿の耳を衝いた。

「進みながら話す」

卿の表層から笑みが失せた。アルゲラが馬を寄せる。イリシアは、それを咎め、何かあればすぐに切り捨てると剣把に手をかけた。

「腕は繋がったか」

「なに？」

アルゲラは気づかないまま、手綱を握っていたらしい。すでに彼の左腕は本復している。アルゲラは驚いてカンファイに視線を向けた。若い魔手はゆかしく微笑んでいる。

「すごいな」

「そうだ。そう感じるのが正しい。魔手とは本来そういう価値のあ

るものなのだ。しかし、シルウィアの人間は魔手を嫌う。こころの底から憎しみぬいて、魔手は身を寄せ合って自分たちだけの生活圏を作らなければならない」

「シルウィアはなぜ魔手を嫌う。この力ゆえか」

「それもあるかもしれない。ただ、シルウィア人は完全なものを求める。五体が満足で普段の生活に支障のないことが人間としての最低限だと思っている」

「完全など馬鹿馬鹿しい。それに、死ねば皆ただの骸になる。完全なものなど、どこにもありはしないだろう」

「死ねば、か。その考え方もシルウィアの思想から離れている。シルウィア人は前世を信じるんだ」

「前世？生まれるより先の世を、シルウィアの人間は信じるのか」

「くだらないか」

「到底、及びもつかない思想だ」

「アルゲラ、君がそうであっても、シルウィア人の常識はそこにある。彼らにいわせれば、死は終わりではない」

「幸せな人間が吐く妄言はいやな臭いがするものだ。鼻についてしかたがない」

「では鼻を削ぎ落としてやろうか」

イリシアが鞘を引き払う音が聞こえる。彼女の剣は宝剣といってもいい。値打ちのわかる人間なら、法外な値段でも手に入れたいと思う。夜の光をよく煌めかす、それだけでも剣の力がわかる。そして、イリシアは手練れだ。アルゲラは最初に彼女と剣を交えた。アルゲラほどの男であるなら、イリシアの実力はよくわかるはず。しかし、アルゲラは強がった。

「やれるものならやってみろ」

シルウィアの人間ではない、ただそれだけに意地をかける。卿にはアルゲラという男の価値がよくわかった。頑なで、けして折れない個性の上に、繁栄を築く素地がある。

シルウィアにアルゲラがいれば、という言葉が卿はのみこんだ。

自分の隊にいる人間の能力が薄いとは思わない。ただ、彼らの大半、つまるところ、法国の大半は信仰に身を委ねて戦っている。自分の力とは違うところに中心を持つ人間は、どこか弱い。

わかっている。卿がこころの中で自嘲するのは、自分が彼らと、シルウィア人とは違うことに多少なりとも劣等感を抱いていたからだった。

アルゲラは私に近い人間だ。だが、望んではいけない先にある個性だからこそ愛おしくなる。愛おしさの大半は、一時の勘違いで、人を判断するのには不必要な感情だ。

「イリシア」

「卿、我々は侮蔑されたのです。我々の心の尊厳を踏みにじった男に、制裁を加えることが法国に務めるものの義務ではありませんか」  
「その法国に、私は追われている」

卿、と悲憤を口にしたイリシアは、しかしそれから黙って、剣をおさめた。

途端に、何か強い意志のようなものが、体の中心から大きく首をもたげて現れてくるのを卿は感じた。

「追われている、か」

「何がおかしいのです」

「いや、珍しい人生だと思ってね」

「珍しい？」

「そうだろう、イリシア。人に追われる人生などめったに体験できない。まして、国から追われるとは、もう笑いたくなる」

「お氣を確かにお持ち下さい、卿」

「氣は確かさ。これ以上ないくらいに澄み切っている」

アルゲラは二人の会話を黙って見守っていたが、やがて哄笑した。  
「何がおかしい」

「わしは、卿の器を見誤っていた」

「聞きたいね。私をどう見ていたんだ」

「もう少し、器の小さい人間だと思っていた」

「違っていたか」

「随分な」

「それはいい意味なんだろうな」

イリシアは、毒気をたつぷりと吹き込んで、アルゲラに詰め寄る。卿は苦笑せざるを得ない。

「卿、愛情の強い女が好きか」

「女はひとくくりじゃない」

「いいことをいう。シェドの女を卿は気に入るだろう」

「それは楽しみだ」

「な、なにをいつてらっしゃるのです、卿」

高い笑い声を夜気に吐いて、卿は馬の腹を蹴って、速度を上げた。魔手の話を続けよう」

卿はカンファイを笑いながら見た。カンファイも気づいたらしく、はにかみを浮かべる。ツアイが目を覚ましてそのやりとりを見つめているのを悟った卿は、彼なりの下世話な勘ぐりが、言葉ではない人と人との繋がりを探ろうという本能的な好奇心に重なって、少年の眼差しの根底に流れていることを知った。良好な意識を取り戻したこともうれしいが、彼が短い期間に成長していることも喜ばしい。モリアスを、ツアイの側につけてみてよかった。

卿は自讃を惜しむ人であるので、表面にはそんな感情があらわれない。よほど気心を知り、毎日のように卿の顔を見ているイリシアのような人間でなければ、たとえ陽光が燦然としていても、彼の普段の変化にはつとすることはないだろう。

しかし、カンファイにはわかる。

「カンファイは目が見えない」

「そうなのか」

アルゲラが聞くと、カンファイは気恥ずかしげに頷いた。

大気が熱を帯びて、顔から汗の雫が落ちる。誰もそれを拭おうともせず、お互いの声に耳を傾けている。

「しかしそなたは、さきほどわしの腕を正確にたぐっていた」

「我々には見えていないが、カンファイには見えているものがある」  
「なんだそれは」

「基板です」

「ごう、と遠いところで風が巻き起こる音が彼らを取り囲む。トーリ達がなぎはらっている森林の悲鳴のようだ」と、卿は思った。

カンファイ・ラ・ファンが明朗な言葉を放てば、卿達の思考に寄る辺をもたないアルゲラは困惑するしかない。

「基板とはなにか。実は多くの魔手たちは明確な答えを持っていない。なぜなら彼らは生まれながらにして視力を失っているものが多いからだ。つまり、彼らにとっての世界とはまさに基板だけであり、我々とは異質の世界に生きている」

「それで」

「基板の存在を現実の世界とはじめて対比させた人間、誰だと思う」  
「シルウィアの歴史など興味がない」

アルゲラがイリシアを睨めつけながらそっぴいになった。彼女はもはや動じない。

「トーリ殿だよ」

彼が巨軀を翻して思わず街道の方を振り返った時、横一列に連なる炎の帯が、森林のおよそ半分に到達していた。卿達の進む道は山影に入る。これからシェドへ入るまで、もう森の姿を見ない。

「森の燃える速度が早いと思わないか。魔手が手助けしているのだ。あの方は戦術的な観点から魔手を尊重した最初の將軍だ。そしてこれまで魔手たちを貶めてきた一切の妄言のすべてを疑い、きわめて合理的な思考に自身を委ねて魔手の存在を白日の下にさらした偉大な人物だ。彼がいなければ、魔手はただの奴隷に過ぎなかっただろう」

「ずいぶんとまあ持ち上げるものだな」

「私が勝てないという理由がわかるだろう。しかし実状はそうだ。ねえ、カンファイ」



「そうですね。我々魔手が、唯一信頼に足る將軍とはトーリ殿だけ、そうとらえる向きに間違いはありません。もつとも、わたくしにはもう一人おられますが」

「はは。それが私ならありがたい。私にもカンファイのように、基板を見ることができれば感情の起伏がわかるのだろっけれども」

私の不徳ですね、とカンファイが自嘲する。そんなつもりはないことは、お互いがわかっていているから、卿も目で笑ったに過ぎない。

「シルウィアの人間はまわりくどい」

アルゲラは声を荒げた。

「要するにどういふことなのか」

「あせるなアルゲラ殿。物事の順序は正しくあるべきだ」

卿の抑揚の効いた声に、アルゲラは激しく舌打ちをする。下品、とつぶやくイリシアにアルゲラは鼻をならして憤った。

「忘れていないだろうな。貴公の仲間が私の身内にとらわれている。森を燃やされていると知れば反シルウィアの感情が高まり、命を奪うかもしれない」

「そうかもしれない。しかし、君を伴ってはせ参じれば私の隊の人間は助かるという保証はどこにもない」

故郷を捨ててきたことに後悔を感じる卿には、森の悲鳴にかさなるシェドの領民の怨嗟が手に取るようにわかる。卿の故郷は生きているが、シェドは早晚滅びる。アルゲラの焦りは仕様のないものなのかもしれない。

しかしだからこそ、最善をつくす努力を忘れてはならない、と卿は自分に言い聞かせた。

「カンファイ、君にはアルゲラ殿がどう見える」

卿の思考にゆかしく寄り添うカンファイは、唐突に思える質問にも素早く応えた。

「大きくには楕円、その中に動く小さくて不規則なかたちの板がいくつも見えます」

これくらい、といって彼は指をわずかに動かす。光を捉えられ

ないゆえに、大きさが正確でないのか、それとも、不規則性を表現したかったのか。動くたびにカンファイが示す図形は大きさを変えた。

「何をいつている」

「カンファイは君のもうひとつのかたちを見ている。すなわち基板側のきみの姿だ」

「お前には信じられないだろう」

イリシアの悪態に、アルゲラはまったく素直に頷いた。

「本当にそんなものが見えているのか」

「見えています」

カンファイは、はにかみながらも、しかし口語にゆとりをもって、信念をこめて応えた。

基板の世界は魔手の生き甲斐である。

「感情に変化が有れば、基板の動きも変わる。魔手たちはその変化を我々の視覚よりもゆたかに感じ取っている」

「卿、感じ取ることができても我々は、うまくそれを言葉にのせる術を持ち合わせておりませぬ。どうぞ脚色なさらず」

「またまた。カンファイに限らず謙遜は魔手のわるい癖だ。脚色なんてしていないよ。君たちはよく気づく」

卿はカンファイとの会話の間にアルゲラを盗み見る。男は双眸をかつと見開いて、魔手を見続けた。

武人の冷徹な視線。

カンファイはアルゲラの基板のいくつか、先鋭な矛先を自分に向けていることを把握していた。彼は卿とむしろ近い年齢からは想像もできない童顔で、

「あれ、あなたは私とほぼ同じ年齢なのですね」

と意外そうに口にする、ははつとイリシアがさもおかしそうに笑った。

「あいつの顔が見えないから、そんなことがいえるのだ。どうみてもそなたより二十は老けているぞ」

「それはいくらなんでもいいすぎだろう」

と、卿。

「いいえ、卿。殿方をみるわたくしの目に間違いはありません」

アルゲラはそんな二人の動向など気にしない。

ただただ、驚愕するままに、

「そんなことまでわかるのか」

といった。イリシアが悲鳴を上げ、卿は笑った。

「うそ」

「基板には厚みがあり、そこを判じれば、おおその年齢がわかりますから」

「それで貴公たちは因果を書き換えられるのだろう」

「すべてではありません」

カンファイが目を開く。

灰色に沈む瞳に、月の光が吸い込まれていくと、アルゲラは眉根を寄せて心から嘆いた。カンファイに悟られないように太く息を吐く。その失望が、境遇の険しい魔手のところを波立たせないように配慮したように、卿にはみえた。カンファイの口元に微笑があったので、彼はアルゲラの意志が文字通り見えたのだろう。

「そうか。貴公の目は見えないままなのだな」

「ええ」

「わしの腕はつながったのに」

「基板はもとのかたちから変化があった場合、ゆつくりと形状が変わります。そうなると、私どもの手には負えません。しかし、あなたの腕の基板はまだかたちをたもっていた。だから、私は離れた部位をつなげるように少しだけ手助けをしました。もともと重なり合って存在していた部分を修復しただけです。大した作業ではありません。私の目はうまれつきのものです。特にお気になさらず」

「基板は何にでもあるのか」

あのカンファイがずいぶんと饒舌なものだ、と卿は感心した。も

しかすると、アルゲラとの相性がよいのかもしれない。

どうしても前線にたつことができず、補佐に回ることの多い魔手たちは、雰囲気独特のまるみを持っている。アルゲラの気鋭は凄まじいが、戦いの全篇にわたって同じように継続していけば、戦略に緩急がないだけに、胆力に長じ、さらに戦術眼を豊かにもった相手には、いいように受け流されるだけになるだろう。

カンファイが補佐を務めれば、アルゲラの勢いを制御し、必要に応じて力を開放できるような、そんな戦い方ができるのではないかと卿は考えた。

「基板はこの世の中すべてのものが持っています。われわれは基板が性質をつくり、動きが性情を呼び起こし、存在を定義づけていると信じています。なぜなら基板の動きや位置を変えると、多くのものが変質するからです」

魔手は、たとえば、といって路傍の石を拾ってくれるようにアルゲラに頼んだ。アルゲラはさして考えることもせず、馬を止めて下り、石を手にとって重さを確かめると、カンファイの右手を握ってのひらの上にのせた。

「ほとんどの石は、基板側では真円に見えます。薄い膜状の構造物がその円を覆っていて、その膜はかたんにはずせるのです」

カンファイは石に触れるか触れないかのところで、左手の人差し指をかぎのように曲げて、何もないところをひっかいた。すると、ぱすんという音がして、石は粉々に飛び散ってしまった。

アルゲラが目丸める。

「かたんに、と一口にいうが」

力が自慢の男は、道ばたに転がる石をつまんで、何度も非力な魔手と同じように手を動かした。が、何も変化は起こらない。

「いったいどうしている」

カンファイは問いに明瞭な答えを返さない。

「魔手は」

卿は、思い出したように、アルゲラ殿、馬に乗られよと間に声を

かけて、カンファイの埋められなかったことばの空隙をふさいだ。

「当然の理にしたがって、当然の行為をしている。そこには説明の余地がない。我々が息をする理由がないのと変わらない」

「そんなものか」

馬にまたがりながら、アルゲラは思考をやめた。その潔さが、卿はうらやましいと思うと同時に、惜しいと感じた。

「まるで魔法だな」

卿の横まで馬を進めながら、アルゲラはきつぱりとことばを吐いた。

「魔法か」

「違うのか」

「私にも彼らがどういう作業を行っているのか、わからない。ただ、魔手たちが基板の動向によって万物が定義されていると考えているのと同様に、私は、魔手自身が基板を観測するから、世界が成り立っているのではないかと思ってるんだ」

「どういうことだ」

「魔法などではない、ということさ」

「どうもわしは、貴公の思考に、その、なんというか寄り添えない感じがする。まるで拍子が違う。ただの魔法でいいではないか」

「私はもつと人間の可能性にかけたいんだ、アルゲラ。なぜ、我々とは違う思想や能力をもった人間や生き物が存在しているのか、知りたくはないか。この世のすべてに私はちゃんとした理由があると思う。私は感じ得たすべての経験から、諸事の根本を探して確かめるかたちで示していきたい。それができるのは、人だけだ。魔法だといってしまえばそこで終わりだ」

「理由を見つけても、そこで終わりだ。徒勞に終わることはある」  
「アルゲラ」

「神にでもなる気が、卿。それとも、もうなつたつもりでいるのか。ふん、理由など、探す必要もない。そんなもの、おのれででっちあげればいいだけだ」

卿の馬の歩調から静かに離れていくアルゲラを、卿は寂しく見た。これ以上議論を重ねることに違和感を覚えた卿は、それは違う、とはいえなかった。

シエドの民が、もしすべて、アルゲラと同じような思考であるなら。

私の出る幕はすでになく、この道はただ死地へ赴くためだけに整備された工程なのかもしれない。卿はそう思った。

「そろそろ甲冑を捨てるよ」

卿は大きく息を吐いて、後ろの三人を振り返った。頭を掻こうとして、手を痛めるのも、これで最後かもしれない。

私はすでに。

まもるべき人間の顔を見るためにしか振り返れないのだ。

着飾るものを捨て去り、シルウィアの記号を棄却すれば、我々は定義されない生き物になる。彼らには少々慣れない生き方かもしれないが、耐えてもらわねばなるまい。

卿はすぐ側を振り返ることで、少しの間だけ、前を見続けようとする己の生き方をかえりみた。近い将来に、こういった余裕すら生み出せなくなる予感が、彼の胸にさざめいて、ついに消えなかった。

「魔手は、性質に手を加えるだけだ。事象の流れが変化するのは、定義が見直されれば当然で、それが因果を書き換えるといわれているわけだね」

モリアスは鈍痛が続く頭で、以前、卿にいわれた魔手の概要を思い出していた。

当初モリアスも魔手を毛嫌いしていた。彼の故郷を襲った部隊の中にも魔手がいて、その存在に与えられた被害は甚大だったと聞かされたからだった。しかし、卿はモリアスをさとしていった。

「魔手は存在をしめしている。モリアス、では君は何者だ」

少女が泣く理由を、モリアスは探しあぐねている。

口から声を出せば世界が変わるかもしれないとわかっていても、どのように変貌するかわからないままことばをつむぐことが、モリアスには不得手だった。変わっていったものに対して応変する才に欠けていると、彼には自覚があった。

君は何者だ。

卿の問いに窮したあの日から、モリアスは状況の圧力に屈し、両方の足に体重が乗らず、ふわふわと浮いているような感覚になるたびに、自分の存在に意味がないような気がしてこたえられない。

頭に響く鈍痛のせいにするのはたやすい。しかし、それでは我慢ならないとどこかで自分のからだの一部が叫んでいるようにも思う。彼はしかし、心を落ち着けようとすればするほど、頭の中を揺らされるようで、何もする気が起きなかった。

何も考えずに森を見遣る。ため息がモリアスの口から漏れ出た。横一字に広がる炎の帯がしたたかに森を削っている。世界が、もしや風と炎の下に沈んだのではないかと思われるような、悪い夢の中にいるようで、焦土を踏みしめてシェドへと行軍するシルウィアの兵士に、モリアスは深い嫌悪感を抱いた。

あれが噂に名高い法王騎士団だというのか。

「悪名だ」

モリアスは呟く。

モリアスはシルウィアが好きだった。もともと砂地に近い場所に興った国だから、毎日のように砂塵が舞い、布で顔を覆う人間が多く、異邦のモリアスは最初は戸惑った。誰が誰だかわからないようなこんなところで、自分が生活していけるとは思われなかった。

だが、出会った彼らのいずれもが国に対して尊崇の念を忘れず、愛国の一存だけで命を捨てられると知った時、モリアスは心の底から感動した。

その感動の記憶が、いま踏みにじられているように感じた。

卿に会いたい。卿に会えば、救われる自分がいる。わだかまりの大半を消してくれるのは、モリアスにとってみれば卿しかいなかった。

自らも、彼らと同じように戦いたい。国のために、自分の血や肉を差し出してもよいと思って、兵学校に入学し、ずば抜けた成績で卒業した後、今とは違う部隊だったが、戦地で出会ったはじめての上官が卿だった。

卿ははじめ、捉えがたい人だと思った。

兵学校で教授された戦術は、長いシルビアの戦いの歴史から、抽出され濃縮された要素をまとめたきわめてわかりやすい、人の動かし方だった。兵学校時代には、模擬戦闘でも、実際の戦闘でも同じように役立ち、モリアスはそれを充分にいかしきれていると感じていたが、卿を目前にすると思ったように意志が疎通できなかった。

卿は戦闘中ほとんど指令を出さない。それでも隊員はよく動き、ときおりイリシアが卿から指図を受けたわけでもないのに、隊伍を均した。モリアスはまったくその文化になじめず、しかし生来の引っ込み思案がわざわざいして何もいえなかったが、卿はよく認めてくれた。ことばに頼りすぎていることをモリアスが知ったのはずっと最近になってからで、彼は、当時の自分を思い返すと、よくもまあ



懲りもせず恥ずかしげもなく弱音を口にし、そして、卿はそれに応えてくれたものだときれた。法王位を継承できる権利があるなど、卿は微塵もいわなかった。

卿の側にはずっとイリシアがいる。彼の側には泣きじゃくる女の子はいない。

俺は女は嫌いだ。

ツアイのことはがモリアスの脳裏に甦る。

たしかにルーシエはしゃべらない。泣き続ける理由もあきらかにせず、ただただ嗚咽をもらす。それはとても困ったことだけれど、若い兵士は自分の手の甲を覆う布きれが彼女の衣服と同じ模様であることに気づいて、さらに当惑した。

「ルーシエ」

モリアスはやさしくゆすり起こされた記憶を、静かに深く思い出すように、そつとことばを発したに過ぎない。

「気安く呼ばないで」

それなのにルーシエは、目を大きく見開いてモリアスにきつくあつた。

紺碧の瞳が、それだけで意志を持っているようにモリアスを見ていた。どうして、暗闇の中でこんなに光がそこにだけあるのか、モリアスは不思議に思った。

「そんなつもりじゃ」

ルーシエはきつく唇をむすんで、顔を覆いまた黙ってしまった。

モリアスはため息をついた。

追っ手は確実に距離を縮めている。歩くこともままならず、うずくまる自分は、ただの獲物であり、人質にでも取られたら、卿の足を引っ張ってしまう。

そんなどうしようもない状況が、若い騎士のこころを蝕んで、巡り続ける思考の迷路に誘い込んだ。

どうして、卿が追われなければならない、というおよそただの善

意から考えれば辿り着かない問いが、彼を深く深く締めつけた。卿が犯人ではないという確固たる証拠もないが、卿が狙われる理由もない。もつとも、心情の根幹が人の悪意にそれほどさらされなかったモリアスには思いつかないだけだったが、ついにシルウィアは狂いはじめてしまったのだと若い騎士は悲嘆にくれるのだった。かわらで泣く健気なルーシェの姿を作っているのはあの王国だ、と信じ始めると、逼迫した時勢と、拙い思考、ことばにできない熱いしこりのようなものがもつれあつて、モリアスのころは、制御のきかない感情の波で泡だらけになった。

だが、泡はすぐにはじけて消えた。

彼は飛来する矢羽が空気を切り裂く音で、現実に戻された。

モリアスは鈍重なからだのことさえ忘れて、ほぼ思考の範囲の外で、ルーシェに覆い被さった。少女はひあ、と小さく悲鳴を上げた。その幼さは騎士の心音を一気に燃やすには十分だった。

鏃が大地に突き立つ音。

その音に、モリアスの心象が蠢く。

追っ手、追っ手、追っ手。

三回胸裡で復唱して。

現実にも目を凝らす。

情報を集める。

卿は、モリアスにそのことだけを教えてくれた。

夜のくらさにすっかり目は慣れているはずなのに、相手は見えず矢の音以外に何も聞こえない。

何人だ。

一人か二人か。

囲まれているのか。

進むべきか退くべきか。

剣に自信はないが、モリアスはもつと執念をあげて研鑽してくるべきだったという後悔の念をおさえて、鞘をはらった。

うずくまるルーシェの体温が、甲冑の隙間からモリアスのからだ

に入ってくる。

これは。

これだけは。

まもらなければならぬという激しいこころの声に、モリアスはうちのめされ、体面に滲み出た情を静かに消した。

甲冑に鏃が当たる。

顔面を守ろうとしたが、兜はなかった。

瞬く間に、彼の足もとにいくつも鏃の列ができた。

「姿をだせ。何者か」

「貴様こそなんだ」

闇と闇の隙間から、男の声だけがふってきた。

遠い。思っているよりもずっと。

見渡す限りに視界が開け、人がたてる場所は見当たらない。目を凝らすにつけ、周囲はわずかな緑さえさみしい岩肌のむきでた山道だ。片側は崖下で、もう一方も断崖であり、彼らがいる山を円錐とみれば、ちょうど錐の頂に向かってぐるりと同心の円を描いたように、岩を削りだした街道になっている。幅員は小さく、影が動けば必ず判じられる。

目の前の崖上を見遣ったが、そこに人の姿は見られない。山道は勾配があり、彼は高い方の土地を見た。が、やはり誰もいない。

モリアスはいぶかしんで、ルーシェをかばったまま、何の気無しに上空を見上げた。

あるはずない、選択肢として成立しないような場所に。

影があった。

鳥の類ではもちろんなく。

モリアスにははじめ、とても人には思われなかったが、黒い影はゆるりと動き、その動作のあまりの自由さは、彼の思考の帰着点を決めてしまつて、人間以外だという結論を許さなかった。

「なんだ」

モリアスが応じるよりも早く、ベそをかいていたはずのルーシェ

が動く。

「ノルト！」

影は明るい声を返す。

「ルーシェか？」

「どうしてそんなところに」

「説明はあとだ。おいおろしてくれ」

黒い影は二つあって、夜の合間にとけ込んで動作の詳細はわからない。モリアスが、なんとか理解を得ようと目を凝らすあいだに、二つの影がなめらかに地面へと降りてきた。

短弓を担いだ長髪の男が、モリアスを睨む。

「貴様、シルウィアの」

「まって」

ルーシェが距離を縮めようとする瘦躯の男とモリアスの間に入って、両手を広げた。

「この人は、ちがうの。あたしは何もされていない」

「邪魔するなルーシェ。シルウィアの甲冑を見ると虫酸が走る」

「待ってノルト、話を聞いて」

「どけ」

「あたしが、あたしが助けたの」

そのことばに、一番驚いたのはルーシェ本人だったかもしれない。

彼女はモリアスを一瞬だけ見た。

「なに」

「だからお願い。彼は追われているだけなのよ」

ノルトと呼ばれた男は、夜の中二つの目を幾度もきらめかせて、ルーシェとモリアスを交互に見た。目前の人間に情の灯りが、淡くではあるもののゆらめいたのを見て、モリアスの心情は、湿った夜気のように弛緩した。

しかし、

「嘘は、おいいでない」

ノルトの後ろにおぼろげに佇んだ男の声は、冷たく、強い響きを

もっていた。

およそ、人の情を理解しないのではないかと、モリアスに剣把を持ち直させるほどの声色だった。細かに震える水面のようにモリアスの皮膚は総毛立った。

迷いを含むノルトが、切実な表情で振り返ったのは、多大な信頼をその男が負っている証左らしい。ルーシェが小声で、だれ、とたずねてみても、ノルトは左手で制して、白銀の無精髭をなでる男のことばを待つて、こたえなかった。

「長の娘ですなあ。同じ調子が基板にみえる」

「ウバル殿」

モリアスの脳裏に、古い記憶に降りかかったほこりを舞わせる、急風が吹いた。

カンファイラ、卿の隊の魔手とはじめて会った時、卿は記憶しておくべき二人の魔手の名を教えてくれた。魔手の中でも、特に精巧に基板を操作し、一人の能力のみをもつてして城を傾けるほどの伝説的な二人の名。

一人は、魔手創世期に尋常ではない努力の末に、後世の魔手がけして追いつくことのできない境地に達したといわれる偉人、ゾル。彼はすでにこの世の人ではなかった。

そしてもう一人。

生まれついでの際物と呼ばれる男、ウバル。

彼一人で、数万の軍を手玉にとることもあったという実力者が、いまモリアスの眼前にいる。

卿は、噂に過ぎないが、と実力を懷疑して笑ったが、モリアスのからだは、どれだけ正面にいる人間が自分とは異なる存在か、つぶさに感じていた。彼らがまるで空中に静止しているように振る舞えたのも、ウバルの実力ゆえなのかもしれない。

「おやあ、珍しい。魔手を忌み嫌うシルウィアの少年よ。私をご存知か。そうか、そうか」

高い声で突如表情を崩して笑うウバルの顔に、モリアスは狂気

をみた。こころを読まれる、カンファイや他の魔手にも同じように考えていることをすくい上げられたことはあるが、そのどれとも違うはつきりとした戦慄を、若い騎士は覚えた。ウバールの手が、モリアスの頭の中に潜り込んでくる、そんな画像が彼の脳裏に浮沈した。

「ウバール殿、時間がないのだろう」

「うむ、そうでしたな」

「ノルト、父様は」

どう見てもモリアスと年端が変わらないノルトの両腕にすがって、ルーシェは泣きながら聞いた。ノルトは首をふる。

「俺には止められなかった」

ああ、と嗚咽を漏らして、それでもルーシェは、きつく唇を結んだ。

「さすが一族をまとめる長の娘。気丈なことだ」

彼女はウバールの発言に不審な目を少しだけ向けて背けると、

「ノルト。いったいなぜここに」

と、聞いた。

「シルウィア人が森を燃やしていると聞いた」

「そう」

「それに」

「それに」

「ルーシェがまだ戻っていないと聞いた」

「それだけで」

「俺にはそれが重要なんだ」

モリアスは、そんな二人のやりとりを微笑ましくみていた。二人の関係が男女のものか、肉親のものかはわからないが、しばらくぶりにあたたかい交流を見た気がした。

「やがてシルウィアがそれを蹂躪する」

耳元に息がかかったようで、モリアスは鳥肌だった。

反射的に振り返って斬りかかろうとする左腕を、伝説の魔手は動

き始めを手のひらで制した。彼はいつのまにか、モリアスの背後にいた。

「どうした。それがいやかね」

「む、むろん」

「なぜだ。シルウィアはそうやって世界を均してきた。そうすることで、戦いを無用なものにしてきたのだろう。そう教わらなかったかな」

魔手からは意外にも、こころよい香りがした。翳りを乗り切った月明かりに照らされてよくみれば、男前で、劇場にいる役者のような目鼻立ちをしていた。

「そうだとっても」

モリアスは見かけだけでこころを許しそうになる自分を戒めるように、なるべく強いことばを向けた。

「人の営みを壊す権利は誰も持っていないものです」

「性根が曲がつていないご様子で、まことに重畳だ。親のしつけがよかったのだろう。しかしそれでは、さぞや、戦役では苦労したとだろうねえ」

「それは」

モリアスは口ごもる。

彼は思い返した過去の情趣の中に、うち倒してきた敵の亡骸の後をかんがみたことが一度としてなかったので戸惑ったのだった。

「若いなあ、少年。実に若い」

ウバールは声色をがらりと変えて、モリアスにそういった。まるで、近所に住む古なじみのようで、騎士の心中は混沌とした。魔手とはおくゆかしく、どこか女性的、あるいは幼さを維持したものであると感じていたモリアスにとって、ウバールの存在は極めて異質なものだった。恐怖を感じた彼はなんだったのか、どちらが本当のウバールか、彼にはとても掴めない。

モリアスの困惑した顔を眺めたウバールは、満足そうに眉をひしやげて笑った。

「ばっかじゃないの」

遠くでおこったルーシエの怒鳴り声で、モリアスは身をすくませ  
て、彼女らの存在を思い出した。

「あんたが、あんただけでも父様を止めてよ。あたしのことなんて  
放っておいて」

「ばかいうな。放っておけるわけないだろ」

「あたしはあんたのそんな優しさが嫌い。あんたはシエドとあたし  
とどっちが大事なの。あたしがいなくなってもシエドは保たれる。  
でも、シエドの頭が、父様がいなくなったら、もう何もかもおしま  
いだわ」

「長は止めようとするやつらに剣を向けたんだ」

「きられなさいよ、男でしょあんた」

ノルトは口ごもるばかりのようで、ルーシエの問いに満足に応え  
られない。

「女はこうなると本当に強いのだ。少年、ああいうのがいいのか」  
「そう思われるようなら、伝説と呼ばれたあなたの力も、大したこ  
とはありませんね」

モリアスはルーシエの声で、すっかり何かがずとんと腹の深いと  
ころにおちてしまった。ウバーはきよとした顔で、彼を見て、  
それから短く高い声で笑った。

ひやつひやつと下卑た笑い声で、魔手はからだをふるわせた。そ  
して、まだわめきちらしているルーシエのそばにより、

「おじょうさん。ノルトをつれてきたのは私だ」

と、告げる。ルーシエは深い茶色の目をにぶく輝かせて、ウバー  
ルを睨みつけた。

「あなた、だれなの」

「こわい顔だ」

モリアスは声を張った。

「魔手ウバール。世界の頂点にたつ、唯一にして絶対の、魔手の中  
の魔手」



ウバールはモリアスを振り返ってにんまりと口角をあげた。

「少年、きみにその話をした人間は、ふたつの点で優れている。一つはわたしの存在を知っていること、そしてそれを君に伝えたことだ」

「ましゆつて、なに」

「長の娘よ、その話は後だ。私は森を燃やすようなふとどきものを咎めにきた。ノルトには案内を頼んだのだよ。もちろん、君を心配していたがね。さて、時間がないのはたしかだ。もはや彼らを止めるのは、私しかおるまいよ」

いかにもこの蒸し暑い季節に不釣り合いな黒い衣をまとつて、しかし、ウバールは汗ひとつかいていなかった。そのことに気づいたモリアスの背を冷たいものが走ると、魔手はいまにも伝説になりそうな眼光を見せた。

深く深く。

突き刺されたらけしてもう。

抜きとることのできないような、そんな形容をさせる目のちらちら振り返りながらだったので、ルーシエはみなかったかもしれない。だが、モリアスははつきりと見た。

視線にふれるだけで、すべてが寸断されてしまつと彼が思ったことは、いままでに一度もなかった。

「少年」

モリアスは我にかえつてうなずく。

ウバールは、モリアスにだけ聞こえるような小さな声で、

「トリー將軍の眷属だな」

といった。

「何もいわなくていい」

「隠しているわけでは、ないのです」

「そうか。だが、こころの置きどころがないようだ。お前の胸中は煩雑ですくにくいだが、トリーを認めたくない気持ちだけはわかる」  
「僕は」

「少年」

「は」

息がかかりそうな距離に顔を寄せて、

「私は今から將軍の持ち駒を殺す。魔手を殺す」  
と、いった。

「トリーはいずれ私の仕業と知り、必ず私を呪うだろう」

そして、壮年にすこしさしかかったと思われる魔手は、わずかに  
微笑みを暑気の中にのこして真顔になった。

「私はそれを、ながいこと望んでいたのだよ」

森の大半が、恐るべき短い時間の中で、消失した。法王騎士団の魔手は総勢で三十五人おり、それぞれが役割を分担し、類焼を程度よくおしすすめた。

あまりのあつけなさに、兵達の間には空虚ささえただよっている。ベルトレとトリーは馬上にいて、共に並びながら、熱と灰になって散逸していく木々をただ眺めていたのだが、無論意識は広角にひろがっている。

「將軍」

「見られているな」

「ええ」

「どこだ」

「わかりません。ですが、おそらく、我々を眼下に見ることのできる場所でしょう」

「佐將殿ならば、どうする」

「森がわたしの眼前に拡がっているのであれば、追わせます」

「同感だな。だが、敵兵力全体が一カ所にまとまっている可能性はないか」

「さて、どうでしょうか」

「まあよい。どのみち、シエドに向かうしかない街道である。後ろに下がることはなからう」

シエドは法国に併呑された中でも新しい部類に入る。法国の首都からは距離的にはかなり近かったのだが、合間におおいかぶさるような高い山嶺と深い森があったので侵攻に随分と時間がかかった。ようやく開通したこの小さな街道以外には幹線はない。シエドはまさに陸の孤島と呼ばれてさしつかえない土地で、久しくその存在が知られていなかった場所でもあった。

それがいまや、手をのばせば届くような距離に近づきつつある。

ベルトレには、そんな実感があつた。

「正直な気持ちを申し上げてもよろしいですか」

トーリはベルトレを見てうなずいた。

「これほど、とは思いませんでした」

「魔手か」

「ええ。わたしは確かに、少し前まで本当に森の前にいたはずなのですが、その記憶でさえもが嘘に思えるほどに」

「おぬしのような生粋の法国人がそのようにいつてくれるのは、ありがたい。彼らもむくわれよう」

「そうですか」

ベルトレの声に多少湿り気がある。

己の不明をはじる、というより、人の無力さに対するなげきのようなものが、戦場で数多くの死線をこえてきた彼の自負を打ち砕いた。魔手が作り上げたどうしようもない力の波がベルトレの芯の部分にも干渉して、よぶんなものを削ぎ落としてしまったのだった。

ベルトレは持ち前の大声のせいで随分と大雑把な人間であると思われがちだが、もともとは思慮の深い人間で、ただ、自分ではそれに気づいていない。トーリは、寡黙になった副官の中で、そういった隠れていた部分が表だつたベルトレの上面の領域にまで現れようとしているのではないかと推察していた。

「さて、もう馬も通れよう。魔手を退かし、そろそろ出るとしようじゃないか。我々の出番だ」

焦土の上には炭化した木など一切倒れていなかった。魔手は、木々の全てを灰にする努力を怠らずその辺りの性質の変化にまで気をめぐらせていたので、馬が嫌がる環境はどこにもない。つまり行軍に邪魔なものはない。しいていえば、まだ白煙が充満していて、視界を遮っていることがわずかに気がかりとして残っている。だが、それは相手も同じだろう。相手が遠距離にいるかぎり、ベルトレたちの影は隠れる。

魔手たちは、さらに遠方の森林にまで基板の改変の手を伸ばして

いた。煙幕の向こうに橙色の陰影として揺らめいている彼らが指揮官らの目にうつる。

「法国は誇りに思わねばなるまい」

「魔手ですか」

「そうだとは思わぬか。これほどの力を有していながら、虫けらのように扱われ、不随のからだのまま、魔手という尊厳だけをまもっている。彼らは法国に牙をけして向けたことがない」

「たしかにそうです」

「おぬしのような人間がふえればよいが」

ベルトレはトーリのわずか後方を進みながら、溶け去った森を眺めた。あの構造物はもう見えなかった。

「我が目をうたがうことをしないなら、理解は深まるでしょうが、逆に迫害されるかもしれません」

「魔手に同情するのか」

「恐ろしいとどこかで何かが警鐘をならしているような気がします」

「人とはむなしなものだな」

ベルトレは何もいわずに、トーリを見た。

「何かのいのちを奪い、生かされることの自覚がなくなれば、同じ生き物を蔑視するようになる。そう考えると、人が生きている理由などないのかもしれない」

「それは、お考えが過ぎるのでは」

「そうかな。我々人だけがみとれる名画や音楽にどれだけの価値がある。人でなければわからないものを愛するしか能がない生き物に、なんの未来があるのか」

「將軍は人がお嫌いなのですか」

「数十年この世界にいれば、好きにも嫌いにもなる。ただ、わしのなかでは影の方が色濃いのは確かだ」

「魔手も人です。將軍は魔手を大事にしている」

「変わったな佐將殿。貴公らにとって、魔手は獣も同じだっただろう。法国は獣を飼い慣らしていると思っっている。わしは、魔手たち

を、だから、憎めないのかもしれぬ」

「將軍」

「なにかね」

「黙っていましたが、我々が追っている人間も魔手から依拠されています」

「魔手が身内にいる時点でそうであると思っていた」

「次代の法王になるはずの男でもあります」

「ほう」

「もっとも、アンリ様に見出されただけですが」

「法国のやり方に準拠している。なにも問題はない。どうした、急に」

「將軍、あなたは魔手を用いて功績をのこし、一方は同じようにふるまいながら、こうして追われている。私はその差を探しあぐねているのです」

「こたえようのない問いだ」

「私がこれから誰かを指導するときに必要なことです。どうかご教授を賜りたい」「わしは中央から離れ続けてきた。ただそれだけであるうよ」

「そうでしょうか」

トーリは問答から避けるように、馬の歩みを早めた。

ベルトレは、森が燃える光の壁の中にまるで吸い込まれていく老将の背中を眺めて一つ小さな息を吐いた。

魔手の圧巻の様は、法国に身を置くものにとってはいまでも認めたくない。だが、彼らに力を出させているのはまぎれもなくトーリの手腕であるのだから、魔手を用いるかどうかはこれまでのこだわりが胸裡にのこるベルトレには、いま、選択することはむずかしかったが、こころを掌握し続けるトーリの手法を研究したいと思うのだった。

おのれで考えろ、といわれたのかもしれない。

ベルトレはそう捉えることにして、馬の腹を蹴った。

が、馬は進まなかった。

「どうした」

ベルトレが何の気なしにかけたことは、佐将の後ろにつづく、法王騎士団の人間の中にいぶかしさとともに魔法のように伝播していった。トーリの馬もとまった。

顔をあげて遠方を見遣る。

ベルトレはそのときに魔手のからだだが直方体の黒い板に飲み込まれてしまう錯覚をみた。

「ああ」

ベルトレが声をあげた。

「なんだ」

離れているトーリの声が鮮明に聞こえた。

「魔手たちが」

「む」

ベルトレたちの視界に一本の木が現れた。

何の前触れもなく。

突然に。

最初それが、木であるかどうかがあやしかったのだが、幹を太くし、枝葉を伸ばそうとしているのは、確かに樹木だった。

悲鳴が上がった。

魔手たちの叫び。

ベルトレの思考はとたんに遠景に去った。

幹は一人の魔手の内側から生えた。

当然にして、人間の皮膚はぼろぼろに引き裂かれて、やがて地に根を張る大樹に呑み込まれた。

周囲が一瞬静かになり、そして騒然となった。

だが、騎士達や兵卒は、いったい何が目の前で起こっているのか理解できない。

その間にも次々に魔手のからだから幹が生まれ、喉を突き破って天に伸び、足を縫いつけるように大地に根ざした。根は異様な速度で、逃げまどう魔手の足を絡め取って、転んだ魔手の背や腹を突き抜き、同じように大樹を育成した。

やがて。

総勢が三十五名を数えた、法王騎士団の魔手たちは、残らず、三十五本の樹木になった。

魔手たちの血が焦土の熱を奪い、燻った炎から力をもらって蒸気を発した。

何もかもがあまりに誰の理解にも及ばなかった。

生まれ出た大樹だけが夏の夜に不気味に立っている。

ベルトレは、これはタチの悪い夢だ、と思った。

「な、なんだ。いったい何が起こった」

自分の叫び声が、まるで遠い。

そう、だからやはり、夢だ。

厭戦気分が隊に広がっていると、よくベルトレの上官は自軍が壊滅的な打撃を受ける夢や、考えも寄らない事象にでくわす夢を見たといっていた。彼らはそのたびに自分を戒めて、隊に緊張を保った。つまりベルトレはいま、歴戦の良将のように、思っていた以上に敵を侮っていたので夢の中で反省をうながされている、そう思った。

ようやく俺もその領域に足を踏み入れたのだ。

そうでなければ。

ならない。

ベルトレの呼びかけに答えるものは誰一人いない。

兵たちの身に異変がなかったことから、より事態は暗澹とした。現状を把握できたのは、もしかしたら、魔手たちだけであって。つまり誰にも、何もわからない。

周囲の闇が、いつその濃さになった。木々が、炎の及ぼす光を遮ったからで、それほど恐ろしい高さに屹立している。樹木はこの辺りによくみられる常緑樹で、青黒い葉が夜に蠢いて、背後にある



光が、葉の間を通り抜けてわずかに見えた。明暗が色彩を歪ませて、光景は耽美的な印象を匂わせた。

聖者でも出てきそうだ。

ベルトレは思った。

しかし、荘厳ささえある景色の中で、魔手たちの息の根はおそろくとだえた。

將軍、という言葉を、ベルトレは何度も懐にしまった。

その行為に意味を見いだせなかった。

ベルトレは馬の腹を蹴る。

無意識のうちに。

ゆるり、とあたたかい風がベルトレの頬を撫でた。

彼らは今度はとまらなかった。

血の。

鉄の。

匂いがした。

ベルトレの他には誰も前に出ない。彼を止めるものもいなかった。百戦を錬磨してきたはずのトリーさえも、ベルトレには一声もかけなかった。

危ういかどうかの判別が。

誰にもつけられない。

思うに。

危険と。

そうでない場合の差とはなんだろう。

そんなことをベルトレは考えた。

なぜ、そんなことを考えた、という疑問が同時に胸裡に起こった。なぜか。

俺は自身にはつきりと、こう答えることができる。

つまり、そのような疑問を持つことが、そもそも夢でないことのアかしなのだ。

自分はいま、普段よりも多くの段階を踏んで、現実を直視しよう

としている。

だから、自問することで夢かうつつの境を明確にしようとした。そこから導き出された結論は、いうまでもないことなのかもしれないが、当然にして夢ではないのだった。

夢ではないとすれば、いま俺は何をしている。

深い恐怖がわき起こって、足を痺れさせた。

それでも、馬は進む。

木が頭上に見えた。

枝葉の先に、魔手たちの服がひっかかっていた。ベルトレは幼少の時期に大きな水害に遭った。その時、同じような光景を見たことがある。

幹に目を遣る。

「ああ」

人とは何か、俺は問われているのか。

シルウィアの人間は、完全でないことを嫌う傾向にある。人でいえば、四肢があり、頭部が明確で、流暢に話し、人間関係が円滑であることを好む。心身に障害があり、吃音が混じったり、誰かの手助け無しで生きられない人間を避け、また、異端の思想に難色を示した。だから、ベルトレも心のどこかで、魔手を嫌った。

ベルトレが見たものはなんだろう。

顔が。

幹に浮かび上がっている。

眼窩のくぼみや、鼻梁はとにかく明らかで。

はては髪や髭といった細かい線までが、大木の幹にある。

立ち並んだほかの木々も、みな同じだった。

だが。

表情が違う。

断末魔の表情なのか、ひどく引きつった表情を浮かべたものや、瞑想の最中のような

安らかな表情もある。

それらは全て、人間の表情。

だが、これはいつたいなんだ。

ベルトレは思わず、一本の木に手を伸ばした。

その木に浮かんだ顔は、はだあいになこそ重ねているが、こころの底から誰かのために歌を唄い上げる時のように、強い指向性と愛する人がいるという深い安堵とがないまぜになっていて、一際目を引いた。

顔に。

触れてみたかった。

ベルトレは手を伸ばす。

木だった。

何の疑いもなく。

樹木の膚だった。

ざらざらとした感触が、もしかしたら、というベルトレの希望を無惨に跳ね返した。

けして、人ではない。

「彼とは」

ベルトレが振り向くと、いつの間にかトーリが近づいていた。名将と呼ばれた老人の拳措は、からだから染み出てくるように自然で、おそらく、これまで誰にも感情など感じさせなかったに違いない。

「わしの故郷の貧民窟で出会った。両親はシルウィアの侵攻に抵抗して殺されて、身寄りもなかったが、法国への怒りの中で独学によつて魔手の技術を手に入れていた」

「将軍が引き取られたのですか」

ベルトレには怒りも悲しみもない。思いめぐらせてみれば、恐れさえどこかへと消えている。淡々とした口調を維持できる自分という存在に彼は疑問を持ったが、行動には支障がなかった。

「最初の一人なのだ。こいつに出会わなければ、魔手という存在を知らずに、わしはただ敗軍の将として処刑されていたかもしれん」  
「そうでしたか」

「佐将殿。こいつは死んだのか」

「さて、どうなのでしょう。少なくとも、もう人ではないのでしょうか」

「人でないことは、死んでいることと同義か」

「私には、そうです」

二人は一度も視線を交わさずに話し合ったが、向けられた視線の先には同じように老いた男の顔があった。ベルトレは今になって思い出したが、あたかも樹木の一部になった彼は、ベルトレの脇を通り過ぎるとき睨み去った男の一人であった。

「不思議なことだが、わたしには怒りも、おもだった悲しみもない」

「私もです」

「おぬしはこいつを知らぬ。身近にいない者の死が心を揺るがすような人間など、あまたの中に塵ほどもおるまい」

「では、將軍はなぜ」

「わからぬ。わからぬが」

トーリはベルトレがやったのと同じように、樹皮に手を伸ばした。あるいは、そのままでよいのかもしれない

風が吹いた。

先程までの湿気を多く含む嫌な風ではなく、初夏を思わせる豊かな情緒に満ちた風である。みやびに木々を揺らし、新緑の葉振りを整え、香りを運ぶ風気だった。

風は根から幹を伝って、トーリやベルトレの頭上も駆け抜けた。

彼らがもし。

戦いを好んでいなかったとしたら、どうだろう。

こうやって木々として生きることとたやすく受け入れたらどうか。人ではない、ということ望んだらどうか。

この風を受ける喜びを知るとは、二人にはできない。からだを揺らす風が喜色を生んで彼らを慰めるならば、幸か不幸かはすでに単に人であるだけの者が考える尺度からはずれてしまっただろう。

さらばです、という言葉、トーリは聞いたかもしれない。

「佐将殿」

「はい」

「こんな仕業ができる人間はそう多くはない」

そういつてトーリは幽愁さをとりはらって、ぐるりと周囲を見渡した。

「相手の魔手でしょうか」

「何人だ、向こうの魔手は」

「三人と聞いております」

「それは無理だ。いくら手練れであろうともあれだけ短い時間で、複雑な基板の改変は行われない。特に人は変わりにくく、もはやはなれわざに近い」

首を横にふったトーリに、ベルトレはふと先程の光景を思い出した。

「黒い板のようなものを見たのです」

「なに」

「將軍の隊の魔手たちは黒い板に飲み込まれたように見えました。錯覚であると思ったのですが」

「黒い板か」

トーリはあごをなでて、少しの間、押し黙った。

「こころあたりがありますか」

「いや、うむ」

ベルトレが長靴の音を耳にして後ろを振り返ると、トーリの命令を待たず、法王騎士団の兵士たちは隊伍をただし、指揮官たちを取り囲んでいた。

彼らの行動にベルトレは無言の賞賛を送った。事の起こりも出来事も、理解することをせずただ受け入れられる人間は無二の強さを持つと思う。少なくとも兵達に求められる資質のうち、高い割合を占めたいのはこの部分だ。

ベルトレは兵達への賛辞と同時に、トーリという人間の偉大さを感じた。

足もとにもおよばない。

彼は、將軍トーリにはじめて素直な敬意をもった。

隊を任された者は、ただ兵を率いるだけである。失われた命をかえりみることは、なかなかできるものではない。もうきつと、数えることもわすれるほどの戦塵にまみれた將軍の武歴を、ベルトレはだで、主従との呼吸で、感じた。

「まあ、よい。いずれ、でくわすであろうよ」

トーリは笑った。

「我々も樹木にされるかもしれませんが」

「どうか。魔手は基板の世界の干渉を受けやすい。自分の施術で己を傷つけたというはなしもある。それよりも佐將殿。シエドはすぐか」

「はい」

「そうか。すくない観測で悩むのは無駄だ。シエドに向かおう」  
「は」

ゆるゆるとトーリの馬が動き始めると、全員が従った。

「佐將殿は基板が見えるといったな」

「え。ええ」

「魔手たちがいなくなった。そなたに期待している」

「そんな。期待されても困ります」

ベルトレは萎縮して小声になると、とうとうトーリは哄笑した。

「ははは。持ち前の大声はどうした」

老將はそれから、ベルトレの前に出た。

「わしを冷血だと思うか」

「は。あ、いえ」

「正直なところをいえ」

「私は特になにも」

「こころない獣と同じだと思わなかったか」

「こころはこの世のすべてのものにあるとおっしゃったのは將軍です」

「感情だけが、こころの動きのすべてではないのだ」

ベルトレがトーリの発言の真意を探ろうとして並びかけようとすると、トーリは馬でわずかに進路をさえぎった。

佐将は首をかしげる。

巨木が風にゆさぶられ、葉を鳴らした。

木々とおなじように、からだをわずかな振動にさらされたベルトレは、トーリの背もゆれている気がした。

まさか、と何かに思っていた。

首をふって否定したベルトレは、しかし、馬の速度は持続させたままにした。

魔手たちだった巨木の間を進むとき、ベルトレがふと幹に目を遣ると、もうそこに人の痕跡はなかった。

異様な気配を察して卿が振り返ると、カンファイは馬を止めて昼間のように赤らんだ空を向いていた。イリシアやツアイは何事かという顔で、卿の視線を追った。

「どうした、カンファイ」

もうすっかり卿たちを人質だと思うことも忘れて進むアルゲラも、馬を止めさせた。

「基板が階層ごと動きました」

「トリー殿の魔手の仕業ではなくかい？」

「はい。先ほどまではおおきな動きはありませんでしたから。特に急に」

緑から赤へ。

美しく鮮やかに羽振りを整えていた森の木々は、すべて炎色のもとに吸い込まれて灰に帰ろうとしている。

ならんでおかれていれば多少違和感のある色彩の変化が、卿らの視線の先、あの夜の下でおこっていることは想像にかたくない。しかしその、手に取るような想像もつかない変化を、若い魔手は鋭敏に感じ取っていた。

「階層ごと、とはどういうことです」

副官が眉をひそめて卿の側に寄れば、ツアイも首を上げて卿を見た。

「魔手たちが基板の改変をおこなうと、基板と基板のあいだに隙間ができる。おこりにくくむずかしい変化が基板にいたればいたるほど、隙間は広くなるらしい。基板は層をなして存在していることが多いようだから、よほど大きな変化が向こう側の世界であらわれたようだ」

「おそらくですが」

カンファイが卿たちに顔をむけなおして、口をはさんだ。



「人の基板が改変されたと思われます」

「うちの隊のだけれが」

気色ばんだイリシアを魔手は冷静になだめた。

「いえ。普通の人間を改変することはほとんど不可能です」

「しかし人といえればそれ以外にいないじゃないか」

「魔手ならあります」

イリシアの氣勢を削ぐように、話題の中心にいる魔手はゆっくりとこたえた。

「魔手ならか。そのわりにカンファイ、君の顔には余裕があるね」

「卿の麾下ではないのです」

同じ魔手の身にふりかかった異変に、カンファイたちはいち早く察しをつけられる。

人間が持つ、ひとりひとりの基板は違う。魔手は、基板の世界に強く依存しているので、無意識のうちに基板に干渉し続けている。

こっちの世界、と彼らはいうが、そこに居続ければ魔手自身の基板もはつきりと映像になりやすいようで、カンファイはそのいくつかを容易にさぐりあて、自分の仲間のものでないことを確認していた。

「卿」

「なにがおきたか、その目で確かめたいか」

卿の声に、カンファイははつきりとうなずいた。

狭隘な山道から、森は見えなかった。

「私もだ」

若い魔手の顔に憐憫の色があらわれたのを、卿はけして見逃さなかった。

カンファイは経緯のほとんどを把握している。それでもなお、近づいて正確に感じたい何かがあるのだ、と卿は解した。

「アルゲラ」

「なんだ」

彼のこたえには棘があった。

無理もない、と卿は思った。少しでも急ぎたいと感じるのが人情

に違いない。

だけれども、ふつうの人間である卿にも感じとれる、大気のよどみのようなものが確かにあった。その事実を咀嚼しないまま、先にすすむことは卿もしたくない。

それに。

モリアスの安否を、卿は少しでも早く知りたかった。

「一度引き返したい」

「なぜだ」

「トリー殿の身が心配だ」

「卿」

イリシアの非難がとんだ。馬にまたがって彼女は、香気をはらんで卿を下からのぞき込んでらんだ。兜をとって、紫色にそめあげた髪をくくって、町ではたらく娘のような格好でも、イリシアの視線はつよく輝いた。

「將軍はあなたを追っている。命を、奪おうとしているのです」

「わかつているよ。しかし、我々が生きる道には必ずトリー殿が必要だ」

「盲信では、と進言いたします」

「そうかもしれない」

卿は不敵に笑った。

「どうか我々の命をあずかっている御身であることをお忘れなきよう」

「私はいつも忘れてなどいないよ。君の存在が私にその事実を忘れさせない」

「冗談ばかり」

「冗談なもんか、私は冗談は嫌いだよ」

「遊興はたしかに嗜まれますが、冗談がお嫌いだとはいえもしませんでした」

「ずいぶんと誤解されたものだね。隊の皆には内緒にしておこう。私達の仲がよくないと知られれば、余計なおせっかいをやかれてし

まう」

イリシアは、卿に正対していった。

「あなたっていつもそう」

「ええと、何か問題があったかな」

「なんでも」

見透かされているな、と卿は頭をかいた。

副官は卿に反省の余地を与えない。

「トリー將軍は、卿のことをご存知ではないのでしょうか」

「知っているはずがないんじゃないかな。私は王宮に仕えてもう十年になるが、トリー殿とまみえたことは実は一度もない。しかし、トリー殿が動けば、かならずシルビアの版図は拡がるといわれたし、実際に成し遂げた。おそろしい人だよ」

「卿にも戦歴があります」

「トリー殿と比較するなど無謀だよ。それに、私はあまり目立ちたくない」

卿はイリシアとの会話を区切り、話を聞いていたアルゲラに向き直った。

「どうだろう、引き返すことを許してくれないか」

「わがままな男のことだ。どうせなにがあっても聞き入れないつもりだろう」

卿は笑った。

「引き返さなくていい。もうすぐ、少しだけ視界が開ける場所に着く」

アルゲラはそういうと、馬首を転じて進路をシェドに向けた。

卿たちはおたがいに目で語りあい、偉丈夫のひろい背中を追った。彼らが、岩と岩の隙間から、広大な森林だった黒い大地を見たとき、どうしようもない違和感に気づく。

「なんだあれは」

アルゲラ以外に発声はしない。

卿は思わず目を細めて、街道を見下ろした。

彼らは見た。

白煙の中にそびえる幾本の巨木を。

卿たちは山間の道を選んでいたので、視点はたかく、森のあった場所を俯瞰できた。

その高さを。

思わず見失いそうな巨大な木々。

ひろくゆたかにたずさえた葉さえ、夜の闇と、残り火のきらめきの中で、揺らいでいるのが確認できた。

「カンファイ」

呼びかけた魔手はきつく瞳を閉じて、両手を木々にむかつて突き出していた。

指先が素早く動く。

魔手たちが基板に干渉するとき、彼らは一様に同じ姿勢をとった。

「人の痕跡が見えます」

「あんな離れた場所の基板に触れているのか」

アルゲラがカンファイに問うと、魔手はわずかに目を開けて、

「基板の世界は『むこう』と『こちら』ということが非常に曖昧なのです。私の目前にはいま、あなたが立体的に見えているかもしれない世界が、ほとんど同じ平面にあるように見えています」

といった。

見ているかもしれない、とはうまれてからずっと一度も現実の光を捉えたことのないカンファイだから口にできたことばだな、と想到した卿は、ふと、それでは彼に見えている基板の世界を照らす光とはなんだろうと考えた。太陽でも月でもなく、炎のようなあかりでもないとするといったいどういうものか想像もつかない。

「ああ早い」

「まだ改変されつつづけているのか」

「ええ。とてつもない使い手です。燃やされて消えそうな森の基板と、人の、魔手の基板をたくみにむすびつけている」

「そんなことが簡単にできるとは思えないなあ」

卿は思わず苦笑した。

「我々には、とても無理です」

カンファイは、基板を追うのをやめて手をおろした。

「あれはトリー殿の隊の魔手たちなんだろうね」

崖下からはい上がってきた風が、兜をぬいだ卿の、汗で湿った黒髪をなでて過ぎた。

「おそろく」

カンファイは落ち着いてこたえる。

ふたりの間にはしった風に、血なまぐさい意志を感じなかったことに卿は、おのれをいぶかしんだ。熱気をふくまず心地よさだけを残した風など、今日はこれまで感じていなかった。この場で起きている戦闘そのものの、風向きが変わっているのかもしれない。

「なにがおきている。あの木はなんだ」

アルゲラが問うても、卿には私にもわからない、としかいいようがなかった。

人智を超えたところに魔手の存在はある、そう思ってしまったのは魔手たちをどこかちがう世界におしやってしまうことになる卿は常々考えてきたが、やはり住んでいる世界はちがうのだ。

卿は自分のもっているこころの視点を切り替えなければならないと、自分を戒めたのだった。魔手とはこういうものだ、というこだわりが、カンファイたちを、そしてゆくゆくは己の部下たちを殺してしまう事態を招くような気がしたからだった。

「悲しいことです」

「何がだ」

イリシアがカンファイの顔をのぞき込む。灰色に沈んだ魔手の瞳の上を、炎の光がよどんで、はぜていく。

「仲間がやられました」

イリシアは声を荒げた。

「カンファイ、お前までそんなことをいうのか。トリー殿は敵だ、ただただおそろしい敵なんだ。甘いよ。トリー殿の魔手が消えた。

これで我々はまだ生き延びられるかもしれないというのに」

「それでも」

魔手はいう。

か細く消えそうな声で。

「かれらは私とおなじ境遇で生きてきた仲間なのです」

「カンファイ」

イリシアも声をおとした。

卿は、ふたりのことばの響きを、何度も胸の底でくりかえした。

魔手たちはお互いがお互いを助け合いながら生き方を探っている。かばいあいながら、といってもいいかもしれない。トリーや、卿に選ばれた人間はいい方で、祖国を捨てるということに異常なほどの抵抗を示すシルウィアという国は、魔手を虐げながらも戸籍にはしっかりと繋ぎ止め、つまり彼らは見えない檻の中で生きることを選択するしかない。

魔手も人だが、彼らはすでにひと繋ぎの共同体だった。

彼らの強さは、望んで力を手に入れた後天的な魔手たちにも寛容であるように、すべてを受け入れてしまっても大きな器だと卿は感じている。実際、基板の存在を肌を感じることで、魔手たちは非常に直截的な意志のやりとりを実現していた。

シルウィア人の多くは、その事実を知らない。

同じ土地に住む人間たちとの価値観の相違が、カンファイに、敵であるはずのトリーの魔手も、自分の身内であるといわせた。

「しかし不思議だ」

卿が首をひねると、みなは彼を向き直った。

「魔手を魔手が殺したのか」

カンファイの心理は魔手の、ほとんど通念と違っていいかもしれない。魔手たちと行動を共にしてきた卿には、それがわかる。できるなら、お互いを敵視したくないと思いつてきた彼らが、同じ法国内の魔手同士で力を競いあわせるなどということがあつたらうか。「アルゲラ。シェドに魔手はいるのかな」

卿の疑問は当然の帰結で、しかし、

「いや」

といったアルゲラのことばですぐに霧散した。

「ならばいったい、誰があんなことをやってのけたのだろう」

カンファイをはじめ、卿の隊にいる魔手は、抜群の基板操作を誇っている。能力に優劣があるのは魔手も同じで、卿は従軍の意志のある魔手の中で、彼らを選ぶとき、三人以上に能力のある魔手には出会っていないかった。トリー隊にも、名の知れた魔手がいたはずだが、彼らの抵抗を受けず、木々と一体化させるほどの使い手が、自分の知らない範囲にいたとは、卿には少し信じられない。

「おい卿よ。まさか貴公らは、あの木々が人間だったとでもいうつもりなのか」

「そうだよ」

「人間が木になった。そんなことができるのか」

「さつき私もおなじことをいったよ」

卿はさやかに笑った。

アルゲラは目を数回、驚いた子どものようにまばたかせると、おそろしいものだな、とまたつぶやいた。

「トリー殿の元から、魔手たちが消えました」

イリシアから香気がかよう。

卿は、いつもより大きく息を吸って彼女をみた。

「將軍はこのままシエドにおすすみでしょうか」

馬にまたがるイリシアのふたつの瞳に、かたくきらめく武人の色が浮かんで、疑念が声ににじんだ。

「たしかに。モリアスが伝えた軍容は五百だった。同じ価値観を共有しているひとつの集落を攻めるにはすこし物足りないね」

「シエドには戦える人間が二千はいます」

斥候として宮城の門をくぐるまえに、卿たちにはシエドの近況は伝えられていた。多少の目算の相違があつて、伝達の齟齬や、シエド側が隠蔽している兵力があると考えたと、もう少し上積みしてお

きたい。

アルゲラが、それでは少ないと付け加えると、卿はうなずいた。

「そうだとすると、トーリ殿もくるしい」

「五百か、それはいいことを聞いたな」

アルゲラが余裕を笑みに浮かべたので、卿は諫めた。

「まともにぶつかれば、シエドは半数をたやすく失う」

偉丈夫は驚かない。

「頼みの魔手もないのだろうか。半数が残ればいいほうだ」

「魔手がいないことが、トーリ殿の弱みだと思うのであれば、改めることをすすめる。それにその後、本国にすべて残らず蹂躪されてしまう。一族、郎党すべてだよ。それでもいいのかな」

「何もかもきれいになって消えてしまうのなら、それもいいかもしれないな」

アルゲラは、濁りのない笑みを夜気にはなつた。

卿は、まさか本気だとは思わなかったので、

「それでは私にはなれないね」

と、とぼけてみせた。

「ねえ卿、トーリって人、もともとシエドにいくつもりだったのかな」

みなのお話を黙って聞いていた、ツアイがぼつりという。彼は、アルゲラに腕をえぐられた記憶がまだ新しいようで、シエドの偉丈夫に親近感を抱けず、卿の後ろに隠れるように寄り添っていた。

それは、とイリシアは切り返して、卿と目を合わせた。

「そういえば、そうか。我々を捕捉するだけが目的だったかもしれないね」

「卿、我々はトーリ殿の思惑を推し量っただけで、確かに実状を把握しているわけではありません」

「しかしイリシア、將軍は森に火を放った。シエドを攻略するといふよりも、私たちを追ったと考える方が妥当だ。シエドを襲うのならば、森はあつた方がずつといい。ずつといいのだけだ」



と、いつて卿は頭をかいて、押し黙った。イリシアは小首をかしげて、卿を待つ。卿の隊にいる人間は、卿のことばをすべて待った。ほんの数分だったが、馬の息遣いだけが夜にしみ始めたとき、卿の唇が動いて、まなじりが上がった。

「なるほど」

「なにが、なるほどなのです」

「トーリ殿も、もしかしたら貶められようとしているのではないかな」

卿のことばに、イリシアとカンファイは戦慄をおぼえた。

「どういうことでしょう」

「トーリ殿だけではないな。シェドもそうだ。今回の件を仕組んだ人間は、私とトーリ殿、そして、シェドのどれかを、少なくともひとつは摩滅できるように、動いているように思う。あわよくばすべてを」

「そんな都合良く」

「考えてみてごらん、イリシア。ここで『聖族』が動くとする。トーリ殿を拘束できる理由があるとは思わないか」

「トーリ殿は法国の英雄ではありませんか」

「人はうらやんでしまう。英雄であることもそうであるし、トーリ將軍が凡才ではないことも」

私だって、そうだ、卿は思う。

法国のやり方に従って、王位を継承できる身分に受動的になったとしても、不可視の勢力が卿を貶めようとした。

「森に火を放ったことが口実になるとも」

「そうだ。トーリ殿が私を殺すためにシェドを襲い、シェドを奪いながら私も消すことができれば、あとはシェドとは友好を保つはずだったのだ、とでもいうだろう」

「そんなことをしていったい何だというのです」

「私にはわからないよ」

シルウィアは強大な国家になった。国の中枢にいる人間が得られ

る利益は、保守している土地が長大になればなるほど増えた。神経の通わない官吏も増えると、立場だけを保持して享樂を得るようにするほうが、人としては自然で、民衆とのこころのふれあいを労だと感じるようになれば、あとは自己を保全すればいいだけになる。己の足もとを堅固にするには、脅かす他人を地に伏させてしまうのが、もつとも効率がよいのかもしれない。

卿は思う。

抑制の効かない心情に判断を委ねた時点で、人としての価値は失われている。

自分を見つめ続けてきた卿は、制御し、己を統率することの重大さを感じていた。

「私は恐ろしい」

「卿」

「追われることも死ぬことも、私にはどうでもいい。しかし、自分のこころの統制がいつか失われてしまったとき、自我の外に立つ自分を夢想しない日はない」

「それは、客観的な立場におられるからです。死を恐れる我々も、死の当事者になる自分を外から見るから恐ろしい。現実ではないことに意識を任せるのは危険です」

「それでは法国の教えも消えてしまいかねない」

「そうではありません。正教の教義は、前世を信じることで余計な思慮を排し、この場を生き抜くことを教えてくれているのです」

卿は、鼻を鳴らして笑うアルゲラをみた。

ふと、卿はアルゲラの心象に私は寄り添っているのかもしれない、と感じた。

「おかしいか」

「ああ、おかしいとも。どうかしてる」

アルゲラは卿たちを蔑んだ。

「貴様、一度ならず二度まで我々を侮辱したな」

絹がすれるような音が、イリシアの刃から流れた。

卿は、咎めなかった。

シェドの存在に活路を見出したと一度は卿も思ったが、アルゲラとことばを交わすうちに、彼らを感じる、人と対峙するときの温度に差があることに気づいた。

同時に。

シルビア正教に純心から帰依したイリシアの言貌に、アルゲラの思考がだぶってみえた。

二人のことばには相違があるようで、実は同じことをいつているのかもしれない。

卿にはそこがはっきりしない。

おそらく、二人にも。

だから、ことばではなく、刃を交えることが意味を持つとしている。

卿は思考を続ける人だったが、流れに進んで身を任せることが、一定の成果を上げることを感じて知っていた。

二人の剣の軌跡の上に、私は回答を探しているのか。

卿の見たところ、ふたりの実力は拮抗しているが、技術の部分でわずかにイリシアが勝っていると感じていた。

おのれの残虐性を認めるのは苦痛だが、と卿は胸のうちに笑うしかない。

しかし、アルゲラは剣を構えなかった。

「貴公らは何年生きる」

目を丸くして、腕の力を抜いたイリシアの髪が、風に揺れた。こころも揺れた。

「な、なにをいつている」

アルゲラは気の抜けたイリシアを笑った。

「わしは、生きてもあと数年だろう」

「戯れ言を。早く剣をとれ」

「ほんとうだ」

「病なのか」

年端はカンファイと変わらないとアルゲラはいった。魔手はまだ二十代の半ばで、イリシアは見た目よりもずっと若い偉丈夫が、命を摩滅する淵にいたとは、到底思えなかった。

「寿命だ」

「うそをつけ」

「そういう一族なのだ」

「そんな」

「生まれついでにの宿命に、身を委ねるしかない。命が短ければ、自分を頼るだけで、だからわしは貴公らを笑ったのだ」

卿にアルゲラの気風が触れ、シエドの気位の高さを垣間見せた。

イリシアはことばを失う。

しおれそうになる花を愛おしくみるように、アルゲラは目を細めると、カンファイを向いて、

「魔手どの、いまならわしにも人の基板とやらがみえるようだ」

といった。そして卿に笑いかけた。

「卿が彼女をはなさない理由が、いまわかったわ」

卿は、自分がいまどういう顔をアルゲラに向けているか、わからなかった。アルゲラと差し向かっているのは自分の心象だけで、卿の身体の表面的な部分を感じる能力が消え失せてしまったようだった。

恐らくイリシアも、同じ感情だろう。

感情の行き来にイリシアは普通の人間よりもずっと多い熱量をともなう。そのことを知っている卿は、彼女の胸裡をはしる鼓動の方向を断定した。

程度はもちろんあるが、卿は、人がある可能性を得るまでには、一定の時間が必要だと考えていた。

彼らが思考の一部を放棄してしまうことを卿は非常に残念だと思っていたが、切り捨てなければ全うできる人生がないのならば、あるいは仕方のないことなのかもしれない。

「魔手どの。気休めに聞くんが、人の寿命を制御することはできない

のか」

カンファイはゆるやかに首をふった。

「基板からは、命の尺度を知る情報は得られません。知ることができないことに対して、魔手は無力です」

お力になれず申し訳ない、カンファイが頭を下げると、アルゲラは吹き出した。

「なに、気休めに過ぎん」

卿は、自分が馬の背にまたがっていることをようやく皮膚で感じはじめた。

心象の風景をただよっている間に、アルゲラの脳裏をのぞき込んだ気がした卿は、すべて消え去ってしまえばそれでもいい、と先ほど彼がいったことばに嘘などないのだ、と思いいった。

自分の命が短いのなら、生きている間に何かを成すことよりも、最期の時を十二分に飾りたいと感じてもおかしくはない。しかしその考えに基づいて、人生の大半が、ただ戦に費やされることを考えると、卿はあまりに哀しくなった。

「シェドに急ごう。彼らはほんとうに塵になってしまふ」

「その気になったか、卿」

アルゲラは大いにはにかんだ。

その微笑みに、卿はつよく笑い返した。

「皆よく聞いてくれ」

こんなことになるなんて郷里を出るときには思いもしなかったな、卿は思った。

明るい夢想だけが先立って、自分が戦場を踏むなど考えもしなかった。

まして。

誰かに担ぎ上げられようなどとは思わなかった。

お前は、次代の王になるといわれただけで。

そう考えれば、王になるのが実に自然だと信じていたあの頃の私は、ひたすらに愚かだっただろうか。

「私は皆の命を守りたい」

王になる。

もしかしたら、あの占い師の老婆は。

いまの私の状況を見透かしていたのかもしれない。

「それ以上に、ひとつの生き方が人知れず均されていくのは、見るに堪えない。私は、人が営みを維持するためには、お互いの価値感の間にある程度の傾斜が必要だと思う。傾きがなければ物事は動かないからだ。そう考えると、シェドの生き方、シルウィアの生き方、どちらかが欠けてもならず、それらがもしすべて平らになってただシルウィアのみがこの地上に残ったとしたら、もはや何も生まれないのではないかとさえ思っている。一つの集落が消えることが忍びないのではなく、我々が生きる意味を護るためにも、私はシェドを失いたくない」

おのれの保身だけを考えるだけの愚かな隊長に。

卿はことばをつないだ。

「皆はついて来てくれるだろうか」

若い部下たちは、なにもいわず、ただ背筋を伸ばした。

卿はその姿をみて、目で笑い、アルゲラに向き直った。

「よろしく、卿」

アルゲラのことばに、卿は真摯に頷いた。

ウバールの指の動きは、モリアスには見えなかった。

魔手には随分親しんできたつもりだった。だが、モリアスのような素人の目にも、ウバールの技量はぬきんでていることがわかる。並の魔手から見れば遙か地平の彼方にいるようにも感じられるのではないか。

「名将は名将だなあ。あのじいさん、びくともしやしない」

モリアスたちには老将の姿は見えていない。ウバールは高い声で笑ったが、モリアスには壮年の魔手が何をいいたいのか、まったく理解できなかった。

ただ、眼下に睽目するほど鮮やかにあらわれた木々には驚愕した。もちろんモリアスだけではなくて、ルーシェやノルトにしてみても同じはずで、振り返ってみれば、とても恐ろしいものをみる目つきで、二人は魔手と尋常ではない速さで成長していった木々を見比べていた。

「想像を超えられることは楽しい」

魔手は仕事を終えたのか、両腕をおろした。肩の筋肉が不自然に盛り上がって、両翼の骨が黒い顔料のような服を張り出させた。

「それだけが生き甲斐だ、そうだろう少年」

背中がしぼられて声が出ているようだ、とモリアスは思った。即答できなかったのは、奇異なものに突如出くわした反射だったが、ウバールは気に障ったのか、

「違うか」

と、語気を荒げて騎士を見た。ルーシェが息をのむ音が、モリアスにも聞こえた。

少年の面影が色濃く残るモリアスには、すべてがすでに予想外で、とても何か興の乗るものを探すことなどできないと思った。彼はただ、わからないと応えた。一城ではなく、一国を傾けられる魔手と

は、こういうものか、という感慨がモリアスの通身を貫いていたのだった。

魔手はつまらなさそうに息をはく。

ノルトが声をかけた。

「シルウィアの兵士は止まったのか」

「いや」

「あなたは、止められるといった」

「トーリの手となり足となる魔手は、一人残らず、すべて森と同化させた。血肉を根こそぎ奪われたトーリが、もはや健全に立ち上がれるとは思われないがねえ」

眼孔にたたえた光が闇の中で薄らいでいくように、ウバールの気色は柔らくなかった。

変化の兆しを知っているのはモリアスだけだったが、ウバールだけがまた、モリアスの心象を汲んでいた。二人は言外に契約したようなもので、お互いの顔を見合わせると、微かに笑いあっていた。モリアスの笑いは多分に引きつっていたかもしれないが。

「とはいっても」

ウバールは黒い手袋のしわを伸ばしながら、ノルトを見た。

「このままあのじいさんがくれば、シエドは苦労する」

「どうして。魔手はトーリの手足なのだろう。手足がなくて、何ができる」

「手足などなくても何かを為すことができる人間が、この世の中には確実にいるのだよ」

ウバールはおそらく、魔手のことをいったのだろう。カンファイたちに身近に接してきたモリアスにはわかる。

だけれども、モリアスは、卿のことも思った。

トーリやウバールに及ばずとも。

卿にはその力があるような気がする。

「トーリ將軍が追っているのは、僕の上官です。シエドをどうにかすることが本当の狙いじゃない」



彼にしてみれば、モリアスの発言にノルトが驚いて顔をしかめても、争点はずっとそこだった。

「だが、トーリは森を焼いた」

ルーシエやノルトと出会い、シエドの領域に住む人々の息づかいがシルウィア人としてのモリアスの心象と交雑をはじめると、周縁地域の均衡がいくつにも折り重なりながら、実にあやうく保たれていることに彼は気づいた。

しかし、ウバールの一言に集約されるように、もはや人々は平静ではいらなくなってしまった。魔手のことばに反応を示したのは、ノルトではなく、ルーシエだった。

「早く父様の元へ。話はそれから。誤解を解くのはきっと、難しいけれど」

少女の視線はまっすぐに魔手を射抜く。

「ウバール、さん。ましゅのことをきちんと教えて」

「おやすいごよう」

モリアスはただ、ことの推移に付き従うしかない。

ふと、いつのまにか自分のからだが軽くなっていることにモリアスは気づいた。はっと脳裏に閃くものがあつたので、ウバールを見る。彼は薄く笑ってこたえると、ルーシエに続いて歩き始めてしまった。

ウバールは一族の長の娘に、魔手の概略を伝えはじめた。伝説と呼ばれる魔手の応答は的確な、というよりも、経験からくる洞察に満ちていて、モリアスはおそらく卿も知り得ていない魔手の原理に触れた。

「甲冑は脱いだ方がいいわ」

ルーシエは途中、モリアスを振り返って忠告した。

長の娘のいいたいことがわからないモリアスではないので、甲冑の大半を道沿いに落とした。シルウィアへの思い入れがわずかに勝って、手甲だけは残した。

今まで気にもとめなかった重みを両手に感じながら前を向くと、

彼女は泣きやむどころかすでに指導者としてふさわしいような威圧感を持ち始めているようで、ウバルと議論をする彼女を見ながら、モリアスは、護ろうなどと考えた自分を不審に思った。

甲冑を取り去り下衣だけになると風の温度が変わっていることがわかる。湿気だらけで不快だった夜の空気は消え去り、ほんのわずかではあるけど、モリアスの体温を奪っていく乾いた微風が山肌をはい上がっていた。森がほとんど失われたいま、大地は水気を保持する能力を失ってしまったかもしれない、軍略に関する教育を受けてきたモリアスは、攻城についての授業を思い出しながら、平坦で黒く焦げた大地を見てそんなことを考えた。

ウバルとルーシエの後ろを少し離れて歩くノルトは、口をつぐんで不満そうな表情をしている。声をかける義理はなく、法国に抱く悪感情をシエドの人間からまともに受けたモリアスには、ノルトのそばに寄ることさえはばかれるように感じられた。

ただ、ルーシエと思うように意志を通わせられないもどかしさは、卿の考えを追従しきれなかったモリアスの身にも覚えがあるので、ノルトには同情した。

「あたしは魔手にはなれないの」

ルーシエのことばがモリアスの思考を裂いた。

「なれないこともないのだがねえ」

「方法がある？」

ルーシエは真剣だった。

シエドが置かれた現状は、苦しい。今はまだ剣戟が交わされていないが、戦闘が始まれば、シルウィアがシエドを許さないことはルーシエにはわかる。少女は、シエドを活かす道を模索している。

「これを修めれば必ず魔手になれる、というものはないのですよ。魔手には素質がいる。私なぞ、生まれてこの方ずっと魔手だ、特に何かをしたわけじゃない」

「特別なのね」

「そうですとも」

「あなた以外の魔手たちは、どうやって魔手になった？」

「巷には、あやしげだが確率の高い手法はいくらでも転がっている。魔手の多くは、特に好きこのんで魔手になった連中は、そういった手法をとったようですなあ。もつとも、そのほとんどは、自分のからだをどのように傷つけるかというもの」

モリアスは、そして、ノルトはルーシェを見た。彼らには少女が、すぐにでも目の前の選択肢に足をかけそうにみえた。一度踏み込んだら二度と這いあがれない谷底に落ちてしまう道に、それでも必然があると少しでも思ってしまうえば、二人にはルーシェを止める術がなかった。

「どうしてそんなことをするの」

「そうしなければ触れられないものがあるのですよ」

魔手は、観念的なものではなく、といって、基板の存在をルーシェに語った。

「からだを痛めつけられれば見えるのね」

「そのように、いわれている」

「なぜ」

「わからない、としかこたえようはないですなあ」

「あなたにもわからないことがあるのね」

「そんなものはいくつもある。わからなくても誰かが得をしさえすれば、よいというものも数多くありますな」

「それはそうかも」

「ただひとつだけ、私にわかっていることは、基板というものがこの世界の根源だということです」

ルーシェは、魔手の声色が変わったのを感じ取って、押し黙った。「根源でありながら、存在が認知されていない。魔手たちは、己のからだを己の意志で傷つけることで、自分という実存を限りなく削り取ろうとしているのかもしれないなあ。存在が消え去っていく過程で、はじめて基板を見ることが可能になる」

「幻覚かもしれない」

「それでもこの世界はまわっているのです」

ルーシエは、ウバルルの顔を凝視したままだった。

ウバルルは少女を試すように、ことばを継いだ。

「おじょうさんには向かない」

そうかしら、とルーシエがいえば、ウバルルこそ悪魔のような形相で、ルーシエに様々な選択肢を用意できた。が、彼女は、

「時間がかかりそうね」

とつぶやいて、魔手から視線を逸らした。モリアスとノルトはまったく同じように息を吐いて、お互いの顔を見合わせてすぐに目をそらした。

「あなたに頭を下げた方が早い」

「はあ。それは賢い選択だ。気に入りましたよ、長の娘」

「ルーシエ」

「そうですね。では、ルーシエ殿。悪いが私も商売でしてねえ、あなたに頭を下げられたからといって簡単に、はい、とはいわない」

「あたしが小娘だから」

「そうだ、といわせない気位をすでにあなたはおもちだ」

「ほめたのね」

ウバルルのことばに強気で応対するルーシエに、モリアスはたじろいだ。モリアスの中では、突如大量の木をうみだした時点でウバルルは神格化されつつあった。とても自分には真似できない行為だ。なるほど、ツアイが女を嫌いだというのは、つまり、女性という存在が多分に劣等感を男に抱かせるからだろう。泣き崩れてしまったルーシエと、いま魔手と対等に話すルーシエの内面に、どのような変化が起こったかはモリアスにはわからない。が、彼と彼女の優位性が論理的な思考の外で入れ替わってしまったことだけは間違いないさそうだった。おそらく、女性と過ごす日常にはいつもこんな話が転がっているというわけだ。とすると。男は自覚している以上に揺さぶりに弱い生き物かもしれない。

状況は、モリアスにそれ以上の考察を許さない。

「トリーを私に引き渡していただきたいですよ」

「殺すな、ということ」

「そうなりますな」

「約束はできないな」

「ならば、私も期待には添わない」

「何か隠してます？ウバルさん」

「隠していますとも」

「教えて」

「お断りですなあ」

ウバルは両手を広げて、おどけてみせた。

ルーシエは、さつと腰の短剣に手をかけた。しかし、短剣はすでに魔手の手に握られているのだから、それを端から見ているモリアスは、口を開くしかない。

「まるで奇術ね」

「知らなくてよいことがあります」

「そこまでしゃべっておいで、知らなくていいとは、ずいぶん傲慢なのですね」

「率直に申し上げて、あなたがたには関係がない」

「そう」

ウバルは、少女に短剣を返しながら続ける。

「まあしかし、シエドの力であるの將軍をとらえるなど無理か」

今度は、ノルトが黙らなかつた。

「ウバル殿、いい過ぎだ」

「ふん。実際に戦えばわかるはずだがねえ」

少年、名はなんだ、魔手はモリアスに話題の切り口を移した。

「モリアス」

「モリアス、トリーの軍容を把握しているな」

状況によらず、もともと嘘がつけない人間であるモリアスだったが、魔手が思考を読むことで、選択肢さえ許されないという違和感を感じながらも、彼はこたえた。

「騎兵三百、歩卒が二百弱」

法王騎士団は、創設時から一貫して五百という数を崩さなかった。トーリの顔を見間違えることのないモリアスは、ほぼ正確な数字を把握している。

「たったそれっぽちか」

「ルーシェ殿はどう思いますかなあ」

少女はさつと魔手を一瞥しただけで、すぐに前を向いた。

「さあ。あたしにわかるのは、シェドの人間もそこそこ戦えるというだけ」

山道が別の小さな道と交錯する。

モリアスを含むすべてが、物音に反応した。

人影が一つある。

「おおう、ルーシェじゃねえか。戻ってきたのか」

といった男にモリアスはすばやく視線を送ると、馬上にいる男の背中に、かつての兄貴分が意識なく寄りかかっていることを察して身構えた。キル殿、とは口について出せないことはモリアスにもわかってる。

ノルトもウバル殿も、といって軽口を叩いた男の細い目がさらに薄められて、心象と身上の駆け引きの末、一歩だけで踏みとどまったモリアスをとらえた。

「お前」

戦闘を好む目だ、とモリアスは思った。味方がいない状況にほとんど陥ったことのない若い騎士は、こころが歪んでしまうような緊張感にまたさらされることになった。

「シルビアの」

「あなたもウバルさんを知っているの、イーリエ」

ルーシェにモリアスをまもる気があったかは彼にはわからない。

が、助けられたとモリアスが思ったとしても仕方がないほど、若い騎士の脳裏は緊張の連続で疲弊していた。

「なんだよルーシェ、つかかるんだな」

ぱつと細い目を見開いて、浅黒い肌の男は確実にうるたえた。

「あたしの知らないことばかり」

「ちゃんと、相談しようと思ってたんだ」

ノルトが弁明に入る。もちろん、彼女が耳を貸すようなことはない。

「今日は祝祭の日。あんたたちは祭りの担い手で、それなのにどうしてここにいろの」

「それは」

「こたえられないわけ。いやだなあ。あたしはずっと仲間だと思ってきたのに。あたしにいけないことがあるんだ」

イーリエは抗って声を上げると、後ろで結んだ黒い髪がゆれた。

「でも、そのおかげでこうして侵略者をくいとめることができた」

「侵略者かどうか、わからないじゃない」

ルーシエのことばに、二人のシエド人は耳を疑ったようだった。

「おいルーシエ。いくら長の娘だって、そのことばは聞き捨てならねえな」

「イーリエやめろ」

好戦的な瞳が今度はルーシエに向いた。

「いいやノルト、この白黒は、はつきりさせとかなきゃならねえ。

ルーシエ、俺たちの敵は誰だ」

「シルウィアよ」

彼女は迷わずこたえる。

モリアスは胸が痛んだ。おそらくモリアスよりも若い世代の彼女が、おくびも出さずに反応する憎悪の対象が自分の愛した国なのだとどこか気心を知ったように感じていた少女の口からあらためてそういわれると、つらい。

「だろう。こいつの甲冑はシルウィア人のそれだ、敵が武装してこちらに向かつてる、何かあると思うだろうが、普通ならな」

イーリエは短剣を腰から目にもとまらぬはやさで抜くと、手首を返して放った。剣先がモリアスの足もとにしっかりと突き立った。

磨かれた刀身が、夜光の中で淡泊に輝いている。モリアスは、手甲にこだわった己を憎んで、さらに身動きひとつとれなかったことを恐れた。

「こいつはなんだ」

「仲間よ」

ことばに間をいれずにルーシエはこたえた。

「うそつけ。そいつはシルウィアの兵士だ。俺が森に落とした」

「顔をみたの。あんたの得意の飛び道具なら、姿形が見えるほど近づかなくてもいいでしょう」

「戦った相手のことなら覚えてる。もつとも、戦闘にすらなかったがな」

薄ら笑いを浮かべて侮蔑するイーリエは、急に真面目な顔つきになった。彼の馬が、ゆっくりと一団に近づいた。

「だまされるなよ、ルーシエ。そいつは忠実なシルウィア人だ。お前をたらしこんで、シエドを壊そうとしている」

「ちがう」

モリアスは、その否定の中に多少の嘘を感じた。小さな違和感だったが。

「黙ってろ、こいつを殺すぞ」

モリアスが押し黙るのを見て、キルの口元に別の短剣を突きつけたイーリエは、

「同じシルウィアの兵士をまもるために行動を慎むようなやつを、ルーシエ、お前は仲間だっていうのか」

「いった」

「そうよ」

どうしてそこまで。

モリアスは、若い長の娘が立場を危ぶんでまでモリアスを救おうとしている理由を探しあぐねていた。

「それが俺たちのシエドを危険にさらしても」

「さらさないわ。あたしはあたしなりにずっとシルウィアを見てき



た」

「たかだか数年じゃねえか」

「ほんとにそう思うの。あたしたちを殺すかもしれない、家族を粉々に砕いて、かたけないまで踏みつぶしてしまうかもしれないシルウィア人を、中途半端な気持ちで眺めてきたと思うの」

「情がうつちまったのか、ルーシエ」

男の馬はさらに一歩距離を縮めると、ルーシエはモリアスと短剣の間に割って入った。

「そんなんじゃない」

「何の関係がある」

「細かく見つめるようになったの、ひとを。宮城の門を出入りする人間の表情に、動き方に、感情が乗ることがよくわかった」

「だからなんだ」

イーリエの顔半分を、月光が照らした。

「モリアスにはあたしたちをどうにかする気なんてない」

「そんなものあてになるか」

彼の瞳にはつきりとした敵意が宿ると、さすがにノルトが口を挟んだ。

「もういい加減にしろイーリエ」

馬にとりすがった同胞を軽く蹴飛ばすイーリエは、暗闇に向かって唾液を飛ばした。

「いいやだめだ。まだ何もわかつちゃいねえこいつに、説教しなきゃ気がすまねえぞ」

モリアスは殺意にさらされ、剣の柄に手を置いた。もうすっかり血は止まっていたが、矢傷が痛んだ。ルーシエはそれを肩越しにたしなめる。

「あなたは何もしないで」

でも、といったがルーシエは目を合わせると、いいから、と首をふるのだった。

「ルーシエ、森の中からどうやって抜け出した」

「なによ」

「あんなに勢いよく燃えた森から、どうやって助かったんだ。ははあ、そうかおまえ、シルウィアとつながってるな」

「わけわかんないこといわないで」

「だから、知っていたんだ。いつ、森が燃えるか。ちがうか」

「ちがうわ」

「いいや、ちがわねえ。じゃなきゃおまえがシルウィア人を連れてきたりするはずねえ」

「だとしたらどうする気」

「おまえを殺す。そのシルウィアの男を殺したあとで」

イーリエの表層に冷たい気色が張りついたのを肌で感じたモリアスは、ルーシエを押しつけて前に出た。

「どうすれば信じる」

「誰がシルウィアの兵士のことなど」

「僕じゃない」

驚いた瞳を向けるルーシエを見遣って、モリアスは大きく叫んだ。  
「彼女のことだ」

イーリエは、鳴動した空気に微動だにしない山々のように、少しも変化をみせず、ただ淡々とこたえた。

「おまえが死ねば信じる。そうだろう、こんな簡単なことはねえ」  
心の底に。

モリアスは憎悪の火種を灯した。

論理的な整合性がひとつとして感じられないまま、己の死が身近にあることに、モリアスは強い嫌悪を感じはじめた。ひしがれて、歪みそうになる緊張の糸が突如切れてねじれが開放されると、モリアスの意識が外乱を受けたようにぼやけた。

「いいだろう」

ことばはもはや、モリアスのものではなく。

「そのかわり貴様も死ねばいい」

視覚も聴覚も、肌に覚えたすべての違和感も、モリアスの中で急

速にどうでもよくなった。

「できるわきゃねえだろ、腰抜けのくせに」

モリアスは剣を抜いて、足もとの短剣を蹴り飛ばした。剣の先が馬にあたっていないかと、イーリエは馬上から飛び降りながら腰の長刀を抜いた。背の上にあったキルのからだも墜落した。

「やめて」

ルーシエの悲鳴に近い叫びも二人を止めきれなかった。

剣戟が光の明滅をいくつか生む。

甲冑を脱ぎ、ウバールの手心を受けたばかりのモリアスは身体が軽い。

そんなことを本人は自覚していなかったが、イーリエはモリアスの意外な動きのよさに、一瞬だけたじろいだ。

ただ、足さばきの華麗さはイーリエの方に歩があった。人気のない場所を独歩してきた夜目も味方につけて、モリアスの剣の軌跡を正確に読み切り、彼の代わりに、風が悲鳴をあげた。

「ノルト、とめて」

うかつに近づけば、巻き添えをくらうことがわかってしているノルトは、動けない。

幾度かモリアスの踏み込む距離を算段する目的でわざと剣を受けとめると、呼吸をよみきったのか、イーリエはモリアスのふところに入り込んだ。

からだを後ろに大きくのけぞらせて、それでもモリアスの地肌をイーリエの刃が浅く裂いた。

「こんなことしてる場合じゃないのに」

髪を両手でかきあげて頭を抱えながら、ルーシエは叫んだ。

「ウバールさんもなんとかしてよ」

そこで。

少女は異変に気づく。

魔手はひどくいびつな顔で笑っていた。

くふくふふ、という声とも空気の漏れともいえない呻き声が、魔

手の口から聞こえた。両腕を二人にかざしたまま、魔手は恍惚の中で打ち震えているのだった。

突如、眼下に森林があらわれた記憶があたらしいルーシエは、あの燃えて痩せ細った大地の上で起きたなにかおぞましい事実が、いま自分の目の前にあらわれるかもしれないと危惧した。

「なにを、しているの」

魔手の瞳が、ぎろりとルーシエを見つめた。

「狂気はどこからやってくるか、ルーシエ殿は知っているか」

人とは思えない空気を纏い始めた魔手に、ルーシエは戦慄を覚えて、首をふる。

「くらい泉の奥深くからあらわれてくる。誰も知ることのできない遠い、遠い場所だ」

イーリエの悲鳴がルーシエを戦場に戻した。少女は、魔手の顔を思考の端に残しながら、二人を見た。

イーリエがうずくまり、左のももをおさえていた。

戦場に新しい影があった。

「キル殿」

モリアスは暗闇の中に屹立した、シルウィアの戦士の名を叫んだ。

キルは、モリアスに、

「傷は」

と、たずねた。

モリアスは、現実の世界にかかるいめまいをともなうて戻ってきた自分が、痛覚を認識できるようになるまで、キルのいつていることばの意味がわからなかったが、イーリエとの数回の交点のうちに、刀傷は確実に増えていた。

「私は大丈夫です。キル殿こそ、大丈夫ですか」

キルはこくり、と首を縦に振る。右手には、細身の剣が握られていた。シルウィアの兵士に配給される官製の直剣で、切っ先は夜の中でも血で濡れているのがわかる。

「いってえ、くっそいってえ」

激情が直結した瞳は、キルを向いた。

イーリエは足を押さえながらも、キルに対して短い剣を投げ飛ばしたが、剣を押し出す力が乏しいらしく、短剣は回転しながら失速しキルの巨体には届かなかった。

「てめえ、ゆるさねえ、ゆるさねえぞ」

イーリエの声だけが静寂をはげしく切り裂いたとき、モリアスは自分の怒気がどこかに消えてしまっていることに気づいた。

喪失感もなく。

違和感もなく。

自分の感情だと思っていたものは、どこかに忽然ときえてしまっていた。

ウバールの仕業だと思って、モリアスは魔手を見た。

魔手は、モリアスに気づいて、しかしかぶりをふった。

「やめて」

ルーシエが叫ぶ。

はっとモリアスは想像の枠を超えて、からだをイーリエとキルの対峙した方向へ切り返した。

キルは少女のことばを受けとめて剣を振るわなかった。が、巨体からくりだされた重い拳の一撃が、イーリエの懷に突き刺さって、地にくずおれるのを彼は見た。

彼の。

彼の憎悪は引き延ばされただけだろうか。

それとも、どこかへ消えてしまったのだろうか。

モリアスはふとそんなことを思った。

「狂気はどこからかきて、どこかへと消える」

魔手が傍らに立っていた。

「少年、自分のからだが自分のものなくなる気持ちはどうだ」

とっさには魔手の質問にこたえられないモリアスだったが、こころの中にウバールのことばを咀嚼する余地はあって、ちよつと考えながら、答えを口にする。

「ただ、むなしいだけです」

魔手は、ふむ、といっただけだった。

モリアスはふと、おもいいたって、

「將軍を、どうしたかったのです」

と聞いた。ウバールは質問に真正面からこたえない。

「血縁か」

「祖父です。もつとも、トリー將軍が僕を知っているかはわかりませんが」

美しくも恐れられる副官イリシアに、見間違えるはずがないと厳と伝えられたのは、モリアスの中に、祖父であると母にいわれて焼き付けたトリーの古い記憶があつたからだった。

「狂気と祖父を結びつけるお前のところに、私は興味があるのだがね」

「話を逸らさないでください」

「魔手の力を行使する私をお前は恐れていた。ところが今は、何もかも忘れたかのように、こうして私に問いをおこなう。不思議なことだと思わないか」

「何がいいたいのです」

「お前は何者だ、モリアス」

聞き覚えのあることばに、モリアスはぎよつとした。

かつて卿にいわれ、こころの中で何度も反芻し、いまだに答えを見いだせない問いかけだった。

「誰しもがその答えに窮する。私にしても例外ではない。しかし、おそらく、トリーはその答えを知っているのだよ」

「どうしてそんなことがわかるのです」

「基板を見ればそう思いたくもなる」

無精髭を丁寧になでさすって、ウバールはモリアスを見るとともにしつぶやいた。

「私にいわせれば、トリーは人ではない。基板の見えないお前にいっても仕方がないのだがね」

「何がちがうのですか、將軍と、それ以外と」

「基板の様相がまるで異なる」

魔手は語る。

人の基板のほとんどが、平面であらわすと、いわゆる楕円を基調としている。それは、人間のからだの部分部分がもつちいさな基板が渾然となっていて、だから、ぼんやりと細かな違いがいくつもある。もつとも、それを見分けられる魔手は一握りだ。

もちろん私はわかるのだがねえ、と自慢げにモリアスに視線をよこすウバールに、若い騎士はこのときはじめて、親近感を抱いた。

「ところが、トリーはちがう。あの老人には核になる楕円がない」

魔手がトリーについて話すたびに、モリアスの老将に対する距離感が変わっていく。

「これはとんでもないことだ。魔手にとってみれば、当然のものがあの將軍にはない、トリーに付き従っていた魔手の大半が、そのことに気づいていないはずはないのだが、もしかしたら、彼らはあえて見ていなかったのかもしれない」

魔手はモリアスをじつと見据えた。

「興味深いことにな、普通の人間にもある」

「何がです」

「核がなくなることさ、さっきのお前のように」

「え？」

「負の感情にそまると、核がうすくなる。そしてそこにまるで液体が流れているようなさざ波がたつのだ」

見つめる世界が異なれば、感じることもちがって、だから魔手の話には簡単にうなずけない、モリアスに予想がつけられるのはどうしてもその段階までだった。

しかし卿は、あの人だけは。

こころを思いめぐらしていたにちがいない、とモリアスと思う。

「どうやら波を起こしている力は、我々の世界のものではない。どこか違う異質なものだ。そんなものに、人間が規範を壊されている」

「壊されている、とはどういうことです」

「負の感情を本人が抱く前に、波がゆつくりと現れてくるのだ。つまり、我々の衝動は、予定されている」

魔手は続ける。

「見えないことがいいときもある。私は目を凝らしたせいで、かえって自分の存在というものがどれだけあやふやで、現実味のないものかわかってしまった」

魔手から目を逸らし、モリアスは足もとを見つめた。指からしたたる血の流れが黒々とした点になっていた。幸い、からだが動かないということもなく、血もおさまっていた。

「私は、トーリの戦いぶりを何度か見たことがある。彼は、沈着冷静で間違いのない良将だが、敵軍には残虐だ。まるで、いたずらに他人の狂気をあおっているようにみえる」

「それは、本当なのですか」

「ああ、本当だよ。トーリの基板にその都度揺らぎはなかった。おそらく、彼はご大層な使命感をもっている。私にはあずかりしらぬような。だから、私は試みに、トーリの胸裡が打ち震えるようにし向けてみた。彼が負っているものは何なのか、私は知りたい。求める答えがそこにあるかもしれない。だがねえ、結果はご覧のとおり。何もわからないままだ」

モリアスは深く考えねばならなかった。法国の人間にとって、トーリは誇りだった。

それが、ウバールのことばで異質なものに変容していく。

モリアスには、事の真偽を確かめる術がない。

ルーシエはいった。

あたしは魔手にはなれないの。

俺も。

モリアスの脳裏にも過ぎる。

魔手になるべきではないのか。

ウバールは、モリアスの表情に何かを見出したのか、たしなめる



ように彼をさとした。

「私は、狂気が人の存在を作っていると思ってきた。ところが、狂気にかぎらずおよそ、負の感情のすべてに人が委ねられると、自己は埋没してしまう。そして、その波が過ぎ去った時、我々にはただむなしさだけが残る。とすると、人とはなんなのだろう、そればかりを考えるようになった」

「トリー將軍はその理由を知っている、と」

「そう思うがね」

魔手は近づいてくるキルを一瞥すると、モリアスから離れていった。ことばにできない問いかけをいくつも魔手の背中に投げたかったが、モリアスはキルと対峙することにした。

巨体の影から、倒れたイーリエに駆け寄るルーシェとノルトの姿が見えた。

キルはそのあたりの岩ほどもありそうな大きな拳で、モリアスの頭を軽くこづいた。

「すまぬ」

モリアスはあらたまって頭を下げる騎士の先輩に、驚いた。

「なぜキル殿があやまるのです」

「俺の力が足りなんだ」

「そんな、それは私の問題です」

「卿に叱られてしまう」

「叱られるのも私一人で十分です。キル殿もツアイもわるくはない。そうだツアイは」

キルは首を振った。

「すまん」

「そうですか、いえ」

自分とツアイがまるで物見遊山のころづもりで歩いたせいだ、モリアスはいまでもそう思っている。

「とにかくにも無事でよかった」

キルは、モリアスの返答に渋面を作るだけだったが、若い騎士は

ふと、そこに、キルの中にいたくてもいえない何かが、あるように感じた。

「彼女に助けられました」

モリアスはそういつてルーシェを見た。キルはその視線を追う。ルーシェとノルトは、完全にのびてしまったイーリエを彼の馬の背に乗せていた。

「彼らをうらみますか」

キルの視線に不穏さは感じなかったモリアスだったが、普段から感情をあまり表に出さない先輩の騎士が何を考えているのか気になった。

「シルウィアも変わらない」

キルはモリアスを向き直って、いった。  
率直なおもいに違いなかった。

ルーシェが二人に近づく。

「嫌な思いをさせてしまったわね」

「いや」

「あなたも、敵ではないのね」

「いまはそうありたい」

キルの素っ気ない対応に、ルーシェは肩をすくめたようだった。

「シェドにご案内します」

ルーシェはキルにそういつて、モリアスとも目語を交わした。

あらゆることが不明のまま、彼女は族長の娘という立場に殉じようとしている。

モリアスは、疲弊の色濃い彼女をみて、はじめそう思った。

しかし、自分に向ける眼差しに寄りかかるような安らかさを求めようとする、微かな意志を感じ取ったモリアスは、ルーシェが進路の選択を迷っていることに気づいた。

モリアスは、彼女にかけることばのないことをはじめて悔やんだ。ルーシェは、首をかしげただけだった。

それでもモリアスは、彼女のもたげた首の角度の分、自分の人生

も変わっていくのだろうと、夢想するのだった。

出発はゆるやかだ。

しかし、きつと。

到達する地点は大きく変わる。

変わってしまうのだ。

モリアスの顔に、雫があたった。

見上げると、彼らの頭上には見るだけでそれとわかる重い雲があった。

さつと風が吹くと、空気の動きが鈍くなり雷鳴が轟いた。

大地が突如はげしく揺れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2942m/>

---

イノセント・ジャッジ

2011年9月11日02時18分発行